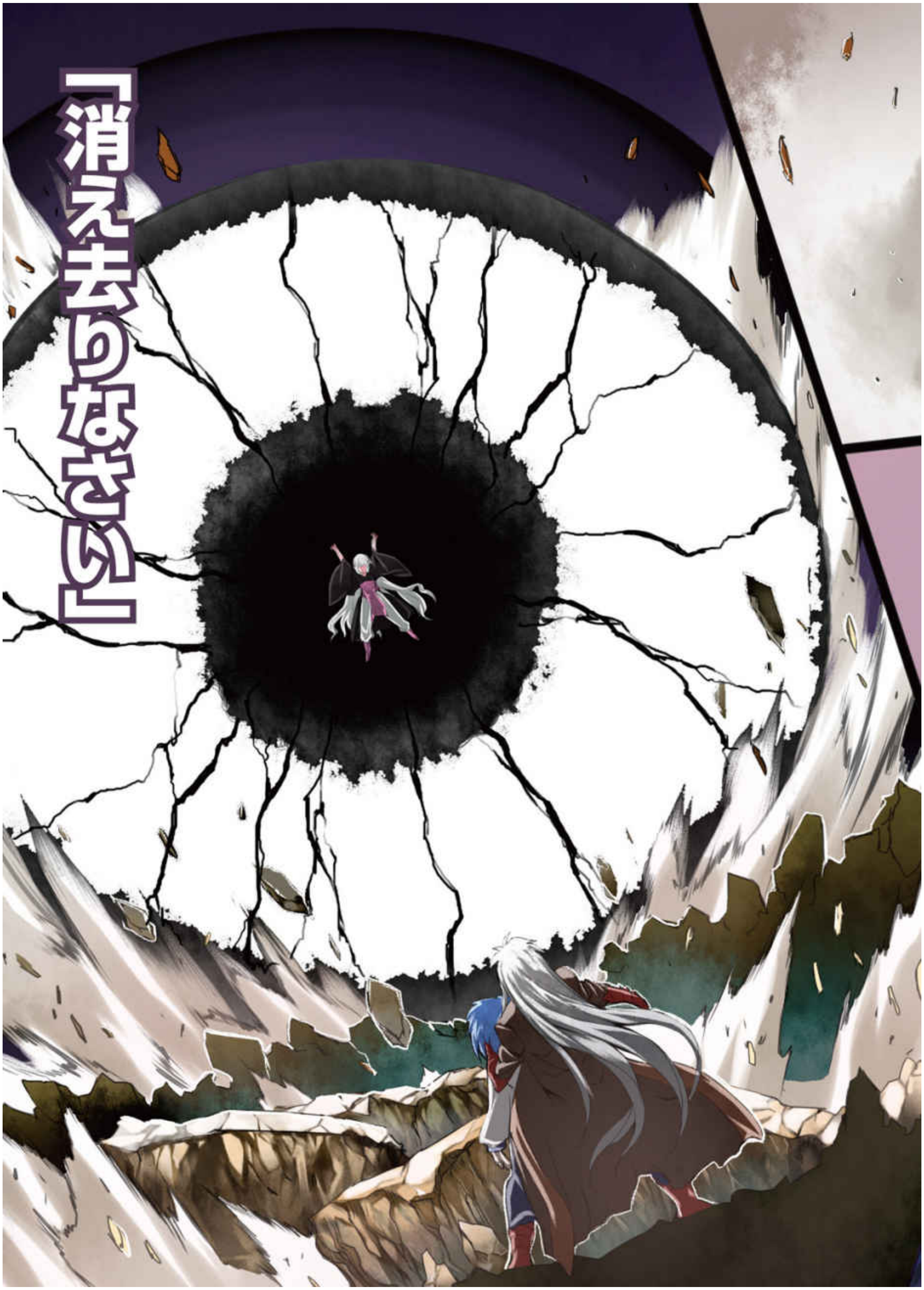

いちばんうしろの大魔王
ACT9
水城正太郎

HJ

HJ BUNKO HJ BUNKO HJ BUNKO HJ BUNKO


いちばん・うしろの
大魔王
ACT9


「これは、マナ・バースト……！」
「狂ったか……！」


「消え去りなさい」


「あれが君の言っていた物語か」
「そうだ。物語を打ち消す、大きくて、愚かな物語だ」

いちばんうしろの大魔王
ACT 9

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
はっとりじゅんこ
服部絢子
阿九斗に想いを寄せる一途で純情なクラス委員長。阿九斗の発言に動揺を隠しきれない。
さいあくと
紗伊阿九斗
将来「魔王」になると（再び？）予言された「善良な」主人公。初代魔王ゼロ＋皇帝という強力な敵との決戦に挑む。
えとうふじこ
江藤不二子
阿九斗に忠誠を誓う黒魔術師にして薬物使い。真の黒魔術の再興を目指し暗躍する。
そが
曽我けーな
阿九斗に懐いている天然少女。お米が大好き。果たしてその正体は……？
みわひろし
三輪寛
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。勇者ブレイブという顔も持つ。
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なう人造人間。しかしゼロと2Vによりコントロールを奪われてしまう。


木多淑恵（きたよしえ）
2Vに騙され、ゼロ復活の一因を作ってしまう。阿九斗のことを気に入り、その後は協力する。
リリィ白石（しらいし）
コンスタン魔術学院生徒会長。帽子がトレードマーク。喧嘩っ早く「小さい」と言われると切れてしまう。
加寿子（かずこ）
帝国を統べる皇帝。2Vの力を吸収し、初代魔王ゼロを支配下に置く。皇帝のみが使用できる3つの強力な魔術を操る。
けいす
ゼロと共に仮想空間内にいた小柄な少女。ゼロを封印する力を持つ唯一の存在。

未だこの女は、自分がどこで生まれたのかを知らなかった。
それでも、二十歳の頃には、すでに自分が何者なのかはよくわかっていた。
「あたしはあたしなんだよ」
つまり自分以外の何者でもない、ということを、彼女はわかっていたのだ。
だからこそ、彼女は厄介なそれに好かれたのかもしれない。
それは、どこからかやってきて、周囲の人間の記憶を改変してしまい、それでいて責任をとらない。
なく、触れることも不可能で、その存在を証明することすらできないが、人間の心を持っていない、いや、心がないとも言える。
彼女が四歳になる前、それと出会っていた。
親戚の人の家、孤児院、また別の親戚の家を転々とした生活の中、いつしか彼女は、誰かと話すようになっていた。何もない空間に向かって
りかけては、誰にも聞こえない言葉で笑った。そのことに周囲の人は気づいていたが、そのくらいの年齢
にありがちな、想像上の友達を作っているのだろうと思い込んでいた。
しかし、彼女は、自分の瞳の奥に浮かぶそれと、確かに会話をしていたのだ。
「あなたはだあれ？」
「だれでもないわ、だけど、あたしはあなたにこれからなるの」
「え？　でも、あたしはあたしだよ」
「それもただしいの」

「ふうん　じゃあ　そのままなんだ　あたしがふえるってことなの？」
「そうよ　あなたはあたしといっしょになるの」
「そうなの？　じゃあ　もうさびしくないね！」
「いいえ　ざんねんだけど　あなたはひとり」
「どうして？　あなたはともだちじゃないの？」
「あたしはあなたになるの　だから　ともだちじゃないわ　とてもかなしいことだけれ
ど　あなたはこれからえいえんにひとり　だれからもりかいされずに　とおいところ
にいくことになるのよ」
「それはいやだよ　ねえ　いやだよ」
「もうきまったことだから　だって　あなたはとくべつなそんざいだもの　くろばばた
けにあるよつばのくろばよりも　みけねこのおとこのこよりも　とくべつ」
「そんなに！　どうしてあたしはひとりなのか　どうしてすむばしょをかえられちゃう
のか　どうしておとなのひとがあたしにあたまをさげたり　ぎゃくにばかにしたりす
るのかわからなかったけど　とくべつだったからなのね……。　でも　さびしいのはい
やだよ」
「これからもずっとさびしいままだけど　だいじょうぶ　ひとりくらいはともだちがで
きるわ　あなたはこまったことがあったとき　ないていればいいの　そうすればだ

れかがたすけてくれる」
「ないていればいいの？」
「そうよ。よのなかって、そういうふうにできているものなの」
そんな会話が最初の出会いだった。
それから見知らぬ女の子は、それとともに暮らし、会話し、導かれて生きていった。状況が反転する生活だけは変わらな
かったが、声の導くとおりにしていれば、それほど困難なく過ごしていった。
やがて、成長した彼女はそれのことを忘れていったが、それは結局同化してしまったことの証明とも言
た。それでも彼女は、時折その言葉に促されて行動することがあった。とある男の子を見たときがそ
うだった。どこかひねた顔をした、その年齢にしては大人びた雰囲気。彼が視界に入ったとき「泣こうと思
たのだった。
彼女は泣いて、泣き続け、彼から髪飾りをもらった。
その瞬間、見知らぬ女の子、自我なは「そういうことなのか」と思ったのだった。
どうして自分がこんな境遇になったのか？ どうして状況が反転させられているのか？ どう
して自分は存在するのか？ 自分はどうして生まれたのか？ そんな疑問はあっというまにすべて解決したの
だ。
けなは、その少女は彼に話しかけようとして、うまく言葉にならないことに気づいた。戸惑っている
うちに、彼は、けなの泣いていた理由がわかっていたかのような言葉をかけ、去ってしまった。

しかし、けなは、それが通過儀礼とでもいうべきものだと認識していた。

もっとも、けなは、もらった技能を身につけたとき、すっかりさっきまでのことを忘れてしまっていた。

１　最終決戦のはじまり

紗伊阿九斗（さいあくと）は、宙に浮いたままの眼下を見下ろしていた。

宮殿（きゅうでん）の周囲を群衆が取り巻いている。それはかなりの数で、上空にいても視界の端（はし）まで人の頭しか見えない。それらは、ゼロが操（あやつ）る魔道士たちの呪縛から立ち上がった人々なのだった。それはもちろん、人々の純粋（じゅんすい）な怒り（いか）によ

る抗議（こうぎ）であると言ってもよかったが、問題はそれを皇帝（こうてい）である加寿子（かずこ）が独裁を宣言したとたん、その〈抗議〉と

変貌（へんぼう）してしまったことだった。

――それなら、こうするしかないじゃないか。

阿九斗は先程（さきほど）、自らを魔王（まおう）であると宣言したばかりだ。そうすることでゼロと加寿子を倒（たお）すしか、人々を解放する

ない。ゼロを覚醒させて利用したのは２Ｖ（ツーブイ）であったのだが、今では加寿子がゼロを操っている。人々をゼロ

により不安に陥（おとしい）れ、それを加寿子が利用するというマッチポンプが成立していた。

――この力を存分に使わせてもらう。

阿九斗は独りごちた。

一夜で、僕はそれによって魔王としての力を得たのだ。恐（おそ）ろしいことだが、そして、[illegible]信じたくはな

かったことだが、阿九斗は人間でありながら、兵器として作り出された存在なのだった。それも、人間としての記憶は

そのままに。ただの神の力、つまり魔術（まじゅつ）を無制限に使いこなせるだけの――。それはつまり、阿九斗はまっ

たくの玩具であることを自覚していた。自分がどれほどの力を得たのか。そして、何が可能なのか。細部に至るまで理解していたが、それに酔うことも、怯えることもできなかった。

——どうせ魔王になるなら、もっと悪っぽく心からヒャッハーって言えるようになるとか、そういうオプションを付けて欲しかったよなぁ……。

内心では、そうぼやいていた。

とはいえ、表向きとしては、魔王らしく振る舞い通さなければならない。

「魔王を僭称する愚か者め！　人々を恐怖に叩き込んで良い気なのが、この世にただ一人だということを教えてやろう！」

叫んだ。

痛いほどの憎悪の波が、四方八方から感じられた。世界のすべてを埋め尽くす程の憎しみと怒りが、すべて自分に向けられている。

それは、人々の感情をデータ化し、言語に変換した形で保存されているログを、瞬時に閲覧可能になったということだった。やがて、精神に生きている人間の脳内、一人一人の過去の生活、今日何を食べたかすら知覚できるようになっていた。

——この……力。人の心を覗けるようなものだ。確かに、僕は神にも魔王にもなれる。僕は一般人と同じ、普通の人間だからこそ、どちらにもなることができるんだな……。世界征服を企む魔王と呼ばれた人々も、僕と同じように左右され……何かの決断をしたんだろうな……。人々を自由にしようと思うのも、魔王らしい台詞を思いつくのも、同じ僕には違いないんだ。

「憎しみと怒りを感じるぞ！　もっと憎しみと怒りを私に与えろ！　それが私の力になるのだ！」

適度に魔王らしいことを言っているが、たとえ嘘でもそんな言葉を発することで内面が魔王へ引っ張られていくことも同時に実感していた。下手するとその気になりそうだ。努めて正気を保たないといけない。

――冷静に行動しないと……。情報の分析と、これからのこと……。僕のするべきことを考えないと……。

他人の心がわかるということは、想像以上の情報をもたらしてくれていた。一人一人の思惑や感情を読み取れるという恐るべきは、現在の状況が僕にとってどう感じられているのかを正確に教えてくれ、これからの行動の指針を与えてくれる。

――やはり、ゼロによる支配から救ってくれるのは勇者だけだと信じているのか……。そして、皇帝はその機に乗じてゼロと皇帝軍を共倒れさせるつもりだと。

目の前で見たゼロが、人類を支配しようとしたのは事実だ。それに乗じて魔王の座の奪取を企んでいるのは、帝国の有力者たる。だが、人々は勇者に全幅の信頼を寄せていた。それは、有力者や皇帝ありき、慈悲深いと見える態度と、穏やかな物腰をしているからだ。

肩書きと見た目、それだけを人々は信じ込んでいた。その実のところ、勇者についての具体的な情報など、結局は誰も何一つ知らないのに。だ

――僕のするべきことは、ゼロを倒すこと。もちろん皇帝らも……。そして……皆が信じているくだらない……物語。自分は魔王としてそんなものを消し去る。

同時にそう決意し、ある種の覚悟を決めていた。

そして、〈天月〉の星空の中から、一人だけ浮かび上がって見える彼。彼は特殊なスーツに身を包み、僕らは「主人公」と呼ばれて
いる人物。
――最後に、僕が彼を倒れれば、僕が信じる物語は終焉を迎えるはずだ。そうなったなら、後は……。
三輪ヒロシ。彼は自分の役を演じていただけの彼が、今の彼らは確かに運命のようなものが感じられる。今は、発
ゆう子を安全な場所へ運ぶべく飛翔しているが、やがてここに戻ってくるだろう。
、生まれ変わったリリィ。白石によって撃ち落とされたことが良かったのか、それともゆう子の存在に勇気づけられた
のか。覚醒した阿比川はヒロシの今までの持ち主の流れが理解できた。
――僕が消えた後のことは、ヒロシに託す！
阿比川の視線が転じた。最上階のテラスに、一人の男が姿を現したのだ。
全てを見る、体格の良い男が姿をしていた。それこそが、プログラムであるゼロの今の本体であった。
げ、悪意を伝えてくる。
《お前は戦闘機械すぎないのだろうに。なぜ私を消すことに執着する？》
ゼロは、挑発するかのようにそう聞いてきた。だが、それを挑発と感じたのは阿比川の方であって、
ロには純粋な疑問だったのかもしれない。
阿比川は言葉を発さずに答える。
《確かに、僕は戦闘機械に過ぎない。だが、人間の感情に近い何かが僕の中にはある。物語としての登場人物としての心だ。君たちの
は、人の中で違う色の糸を撒いたようなものだ。個性を押し出してはいまい。だが、僕は、僕ら同様、人間の個性を押し出したもの

だ。それを他と溶け合わせるようなことはさせられない》
《個々に分裂しているからこそ管理されなければならない。それは私も同じ考えだ》
……《主、有難いな》
阿弥陀が言うと、そこに朗らかな声が紛れ込んできた。
《そうですよ。あなたはそのお方もうご存知でしょうけれど、私2Vから去り取り上げたのです
その声は聞いた誰もが安心して微笑んでしまうような響きがあった。だが、今の阿弥陀には、それは淫
の誘惑と聞こえた。聞いていると彼女の言葉の内容が何であれ肯定したくなるのだ。
……《ゼロを制御しているなら、判断も必要なくなったはずだ》
探るように阿弥陀が言った。
千手ある無量寿は、笑顔の奥に隠したまま、否定の阿弥陀に語りかけている。
《それはそうですね。ええ、もちろん》
そう無量寿はうなずいたが、それは阿弥陀の言葉を肯定したわけではなかった。
《ですから、あなた、私に倒されてくださいな。それでも納得するでしょう？》
にこやかな声で無量寿が言った。
阿弥陀は顔をしかめる。
《その後あなたが統べる。そのつもりか》

《ええ。ごく自然なことじゃありませんか。状況が変わったんですもの。ですが、約束したことは守りま
すよ。あなたは私に従う限りは、命は奪わず、生存を保障いたしましょう》
自分の存在を否定されることなどあり得ないことのように神無月が言った。
阿呪が舌打ちする。
《勝手なことだな》
が、神無月は意に介した様子もない。可愛らしくお願いするように首をかしげる。
《ええ。私のわがままですわ。お願い。聞いてくださいますよね？　それとも、ゼロを倒して
のお願い、聞いてくださるとおっしゃってましたけれど、その後、私をどうにかされるおつも
りだったのかしら？　ねぇ、駄目ですよ。そんなずるいこと。性格が悪いと思われてしまいます
からね》
神無月が微笑む。
阿呪が声に苛立ちを含ませて答える。
《それならそれでいいさ。わかっているなら隠すつもりもないね。あんたのやることには
だ。あんたが転じてゼロを操縦するつもりになったのも、本体の継続は続いたほうが都合が良いからだ
ゼロを倒せば、神体その機体を失うのだから》
《あらあら。頭がおよろしいこと。ねぇ、それならば私の望みもあなたの望みもそれほど違わな
いことに気づいてくださるのではないかしら？　あなたはみんなに本当の自分をわかって欲しいと

っている。私にとってそれは同じですもの》

弾丸魔術師は怖(お)じずに言った。

《本当の自分》をわかって欲しい、という気持ちは弾丸魔術師にも感じるものはあった。

だが、弾丸魔術師はその気持ちに共感できなかった。

《幸せという存在が幻想(げんそう)で、《本当の自分》は違うとわかっているのなら、それを捨てて自由に生きればいいだろうに！

《あら、いやだ。私は幸せをどんどん欲しいんですもの。人間の優(やさ)しい幸せを恵んでまっぴら。だけど、幸せで満ち足り

もの。幸せであることを捨てるなんてもったいない。利用させてもらうだけです。あなただって

を利用して使ったはずじゃなくって？》

《あいにくと、そこまで都合良くは考えられないね。ただ使うのなんて、これで最後にしたいんだよ》

弾丸魔術師が答えると、弾丸魔術師らの結界がやや開いた。

《……わかってはいましたけれど、交渉決裂(こうしょうけつれつ)ですわね》

《最初から交わるところなどなかったさ》

《それなら、今この瞬間から私はあなたの敵ですわ。さぁ、はじめましょう。素晴らしく壮大(そうだい)な

芝居(しばい)してくださいましね》

弾丸魔術師が合図した瞬間の直後、テラスに居たゼロが飛んだ。

予想していた弾丸魔術師だったが、ゼロは弾丸魔術師らから遠ざかるように飛び、距離(きょり)を取って上空に静止すると、腕(うで)の皮膚(ひふ)を自らの手で

はぎ取り、機械仕掛けを剥(む)き出(だ)しにした。弾丸魔術師はその意図を計りかねていると、下方から次々と魔法陣たちが浮かび上がり、ゼロの

に集まりはじめ、その剥き出しの腕、やはり皮膚ははぎ取って剥き出しにした自分のボディを次々と重ねた。
まるでブロックが組み上がっていくかのように、ゼロはその身体を巨大なものに作り上げていく。
「まいったな、こりゃ……」
阿久津光は口をゆがめた。
やがて、阿久津光の前に立ちはだかったのは、体長五十メートルほどの、機械が剥き出しになった巨人の姿だった。
「やれやれ……。こんなのと殴り合いをしなくちゃならないとはね……」
阿久津光はぼやいた。

○

「体の巨大化には、意味があるね。一見すると、まるで鋼鉄の巨人の力の象徴であると頑なに信じる馬鹿げた信
の物語のようだけれども」
持って回った言い方をしたのは、木多淑恵である。興味を持ったときの彼女の癖だ。ゴーグルを下ろし、宮殿の庭に降り立
ゼロの姿を分析している。
「意味はあるの？」

聞いたのは郡司絢子である。彼女はそれまでは異界に浮かべた浮遊ユニットの中にいたが、四階の壁面を
て中へと潜入しようと、テラスのひとつにたどり着いたところだ。
「結局魔力だろうと、ゼロだろうと、マナというリソースの奪い合いをしているだけだからね。しか
も、その奪い合いは結局のところ物理的に行われるわけじゃないんだよ。プログラム的なものだね。電子戦で決ま
ってこと」
テラスで振り返り、相手の状況を確認する。
「体内に入ると、電子戦の処理速度もあがるのか?」
「そうなるね、並列処理できるようになるから。もともとゼロはリソースのすべてを使う直
りは分が悪い。だけど、現状の姿なら、処理速度だけは魔王を超えることになるんじゃないかな」
「では、魔王……の処理能力というのは?」
「彼女自体は機械じゃないからねぇ。人間の脳だもの。ただ、魔法のシステムは人間の想像や感情に呼応するようにできてい
る。リソースの奪い合いというパワーでは負けても、魔法の使い手は負けないってことさね。精神的にはすべてに
るってこと。ふぉお! 燃えるねぇ!」
盛り上がる激情を横目に、絢子はテラスから身を乗り出して下方を見る。
「集まっていた野次馬は、逃げたか……」
ゼロの姿を目撃した一般人は、恐怖の建物の外へと移動をはじめたため、今、四階の敷地内にいるのは、四階の部下たちを除けば絢
そしてけいすだけだ。

「ありゃ？　燃えない？　っつっても、そうかもねぇ。本来のはいいけど、状況が変わっちゃって、結局けいいすが何も思い出せない限りは、私たち何もできないっていう感じだしねぇ……」

沙耶は肩(かた)をすくめてけいいすを見た。

背の低い、侍(さむらい)風のポニーテールを立てた少女、けいいすは、当事者でありながら、唯一(ゆいいつ)、ゼロの影響(えいきょう)下にない。彼女はゼロを封印(ふういん)する秘密があるというのだが、今のところ彼女はただ同行しているだけである。

「いや、汗顔(かんがん)の至り。拙者(せっしゃ)、何も覚えていないゆえ……」

けいいすは恐縮(きょうしゅく)する。

「いや、まぁ、いいけど。いざって時に思い出してくれればいいんだから」

沙耶はけいいすの頭を撫(な)でた。

けいいすはくすぐったそうな顔をして、沙耶を見上げた。

「優しいな、お館(やかた)様」

「お館様？」

「そう呼ばせていただくことにいたす。そもそも、拙者の命はお預けしたのであれば」

沙耶はそう言われて、顔をほころばせた。

「まぁ、いいか。それで君が何かの助けになってくれるならね」

「……っと、しかし、まずは私たちがけいいすを守らなくちゃならないことになるかもしれないぞ」

[illegible]、緊張した声をあげた。

[illegible]巡らせ、そこに姿を現した者の姿。[illegible]顔を強ばらせた。

[illegible]が、宮殿奥の回廊に姿を見たのだ。

「それが、けいすというのですか」

そう優しげに言いながら、優雅な[illegible]でこちらにやってきた[illegible]の姿。しかし、[illegible]に汚れていた。

…「陛下……いや、そのお体。人の血……」

[illegible]ことのある[illegible]は、魔獣と人の血の臭いで[illegible]つくようになっていた。が、彼の[illegible]も、[illegible]

動揺せず「ほほほ」と小さく笑った。

「少々[illegible]というものがありましたので。でも、もめごとの証拠を見られてしまうというのは、恥ずかしいものですね」

「……っ！」

[illegible]ならぬ吐息を漏らした。[illegible]から感じていた。

「あら、[illegible]じゃない、[illegible]を見るような目で見られても困ります。少なくとも、[illegible]であることについては、[illegible]

りも[illegible]ありますもの」

[illegible]そう言った。彼の[illegible]から、尋常でない[illegible]立ち上る。マナのひらめきとも違う、[illegible]も似た[illegible]塊の[illegible]

うなものが、[illegible]金縛りのようにしてしまう。

「こいつは……」

「やばいか……」

激痛で綾乃は冷や汗を流す。身体がうまく動かなくなっている。

瞬間、その目を覚まさせるように声が響いた。

「けいすを逃して！」

それは男の声で、さらに背後から響いてきた。綾乃はその声に確かに聞き覚えがあった。

「けいな？」

綾乃がつぶやく。そちらに気を取られたからか、身体が動くようになっていた。

綾乃は機を逃さず、綾乃は素早く反応で刀を抜いて、けいすの目前へ横に跳んで移動する。

と、そこにマナ球が飛んできた。綾乃はそれを刀身で受け止める。マナ球は刀の周囲に粘り着くように回転したが

その刃に触れると、まるで柔らかいゼリー菓子か何かのように真っ二つに裂けて落ちた。

「な……？」



その追尾するマナ球ではない。奇妙な軌道を描き絢瀬を襲う意志。

マナ球は矢加部が発したものだ。けいすを狙っていたことは、その軌道からわかる。

矢加部が面白そうに目を見開いた。

「八尺瓊勾玉を断ち切るなんて……！　その刀、神が与えた一振ですね」

「そうですが……。が、そうだとしたら何か……？」

絢瀬がうろたえる。何の力か知らない術が使われているのだ。

そんな絢瀬の姿を見て、矢加部はにっこりと笑う。

「そうでなければ、私の術が破られるはずがないという確認をしただけです」

再び、矢加部はマナ球を発するべく、手を上げた。

「やばい……！」

絢瀬は危機を素早く察知する。結城は、その警告よりも早く動いていた。

「逃げるよ、けいす！」

結城は持っていたチェーンソーを起動すると、ひょいっとテラスの縁に登った。

「しかし、拙者は逃亡は好まず……」

けいすがぐずると、結城はすぐに言葉を変えた。

「飛び降りるから、私を守れ！」

そして、結城はテラスの外に身体を倒し込ませるようにした。すうっと結城の身体がテラスの外へ消える。

「お嬢様」

けいすはテラスから身を乗り出した。

落ちていく白い悪魔と少女の姿を見る。

「今、参ります！」

けいすも跳んで、白い悪魔の後を追った。

それを確認してから、綺麗な刃を構え、右手にマナの球、一撃に備えた。

しかし、白い悪魔の攻撃はやってこなかった。

「まだ、やるのですか」

白い悪魔は動きを止めていた。その目線は下に向けられていた。足下に何者かの手がからみついていたのだ。その手は、ただ足首を握っているだけでなかった。ゴムのように伸びた前腕部のものが足に絡めている。

「負けと思わなきゃ、死んでも負けてないってね」

リリィだった。彼女はその身体を白い悪魔の数メートル後方に横たえていた。何度も衝撃を受けたとおぼしく、着ている服はボロボロになっている。少女のような顔は腫れがひどく、激しく殴られた後であることがわかる。それでも、リリィはその姿勢のまま腕を白い悪魔に向けて伸ばしたのだ。

「大人気ない」

白い悪魔は振り返りもせず、手だけを後方へ向けてリリィにマナの球を撃ち込む。

「ちっ！」

リリィは腕を元に戻し、のろのろと立ち上がる。

しかし、マナ球よりも早くリリィが動ける訳ではない。

「危ない……！」

綺羅が横から駆け抜け、リリィの前に立った。その勢いのまま、刀の一振りで瞬時にマナ球を斬り落とす。

「会長、これは？」

綺羅は状況の説明をリリィに求めた。これまで感じるままに対処してきたが、彼女は情報を求めていない。

リリィは歯を剥いた笑みを漏らして答える。

「まぁ、理事長が首謀者だったってことで認識しときゃあ間違いないさね。２Ｖを倒した情報を知っているボクたちまで消そうとしてるってこった」

憮然として言った。もちろんそのことが嘘とは綺羅は思わなかった。

綺羅は顔を強張らせて、理事長を見返した。

理事長は薄く笑った。

「ほほ、まぁ、大人の思惑とはいえ、大人の悪いことを今しているのですから、仕方ないですけどもね」

綺羅は眉をひそめた。

「……軽蔑しますよ、理事長」

それも舞姉は笑い飛ばす。

「殺されても、勝ち取らなければならない需要がありますもの。そうでなければ、平和などあり得ません

「日本人は、誰かが死ぬことを望んでいるのですか？」

紗綾は思わずそう聞き返すと、舞姉はうなずいた。

「現代での殺人を、たとえお聞きにならなくて？」

「くっ……」

紗綾は言葉に詰まった。

「ま、やめときねい。殺し合いなんざ聞きやしないさ。それよりも、逃げ出した連中が何人かいるが、そいつらが真実を語ったらどうするつもりだい？」

よろよろと立ち上がったリリィが、会話に割って入った。

2Vを殺したのを目撃し、事情を知っている者は、彼女以外は江藤不二子と、曽我けながいる。二人とも、今この場は見当たらなかった。

「そうだ、先輩とけなは？」

紗綾が聞くと、リリィはにやりとした。

「けなはちょいと服を脱いでね、で、斎藤クンはボクが戦っている隙に真っ先に逃げ出したよ」

「なるほど、そういうことでしたか」

けなは姿を消すことができる。マナを感知する能力をもってしても発見できない。ただし、身につけているものは消せないので、服を脱ぐ必要はあるが。見えない声はそういうことなのだろう。

その会話を聞いていた緋月が、けなの件を不審に思ったのか、ややいかがわしげに目を細めたが、それらすべてを打ち消すかのように首を振った。

「なんであれ、私ならば逃げた者を見つけ出し、口を開かせることができます」

緋月が手を上にかざした。

そこにマナの響きとともに光の剣が、出現する。

「天叢雲剣」

緋月が上空に出現させた長さ一メートルほどのそれを、そう呼んだ。

光の剣が、まるで太陽の一部が落ちてきたかのような輝きを放っていた。熱が、離れている緋月にも感じられる。

「気をつけろ、ただごとじゃない威力だ」

光の剣2Vを貫いたところを見ているリリィが警告する。

「はい、完全な防御を……」

緋月、刃を正眼からやや左にねじって構えた。あらゆる方向からの斬撃に一瞬で対応できる自然な構えである。

「そういうことじゃない！　あの威力は……」

リリィが叫ぶ。

有希は目を細めた。

「遅い、ですよ。まとめて貫かれてしまいなさい……」

有希が右手を振ると、光の剣が綾乃に向かって飛んでくる。

「ひっ！」

空気を切り裂く轟音と、マナの唸りの凄まじさが、その剣の威力を物語っていた。マナで作られた武器であれば、その威力は一定の限度があるはずだ。だが、剣から発せられる熱気と魔力は、綾乃がかつて見たどの武器よりも激いものだった。

「受け止め……られない！」

綾乃は刀で受け止めることはできなかった。もし受け止めたならば、刀身ごと真っ二つに断ち切られていただろう。そして、その後ろにいた綾乃、さらにはリリィも貫かれていたはずだ。

しかし、剣は綾乃の横を轟音とともに、綾乃の左をすり抜けて行った。

剣は、その後方の壁を貫き、その穴の周囲を熱で溶かした。恐ろしいことに、壁を貫いたにもかかわらず、ほぼ無った。つまり、まるで抵抗なく壁を溶かしたということになる。

「助かった……」

綾乃は息をつく。

もちろん、綾乃が避けたわけではないことは、当の本人が一番よくわかっていた。外れたのは、剣の軌道が最初からずれていたからだ。

その原因は、万有師範が体勢を崩していたことにあった。剣を放つ瞬間、何か衝撃を受けたのか、万有師範は右膝を突いていた。
納得した万有師範の後ろで、白い浮いてきすく、乙光結晶体を見ける。
「ありがとう……」
納得すくつぶやく。結晶体は、けなのものだ。万有師範が剣を放つ瞬間体当たりでもしてくれていたのだろう。
リリィもほっと息をつく。が、結晶体物と首を振った。
「助かったな……。」が、同様そうはいかないだろうな。先に説いたぶるのがお好からしい。結晶体……あの
マナ球ばかりボクには使っていたが、それを断ち切るキミには剣を使ってくることになる……。
万有師範は再び体勢を立て直し、首を振っていた。どうやら、けなの気づいたようだった。
「姿を消せる者がいるということですね。ですが、それほどの攻撃もできないようならば、たいした問題はなりません。決して外ませんよ」
万有師範の合図で周囲を手で払う仕草をする。けなが近くにいないことを確かめているのだ。
「あの…剣…あの…球…なんなんです？」
納得リリィを振り返って聞いた。
「自分の身体だけが使うことができる術と、２Ｖの周囲を操る術。あのふたつで種類ということだ」
「剣だけの……」
「それを使うことができるのが、自分の身体が最上もなるってことだ。それを使えることが、権威の象徴の
さ」

「それであんなに大成功……」
リリィの説明に納得したが、綱使いも次の一撃を放たれればおしまいだということはわかる。
「キミは逃げろ。ボクが少しでも食い止める」
そうリリィが言った。その表情は、悲壮（ひそう）な決意のようなものは何もない。そうするのが当然といっ
た表情である。
それを見た綱使いが首を振った。
「……そう言われては、逃げるわけにはいきません。それに、私も決意したことがある。一度は私の
だけであいつのそばを離れた。今あいつがこの場で身体を張っている限り、退くわけにはいかない
です。もう後悔（こうかい）したくはないから」
綱使いは揺（ゆ）るぎない決意をしていた。今何が起こっているのかを知ったことで、彼の頭の中で、既に何をしようと
しているのかがはっきりしたのだった。同時に、勝算はゼロを倒すために、決意の自分の存在を賭（か）けてい
のだ。
一方、綱使いその表情、リリィは、その言葉の意味がある“あいつ”が誰のことを指しているかわかったらしい。に
やりとすると、ぼろぼろになった帽子（ぼうし）のつばを下げて、綱使いから視線を外した。
「アナクロだねぇ。ま、そういうことならボクも手助けするしかないさ。でも、勝たなきゃ意味がない。
いっちょ、最後まで本気になってみなよ」
リリィがそう言った。

絢は力強くうなずいた。

と、その話を聞いていたのか、有栖川が笑う。

「桜様？　そう言うことを言われても、こちらとしてはどう反応していいものかわかりません」

有栖川は穏やかにそう言って、右手を掲げた。そこにマナが凝縮し、再び光の剣が現れる。

その圧倒的な存在感を前に、絢は足がすくんだが、決意した以上、戦い方ももう考えてある。

「動いて、攪乱する……！」

絢は刀を構えたまま、滑るように進み、そこから一気に横へ跳んだ。

有栖川も合わせて移動した。彼の視線からはまさに消えたように見えたに違いない。

そして、有栖川は視界にようやく絢の姿をとらえたが、そこからさらに絢の身が横へ跳んだ。

いや、跳んだと見えた絢は幻だったが、その場にもまだ絢が立っている。分身を生み出したのだ。それは彼の意識を惑わす分身、マナにより作り出した、実体のあるもう一人の絢だった。

「伊賀忍法・乱・月影！」

絢はさらに分身を作り出す。それは有栖川の周囲を、幻惑するように跳び回った。

有栖川は視線を一点に集中できずにいる。

それを好機と、分身と絢本体は周囲から一斉に有栖川へ襲いかかった。

「いやぁあああ！」

分身はどれもマナとしての実体を持っている。幻覚というわけではない。そのすべてに攻撃

があるのだ。しかも、五体がややタイミングをずらして襲いかかっている。避けようのない

だった。

が——。

「分身をマナで作ったのですね。そのやり方は緻密なマナ操作が可能な者以外は出来ません」

静加は落ち着いて言い、手を軽く振った。

「なっ！」

絢たちが絶句する。

静加の手の軌道上にいた分身の姿が消えたのだ。さらに静加が手を動かすと、その手の動きに合わせ、次々と分身が消えていく。

「……ちぃっ！」

しかし、絢は攻撃の手を止めなかった。四体の分身、つまり自分の分身すべてが消えたが、それでも絢本体は、刃を横薙

にし、静加を横薙ぎに斬りつけんとしていた。

「うぉおおお！」

絢は気合を発する。

が、その気合が途切れた。刃が、ぴたりとその動きを止める。

静加は絢の正面に顔を向けており、手にした光の剣の切っ先をぴたりと絢に突きつけていたのだ。

「魔術を使った戦いとはこのようにやるものです」

「な……。[illegible]な……」
「いいえ、これは当然の結果。せめて、[illegible]に存在を殺されることを幸せに思ってくださいな」
[illegible]はにっこりと笑って言った。
そのとき、姿を消したけなが[illegible]を突(と)き飛ばそうとしたらしく、[illegible]の体ががくりと揺れた。だが、それだけだった。[illegible]はけなのことを警戒(けいかい)しており、さらにけなが大した力を持っていないことにも気づいている。[illegible]は面倒(めんどう)そうに[illegible]ない[illegible]振った。[illegible]突き飛ばされる音と[illegible]響いた。
その間、[illegible]の光の刃の切っ先はまるで[illegible]の喉元(のどもと)から揺るぎがなかった。
「邪魔(じゃま)はもう入りませんよ。それでは……」
「ひっ……」
[illegible]目を見開いた。
[illegible]刃物を突き刺(さ)そうと力を込めた。
と。
ばつん、と電気が切れたかのように部屋が薄暗(うすぐら)くなった。
[illegible]手が止まる。暗くなった程度で冷静を失うような人物ではないだろう。しかも、まだ日中であるから、外から
の光が差し込んでおり、視界は十分ある。
「た、助かった……?」
[illegible]つぶやき、後方へ飛び退(の)いた。

加井男の剣は、その実体を失いつつあった。

「周囲のマナが消滅した……」

加井男は手のひらを上に向け、魔術を使用した。そこに微(かす)かな変化が起こらないことを確かめた。

「大気のマナそのものが消滅しているのか……」

紗絢は冷や汗をぬぐいつつマナの感触(かんしょく)を探る。

「維持されるエネルギーも同時に消滅しているぞ……」

リリィからもそう声がかかった。

紗絢は冷静さを取(と)り戻しつつあった。そして、この状況ならば、うまくいけば一矢(いっし)報いることができるかもしれないという可能性があることに気づく。

「こちらも筋力が落ちるが、互(たが)いに魔術を使えないのならば、勝ち目はある！」

紗絢は再び加井男に向かって飛び込んだ。

それを加井男はバックステップしてかわす。

「マナとエネルギーを吸収したのは……ゼロですね……。いや、魔王ならそのくらいはするでしょうか……」

加井男は窓の外にちらと目をやった。

「お侍様、あれはないでござるよ。結局ご自分で降りられるんじゃあないですか」
「あたりまえだよ。私は無用に危ないことはしないんだってば」
地魔は、障壁に回転させたチェーンソーを突き刺し、それで落下速度を和（やわ）らげ、結局ご自分で地面に降り立ったのだ。
後から飛び降りたけいすは、勢い余って地魔を追（お）い抜いて地面に先に落下してしまい、柔らかい地面に半ばめり込んでいるところを
に助けられる始末だった。
、今は二人で、戦場から追ってくる者がいないか警戒しつつ、阿紅丸とゼロの戦いを見守っているところだ。
巨大な人型機械となったゼロは、全空を見下ろした異界の視界を有している。
その前にいる阿紅丸。ゼロと比べるとおもちゃの人形のようだ。
だが、二人の発している威圧感（いあつ）は互角（ごかく）と地魔は見た。
「勢いは互角ということだね。あんなにサイズが違うのに、発している威圧感は似ているよ」
地魔はそう言った。
「しかし、マナの流れは違うようです。あれを……」
けいすがゼロを指差した。
その瞬間、ゼロがその長い両腕（りょううで）を一気に左右に開いていた。風を切る音が響き、圧した空気が爆（ば）ぜる音がしたが、それ
だけではなかった。
「マナ？……っと！ これは……」

渉は額からゴーグルを下ろして周囲を確認する。その機能により、マナの流れを可視化することができるのだ。
色のついたマナが集まり、雲のように広がっている。そして、それが一つの巨大な雲としたら、時に豪雨を伴い降ってきたようなものだった。ゼロを中心に、マナが渦（うず）を巻いて吸い込まれていっているのだ。
「ふぉおお！　こりゃあ、大したサイクロンだねぇ」
渉はつぶやく。
回転するマナの生み出す流れは、奔流となって渉たちの髪（かみ）を揺らしはじめた。奔流となった嵐（あらし）は、周囲のマナを吸い取っていく。魔法陣に近い場所から、外側に向かって円が広がるように、次々と建物の明かりが消えていく。その灯は、あらゆるマナ駆動（くどう）の魔術装置の動力源となり、街の魔術機関の動力源となっているはずだ。
「こりゃあ、結界の外からも見えているに違いないよ。すべてを喰（く）い尽くす黒い太陽、自ら堕天（だてん）した天使の戦い、現代のアルマゲドンが、まさに今、目の前で展開しているのさ。刮目（かつもく）して見なくてはいけないよ。こいつが、まさしく地獄（じごく）の始まりになるかもしれないんだからさ」
嵐の轟音の中、渉はにやりとして言った。

○

――結界のマナの吸収のためか。

阿九里は、ゼロの意図を悟っていた。いくつもの魔法を解体し再構築した物体の異界のマナを取り込み、それらを操るための魔法理論を
するためのものだ。だが、同じ内容の魔術を使うことはできまい。つまり、押し込んで来ようとするも
なのだ。
果たしてその通りであった。拳がうなりを上げて阿九里に襲いかかって来た。その時、マナの嵐が周囲をま
とっている。
——命令を食えばひとたまりもない……か。
阿九里は自らの周囲のマナの流れを制御する。周囲の物質のマナの奪い合いでも、マナに結びつくエネルギーの奪い合いでもゼロに
るところはない。となれば、繊細にマナを制御して、相手の力の方向をそらしていくような戦い方なら
ざるを得ない。
化勁、自由のコンスタン魔術学院の授業から学んだ戦い方。相手の技を抜いて行っているようなものだ。
まるで猛獣が突っ込んでくるかのような一撃。阿九里はすんでのところでかわした。マナの流れを制御、最小限で
なの力の方向を変えたのだ。
《いつまでも耐えられるものでもない。周囲のマナはこちらが吸収、そちらの使える量は限りがあ
る。無理をすることもあるまい》
ゼロが珍しくも気遣うようなことを阿九里に言う。
《なぜ、そんなことを？》
《我々は人類を理解することが目的、そのためであれば本来こちらにそちらを消す意味はないのだ》

《自らの意志で完全に制御されているわけではないのか？》

純也の問いを聞いた。自分の手で自分を殺そうとしているのは事実だった。だが、ゼロはそうではない、と言う。

ゼロは答える。

《最優先事項は別にある。人類の保護だ》

《人類の保護に反しない命令が出ている限りは従う、ということか》

純也は納得した。

《そういうことになる。できうる限りは効率的に退治したい。エネルギーを浪費せず、さらには人類の数を絶滅させぬ程度に削減しておきたい》

戦い合いに対しては効率的な考え方だと思った。だが、一人だけで戦いの局面を転換し合うような要素こそがこの戦いの特徴だと思えた。

純也は納得する。

《……そういうことなら、どっちにしろ僕は戦い合うに適任ってことでいいさ》

《エネルギーの最大出力、私が消えることなどあり得ない》

ゼロもある程度納得したらしい。そう言うと、再びその巨大な拳を振るった。

《……そいつはどうだか》

純也は、自分の横を通過したゼロの巨大な拳に向かって行き、その一抱えもあるようなその指に手を当てると、マナを

その上に手を乗せた。

「はあっ！」
鳳凡が気合を発する。
と、ゼロの指――ちょうど鳳凡の手を押し当てていた第一関節にあたる部分が爆ぜ、そこから先がバラバラになって下へと落ちる。
ゼロは突き出した拳を引き、鳳凡から離れた。
《こちらのマナを利用したか》
機械の剥き出しになった指を見、ゼロがそう分析した。ゼロがその体内に溜めたマナを、鳳凡は爆発力に変換した
のだ。
《これなら、こちらもそれほどマナを必要とはしない。肉体のサイズの差は埋められる》
鳳凡がそう言った。
が、それが多大な集中を要することを認識してもいた。先ほどゼロが制御しているマナである。その内側の細部に等
のコントロール下に置くためには、マナひとつひとつを認識して動かしていくような精神力を要求される。意
しての能力があろうとも、純粋な精神力の問題になってくるのだ。
当然、ゼロも鳳凡が何をしているのかは把握していた。
《それならば、機械ではない肉体は限界があるだろう》
ゼロは左右の拳を鳳凡に向かって叩きつけはじめる。
――くっ……！

闇の光がそれを受け流し、力を逃がすために後ろに飛んだ。

やや距離を離して隙をうかがう。

ゼロの攻撃、その巨体に似合わぬコンビネーションとでもいうべき攻撃を繰り出しているのだった。

マナの使用方法、その身体を使って行うことが可能。つまり、人間と同じように五本の手足を備えている姿であることが

も動くマナを使える。戦闘スタイルは、機械行おうとも、格闘技に似る。そして、ゼロは基本までに五体

による攻撃を多用していた。

さらに、五体による長距離攻撃を振るう攻撃。先端部の速度が軽く音速を超える。攻撃によって大気が振動され、爆発的に広がった。

錐形の氷の塊、雲までもが数本となって闇の光を襲う。

だが、攻撃のタイミングも、隙も、基本の間合いもそれということだ。

――それなら、こちらも向こうのやり方に付き合うしかないってことか……！

「うぉおおおお！」



阿形丸が吼えた。
拳を握り、突進を開始した。
技量は僅かなれど、大きな力量の差がある。
それでも殴り合いは成立した。
足を止めての殴り合いである。双方とも一歩も引かず踏みとどまり、互いに激しく拳を振り回していく。
ゼロは、必殺の一撃を阿形丸の身体に正確に撃ち込むべく。
阿形丸は、熾烈な、しかし確実にゼロの身体をこそげ取っていく打撃を積み重ねるべく。
交錯する拳は、極端なサイズの差があり、そのスタイルもまるで違うものだった。だが、それでも確かに殴り合いは成立していた。
ゼロは阿形丸の動きを予測し、その身体の中心軸を打ち貫こうとする。
阿形丸は繰り出されてくる巨大な拳を弾き、逸らし、自分の拳をゼロの身体の一個所に打ち込んでいく。それは精密動作を要する、針の穴を通し続けるような行為だった。
ゼロの集中力と、阿形丸の精神力、そのどちらが勝っているかの比べ合いでもある。
ゼロの一撃、軽い攻撃の連発が、阿形丸の身体の正面を確実にとらえ、阿形丸はマナを使っての肉体強化で強化した。これが、今後の阿形丸の生き
そげ取っていく。
一方、阿形丸の一撃一撃は、少しずつだがゼロの拳そのものを崩していく。
阿形丸の精神力が尽きるのが早いか、ゼロの身体が崩れるのが早いか。

ゼロのパーツである金属と樹脂(じゅし)、そしてマナの輝きが、ゼロと死神の拳と拳が交わる場所から飛び散る。それは互いの身体と身体を削(けず)り合っている証(あかし)だった。

○

再び屋上まで戻ってきたヒロシは、そのゼロと死神の殴り合いを目(ま)の当たりにして、背筋に冷たいものが
るのを感じていた。

——死の気配なのか？

生業としての「死の気配」は、刑事時代に嫌になるほど感じてきたものだが、自分自身の戦いとして目の前で繰り広(ひろ)げられる「死の気配」の戦いは、見る者の
を慄かさずにはいられなかった。

——アニキの視線は気づいていた。けれど……。

ヒロシは怖れにも似た感覚に身体を硬(かた)くする。

——死神は、俺(おれ)にその後のことを託そうとしているってことじゃないか……！

それはヒロシも認識していた。かつて、死神は神というシステムそのものを破壊(はかい)しようとした。
も、その思想は変わっていないはずだ。となると、ゼロを破壊することは死神の望みでもある。が、そ
れは世の中を混乱させるためではない。天使という存在そのものを葬(ほうむ)り去(さ)ることを目的としているはずだ。

つまり、共倒(ともだお)れにならなければ、死神の目的は果たせないことになる。

半ば呆然としていたヒロシを正気に戻したのは右方から聞えてくる声だった
それは言葉にはなっていなかったが明らかにヒロシを——ブレイブを称える声だった大勢いると遠巻きにゼロとの死闘を眺めている人々がヒロシの存在に気づいたようだった

——やっぱり俺はしなくちゃいけないことがあるんだ……。

人々からこの事態を収拾することを期待されているのはわかっていた自分はまだ英雄なのだ
ヒロシは全てを見た生死を賭け身を削り合う戦を行っている人々死闘の中ヒロシが戻ってきたのに気づいたようだった
その視線は一度だけヒロシに向けられた

——わかった……。いやわかっていた……。

ヒロシは死闘の視線すべてを理解した

○

「お俺達の戦が……」
「もうすぐ終わる……か」
けいすと激しくささやきあった殴り合いが終わりつつあることは明らかだった
ゼロはそのボディのかなりの部分を失っており既にマナで守りきれなかった打撃によって相当のダメージを受けていた

「勝負は次の一撃で決まる……かな？」
海次郎がそう言った。
と、その目を横に動かす。草を踏む音が聞こえたのだ。
「まさか……」
健太郎が驚きの声をあげた。
希介が再び歩み寄ってきていたのだ。しかも、その手で綱行の身体を引きずっている。細身の身体からは信じられぬ凄まじい膂力であった。
が、何より驚かされたのは、ぐったりと力なく引きずられるままになっている者の姿、だった。
「綱行師範……。まさか、殺……った……」
海次郎が言葉を詰まらせ、問う。
希介は静かに首を振った。
「マナを失っては、手加減ができなくて。、人間はそれだとなかなか死なないんですよ」
そう言って希介は、握っていた綱行の腕を放った。綱行は力なく草の上に倒れたが、微かなうめき声をあげていた。
「まだ生きてる……」
そう健太郎が胸をなで下ろしたが、状況は間違いなく悪い方に転がっている。健太郎はけいすをかばうようにして後ずさった。

有栖川は一枚上手。

「そんなわけで、この方殺なんて時間がかかることを後回しにして、けいすの方が先手を入れておかなくてはと思ったもので。『ゼロ』を封印する可能性がある。問題は、それがどのようなものか、見ていただかなくては」

じり、と有栖川が一歩を踏み出した。

鬼塚恵はひるむが、けいすは激情を押しのけるようにして前に出た。

「ここは撤退……」

「いや、待て……」

鬼塚恵は悩む。

けいすはマナのない状況であっても問題なく戦闘を遂行できるようだ。相手の能力から簡単に回避してくれるだろう。だが、有栖川は手の内を読み切るほどの力を発揮している。有栖川は何らかの人為的な操作がなされているのだろう。それならば一人を戦わせた場合どうなるかはわからない。そして、完全に勝てない限り、けいすを戦わせるわけにはいかなかった。

――無理をしても自分がやるしか……。

鬼塚恵は意を決し、前に出て行こうとする。しかし、今の状況は、チェーンソーすらその手には奪った。

「ほほ、無茶をなさいますね……」

有栖川は笑い、さらに一歩を踏み出す。

と余裕のあらわれか、ふと魔術師は空中で一回転をやった。

「まぁ、状況はめまぐるしく変わりますね。おや、若者の姿が変形……」

魔術師、ちら、と人造人間ゼロの戦いに目を転じた。

もはやボロボロになって戦い続けているのが見えていた。

が、魔術師が言っていたのは、そのことではなく、視界の端をよぎった一筋の光のことだった。

それは、戦いの場をめがけて一直線に上昇していた。

「あれは……」

魔術師が声をあげた。

「ブレイブ。魔物を殺す……すなわち、魔王の名がつく者にとっては天敵でしょう」

魔術師が静かに言った。

「まさか……人間も、やってしまうつもりだって？」

魔術師が驚きに目を見開いた。

ブレイブは一直線にゼロとの戦いの場に突入していく。

魔術師はゴーグルに手をかけた。その視界に、ブレイブの姿が拡大されて映し出される。

ブレイブは今まさにマントを翻していた。続いてその周辺に、プラズマ球が現れる。ブレイブの[illegible]

である。

ゴグルには、それがマナに由来するものではないと解析結果に表れている。さらに、ブレイブの周囲はマナキャンセラーが働いており、ブレイブを中心に数メートルはマナを行使することは不可能な状況。

「つまり……この攻撃を防ぎようがないってこと!?」

彼女は声をあげた。

このままでは、ゼロ、阿九ともども破壊されることになってしまう。

「ゼロ、そして、魔王の奴らもが消えるなら、私は新たな策を考えなければならなくなりますね。何しろゼロが消えれば、神もその機能を失うのですから」

[illegible]が言った。

「しかし……!」

彼女は反論しようとしたが、言葉にはならなかった。

阿九は命をかけて、ゼロの[illegible]なく破壊を望んでいるということだ。それを理解しているヒロシならば、の意志を受け入れて、双方が消滅することに同意しないとも限らない。

「ああっ……」

彼女は思わず声を漏らした。

ブレイブは、ゼロの背中、さらに阿九の身体でも、その高温プラズマ球をまとった姿で貫いたのだ。

灼熱のオレンジの光線となったブレイブは、激しい戦闘の最後、一瞬にして、まさに一刀両断に切り裂いてしまった。

ゼロと同時に、ボロボロになった身体を一瞬だけ自由なように上空に横たえたが、最後に起こったゼロの爆発に飲み込まれ、オレンジの光の海の中に消え去ってしまった。

まるで小型の太陽が空中に出現したかのような光景だった。

ゴーグルをつけていた天馬でさえ、まぶしさにその顔を逸らした。

やがて、その球体が消え去り、空中から落ちてきたのは、天使の残骸と、一体の黒焦げの物体。その後ゆっくりとブレイブが聖堂の庭に降りてくる。

「あ……あ……」

教皇は茫然と我を失ってうめいた。

天使の残骸は戦士ゼロのものだろう。となると、黒焦げの物体は間違いなく……。

「よくやってくれました」

教皇は天から降りてきたブレイブを、歓迎するように手を広げた。

ブレイブは教皇の目の前に降り立つと、会釈をした。

「まずは悪魔を倒してくれたことに感謝しなくてはなりませんね。あなたがここのところの事件の謎

ヒーローですね」

「そう言われているようです」

ブレイブ……ヒロシは、落ち着いた声を出した。

「それならば、あなたは、この帝国のために、私のために戦ってくださっているということでよろしいのかしら？」

女帝は、試すようなことをさらりと言ってのけた。

ブレイブは口の端だけをつり上げて笑った。マスクから唯一露出しているのは口元だけだったが、それだけでも不敵な表情が見て取れた。

「そいつは違うな。国のためでも、あんた個人のためでもない。泣いているから放っておけない性分なんでね」

ぴくりと女帝の表情が動いた。

常に穏やかだった彼女の完璧な笑顔に、今はじめて歪みが生まれたと言っていい。

「あなた……何者なの？　そして、何のために、そんな危険なスーツをまとっていらっしゃるの？

「どうせ、身の上については陛下もお気づきのことでしょう。しかし、素性を伏せていただければ、こいつを

ている間抜けは、ブレイブ。それ以外の何者でもありません。そして、俺の目的はふたつ。正義と平和」

「……ほ、ほほ」

女帝はブレイブの言葉を聞いて笑い出した。

「ほほほほほ！　ねえ、おかしいこと。どうして借り物の力で、単なる臆病な学生だったあなたが

そんなに大きなことが言えるようになったのかしら！」

「そいつは違うね。この世の中で自分で身につけた力なんかありゃしない。大抵、望まずに生まれつき持っていた

か、他人の何かを気まぐれに与えてくれたものでしかない。だったら、無理をしてでも、その力にふさわしく振る

うのが正しい生き方」

ブレイブの声は揺るぎなかった。

「……ということは、あなた、魔王を殺しておきながら、私に従う気はないというわけでよろしいのかしら？」

魔王はやや声を震(ふる)わせて問う。

「いや、そうじゃあない」

ブレイブは首を横に振った。

「そう、それなら……」

「あんたが俺に従うんだ。これまでと同じ生活に戻ってもらう」

「な……」

魔王は言葉を失った。

「ゼロは破壊された。これまで通りの生活に戻ってもらおう。言いたいことはそれだけだ」

ブレイブはそう付け加えた。

ふと、魔王から殺気が消える。だが、その一瞬後には、ほれぼれするような笑顔が戻ってきた。

「おほほほほほ！　そのようなことを私に言ったのははじめて！　でも、お気づきかしら？　マナはまだ消えていませんわ！　それは、未(いま)だ神がその機能を失ってはいないということ」

魔王はそう言って、手の中の光の剣に宿った。

「何を……」
ブレイブが問うと、無精髭の男は剣を振るった。
その切っ先が、足を押さえてうめいている女の細い首もとに突きつけられる。
「……まだ人質が要るなら、この娘にも価値があるでしょう？　違って？」
「底が知れるぞ、卑怯者」
ブレイブは首を振った。マナキャンセラーを稼働させたのか、無精髭の男の光の剣が消える。
「底が知れる？　私は底などありませんよ」
無精髭の男は女を抱きかかえると、軽く後ろへ跳んだ。そして、冷たい笑みをブレイブに投げる。
「ねぇ、あなたこそ底が知れますよ。二度も同じ手にはまるなんて」
そう無精髭の男が言ったとき、ブレイブを遠距離から取り巻くように、電磁障壁のフィールドが発生していた。これは電磁
遮断してしまうもので、ブレイブのスーツのエネルギーが亜空間から転送されてくるのを遮ってしまう。あらかじめスーツの機能を知っていた2Vが使った戦術だ。だが、本来はそれを知らなかったはずだが……。
「そうか……。2Vの記憶までも手に入れてしまったということなのか……」
一連のやりとりを見ていた女が、感嘆の声をあげた。
「その通りです。さぁ、これで、あなたのエネルギーもそれほどは保ちませんよ」
無精髭の男の宣告がブレイブに向かってなされる。

しかし、ブレイブはしっかりと顔をあげていた。

「どっちにしろ、あんたの腹がわかればそれでいいんだ。こっちだって、そうそう間抜けで

もない」

「……なんです？　もはや、あなたにできることなどないはず。マナキャンセラーの[illegible]

てきましたよ」

[illegible]は、[illegible]の手中[illegible]の光[illegible]せていた。

「しかし、あなたは[illegible]きれば、無理に殺すこともないのです。さぁ、おとなしく受け入れてくださ

いな。[illegible]あなたに期待していることがある。あなたの[illegible]、私の指の下(もと)で[illegible]れぱよろしい」

「それで、従わなければ[illegible]って？」

ブレイブは挑発的(ちょうはつてき)に言った。

「さぁ？　あなたのお[illegible]かしら？」

[illegible]は可愛らしくとぼけてみせる。

ところが、ブレイブは堂々と胸を張った。

「こっちだって、そうそう間抜けでもないと言ったのに」

そして、ブレイブはすぅっと手をあげる。

[illegible]、その反応を待ち構える。が、何も起こった様子はない。

「ふ……。何のつもりで、そんなことを……」

「俺は俺の正義を貫き通す、悪ない正義を持っているさ」

ブレイブは、にやりとした。

「……！　まさか……」

天邪鬼はその場から飛び退いた。

一瞬前まで天邪鬼が居た空間を、黒い影(かげ)が素早くよぎった。

「謀(はか)りましたね！」

不覚を取った天邪鬼は、先程とは明らかに顔色を変えた。

黒い影はするりと絡めすくい上げ、そこにそそり立った。

「謀ったわけじゃあないさ。何しろ、坂本の体は無限になっているんだから」

死神は、ぼやくように言った。

黒い影に見えたのは、まだ体の一部分の影が残っていたからである。今、黒い部分の影が剥(は)がれ落(お)ち、不死からつるりとした肌がようやく正体を出してきたところだ。

「どこまで馬鹿にしたことを……」

天邪鬼は低い声をあげる。

その声は、今までとはうって変わって、闇の者に恐怖を与える響きがあった。

しかし、その顔だけは、今までと同じ、いや、今までよりも輝きを増したような笑顔が浮かんでいた。

「……あなたたち、皆、抹殺（まっさつ）します」
熾天使が宣言し、手を振った。
と、周囲の空気そのものが振動（しんどう）をはじめたような錯覚。熾天使の周囲に旋風が巻き起こりはじめた。
その光景を見た魔法使いは、はっとして声をあげる。
「これは、マナ・バースト……！」
魔法使いが叫ぶ。マナを暴走させ、マナそのものを爆発分解させてしまう術。当然、それらは魔法として使うものではない。暴走してしか起りえないものだ。それは、マナが関係しているすべての物体を消散させる[illegible]
のだ。
「そんな、自らも滅（ほろ）ぼすような危険を冒すことを……」
「狂（くる）ったか……！」
阿九ブレイブは声をあげるが、熾天使はそれをあざ笑った。
「いいえ。ゼロならば、普通の魔法による詠唱不能、私だけは生き残ります。魔王、あなたも自分だけは生き残せることができるでしょう。しかし、この場の全員を生き延びさせるほどの結界魔法は、基本的に人間であるあなたにはないはず」
「自分だけ助かるか、仲間を助けるか選ばせる気か！」
魔法使いが叫び、けいすを守ろうと結界で覆（おお）い被（かぶ）さる。
が、けいすは、その熾天使の行動に反応しなかった。直立し、微動（びどう）だにせずにいる。
「……？」

渉は思わずけいすの顔を見る。

けいすの目の色が変わっていた。そして、それまでとは違う口調で、なめらかに口から流れ出す。

「ゼロ、全能力移行、ボディを出ず、ネットワークに浸透するモードへの変更です。日常はゼロへ体を私に譲ってください」

「な、何を言っているの？　まさか、思い出したってこと？」

渉は思わずけいすに声をかけた。けいすは、その一言で目の色を取り戻す。そして、振り返る渉に向かって、しっかりとうなずいた。

「思い出しました。ゼロは……」

しかし、その言葉を遮るように、柳井が言う。

「思い出したようですが、もう遅いですよ」

柳井は微笑んだ。

地面が、強烈な重力に、圧力をかけられたようにへこみはじめていた。柳井の体の周囲、数メートルほどの円形の地面が、その外側へ崩れかかったように、雪崩も起きたかのように下へと落ち始める。そして、その範囲は、さらに外側へと広がっていく。

「消え去りなさい」

柳井が冷たく言い放った。

その瞬間、光が周囲を満たした。

上空から見れば、直径一キロほどの球状の物体が忽然と出現したのがわかっただろう。その高さは数百メートルに及び、かなりの距離から肉眼で観測可能だった。

その光の持続時間はそれほど長くはなかったが、それが消えたとき、そこには、誰一人として生きているものはいなかった。ただ、巨大なクレーターだけが残されていた。

２　月に行う

意識を取り戻した絢子は、自分の怪我が治っていることに気づき、思わず自分の手をしげしげと眺めた。

どうやら、地上付近の空に上がっている。見下ろすと、はるか下方に、街、それをひどくえぐり取っているクレーターが
えた。

自分の体が上昇しているわけではないとわかったのは、その体特有の軽やかさを感じたからだ。顔を上にあげる
と、すぐそこに阿久斗の顔があった。

「ひ！」

思わず声をあげていた。

それに気づいた阿久斗が、うなずき、穏やかに声をかけてくる。

「ああ、目が覚めたみたいだね。大丈夫かい？」

「だ、大丈夫……」

恥ずかしさに目をそらし、絢子はそう言ったが、頭の中で現在の状況を整理して、気を失う前に聞いていた加寿子と阿久斗たちのやりと
りを思い出す。

「……っ、ま、まさか、私だけ生き残せる選択をしたんじゃあるまいな？」

恐ろしい考えが、絢子の脳裏に浮かんだ。先輩は、阿久斗と自分の命があと数分か数秒も生きないと告げていた、ということは……。

「いや……」
阿七が申し訳なさそうに微笑んだ。
——まさか……。生存率……。
絢乃は一瞬、背筋に身体を打ち震わせる。まさか、多くの人の中から自分を選んでくれたなんて……。が、その歓喜もす
ぐ後は、その考えの浅ましさと、多くの人が死んだという罪悪感がやってきた。
「まさか、まさか、生存率……」
そう声を震わせて聞くと、阿七が申し訳なさそうな顔のまま言った。
「いや、転送したよ。他の人も」
「他の人も？」
「その場の全員だよ」
こともなげに阿七が言った。
「全員転送したの？」
絢乃は声を裏返らせた。
阿七はうなずく。
「やってみたらできたんだ。全ての状況を把握して、一人一人の安全な場所を探して転送させたんだよ」
そう、帝都の西部で起こった大爆発は、驚いたことに、一人の死者も出さなかった。爆発の周辺口に及び、そこだ
に巨大なクレーターになってしまったにもかかわらずだ。

もちろん、爆発の中心となった殿の周囲は、人が集まっていた。彼は、クレータと化した土地にいた人々が、一瞬のうちに目の前で原形を変えていった

ことだけは覚えていた。遠くにあの爆発を見たのは、その後だ。そして、しばらく考えて、後に人々は、自分が何

に巻き込まれていたことを知った。

もちろん、彼は誰にも、どうやってこんなことをやってのけたのかは知るよしもない。

「そんなことが……できるのか？」

勿論、さすがに信じられなかった。

集まっていた人々は数万になったろう。それらの人の居場所を把握するだけでも驚異的なことだ。まして、それ

を転送するとなると、到底信じられないほどの精神力が必要だったはずだ。砂の入った箱の砂粒をひとつひとつ

し、それを別の場所に一個ずつ移し変えるような行為だ。

本当にそれは不可能だと信じていたからこそ、マナ・バーストを引き起こしたのだ。せいぜいが処刑を抱えかか

た数人しか助けられないと踏んでいたようだ。

「でも、まぁ、できたんだから。他の者は皆、少し離れたところに転送しておいたよ。でも、君は意識を失ってい

たから、僕が連れて逃げたんだ。怪我は僕が治しておいたよ」

阿九はごく当然のことのように言った。

「そ、そうなのか……」

納得し胸をなで下ろすが、一方でどこか残念さを感じてもいた。

「それじゃあ、降りようか。みんなを転送させた先へ行こう」

阿見光はそう言って、瞳を閉じる。

その様子はひどくゆっくりしたもので、綺羅は自身の体を阿見光に密着させていることがひどく恥ずかしく感じられはじめた。邪な考えの後ろめたさもあったのかもしれない。

「わ、わかった……。と、ところで、少し離れられないか？ 私だって飛翔魔法(ひしょうまほう)くらいなら使えるから……」

綺羅がそう切り出すと、阿見光は首を横に振る。

「ごめん、少し我慢(がまん)してもらえるかな？ 離れたら、魔素が足りなくなるんだよ。僕は魔素を熱に変えて周囲から集めているから。それに、この世界は飛翔魔法を使えるほどマナの濃度(のうど)が濃くないんだ」

困ったように阿見光は言った。

「ここは、そんなに高いのか。だが、それなら早く下に降りればいいだろうに。今のお前なら、あっという間に下に降りられるのだろう？」

もじもじしながら綺羅は言った。

「いや……少し、二人だけで話しておきたいことがあって」

「え？」

綺羅は驚いて、阿見光の顔を見る。彼は今、久しぶりに見る幼馴染の少年の顔で、妙(みょう)に照れたように目を泳がせていた。

「ど、ど、どうしたんだ。お前そんなにあらたまって」

妙に真剣な阿見光に、綺羅は少ししどろもどろになってしまう。

すると、阿知見は、すまなそうに、ゆっくりと話し始めた。

「僕の神の力をすべて使えるようになったから……つまり、他の人生の記録を見ることができるようになって

しまったわけで……」



「え？　ちょっと待て。それはつまり、私がこれまでの出来事を記録で見てしまったとか、そういうことなのか？」
綺納は慌（あわ）てた。
すると、純也は気まずそうにうなずいた。
「……ごめん。だから、天入りの時、謝（あやま）っておこうと思って」
「ばっ、馬鹿！　そ、そんなもの、悪夢みたいなものじゃないか！」
「だ、だから、ごめん。でも、僕が関係するところしか見ていないから……」
「それだけで十分だ！　ま、ま、まさか、私がお前のいないところで何をしていたか、わかってしまったというわけか？」
綺納は顔を真っ赤にして、首を左右にぶんぶんと振り回した。
「……うん。その……なんと言ったらいいか……」
「うわぁああ！　やめろ！　すると、私の気持ちに気づいてしまったと……。まさか、そういうことなのか？」
「うん……そうなんだ」
純也は小さくうなずく。
綺納は「ひぃいいい」と小さく甲高（かんだか）い悲鳴をあげ、自分の顔を手で覆った。だが、純也が無言でいると、観念したのか、あるいは自棄（やけ）になったのか、震える声で問う。

「……じゃあ、私のことを、受け入れてくれるのか？」
すると、純夏は真面目な顔で答えた。
「もちろん」
「え……え……」
綺莉は目を広げ、信じられない、という顔で純夏を見返した。そして、ほとんど泣きそうになりながら
びに唇をわななかせる。
「じゃ、じゃあ……私は……。私は……」
そう言いながら、綺莉は純夏の身体に腕を回す。
「大好きよ。その……君が、僕の想いを越えて、国を捨ててくれたことがわかったから」
純夏はきっぱりとそう言った。
綺莉の言葉が怪しくなってきたことに、純夏は気づいて、腕の力を緩める。
「……ちょ、ちょっと待って……理想？　思想」
「え？　だって、そう言っていたじゃないか。君は、淑恵さんのことを嫌っていたけれど、彼女は
て話してから、結婚を彼女と決めて……。戦争は嫌いになった」
「そ、それはだな……」
綺莉は口ごもる。

それは淑彦と綾乃は気が合うだろうと阿九が言ったことが原因なのだった。淑彦は女性が、綾乃と出会ったのは幽閉中のこと

で、その時、淑彦（よしひこ）と結婚、異性を意識していたのだ。綾乃としては、自分が異性と付き合うべき、と阿九に言われたと思

んでいたのだ。

しかし、それと恋愛の問題は何の関係もない。というか、阿九は、夫婦の実の心を何も理解していないとしか思な

い。

そのことを証明するかのように、阿九は改めて言った。

「それは、君が淑彦くんと話して、僕のしようとしていることを聞き、それに共感してくれたからだとわかったんだ。だから、僕は君に応（こた）えるためにも、この戦をやりとげるよ」

「……もしかして、その……私がしていたことを見たと言っても、そこしか見ていなかったのか？　私が毎晩ベッドでしていたこととか、一人の時つぶやいていたこととか、そのあたりは聞いていないのか？」

複雑な表情になった綾乃が、小声で聞く。

阿九は不思議そうな顔になった。

「そうだけど……。もちろんプライベートなことは見ていないよ。そんな失礼なことをするわけがないだろう？」

「は……は……はは……。そうだよな。するわけない……よな……」

綾乃は冷や汗を流しながら笑った。

「うん、ところで何か変なことをしていたの？」

「いやいやいや！　まさか！　そんなことはないぞ！　さ、さぁ、早く皆のところに行こう。

の健康状態わかったから」

[illegible]そう言って、脱力した様子を見上げた。

「大丈夫？　どこか痛めているとか、寒いとか？」

その様子に気づいた[illegible]聞いた。

[illegible]は首を振ってから、[illegible]の頭をこづいた。

「なんともない……。だけど……とりあえず殴らせろ」

それから、[illegible]は何度も[illegible]の頭に拳を振り下ろした。

「痛い、痛いよ。体は丈夫でも痛みは感じるんだ」

[illegible]はぼやいた。

「知るか！　しばらくおとなしく殴られておけ！」

[illegible]は怒鳴り、殴る拳に力を込めはじめた。

○

「こんな[illegible]った　たとは、[illegible]ていたということだねぇ」

健志は、遠くに見える建設中のクレーンを見上げながら、感慨深げに言った。

「結局あの姉ちゃんがやったってこと？」

聞いたのは、健志だけなのである。彼は今、服を着ていた。脱いでいた服と一緒に転送されていたのだ。

今度は宮殿跡を望むビルの屋上にいた。そこに転送されたのは、健志だけではなく、けいすけ。そして、ヒロシも、エネルギー切れで動けなくなっていたところを同じように転送されたのだ。

「それ以外ないでしょ。個人的には信じられないけれど、アニキなら全員を助けようとするに決まってる」

ヒロシが、どこか照れくさそうに言った。

「その場にいた全員を救った……。まさに神の所業ってところかな。でも、神の力としか思えないだけに、普通はそれを人間がやったとは思わないだろうね」

健志はそう言って、ビルの下に目を移した。路上には、宮殿の周囲に集まっていた大勢がひしめいている。その全員の様子を聞き取れないが、それを神様がやったと思っている者がほとんどだろう。

「奇跡としか思えないから仕方ないでやんしょうね」

ヒロシもこの辺の前向きさは相変わらずの口調である。

「まぁ、感謝してるのもいいけど、こっちはこっちで聞かなくちゃいけないことがあるんだよ

ねぇ」

健志は姉を急かすように向き直った。

けいすは、これまでとは打って変わった真剣な表情でうなずく。さらには口調でもまともなもの
になっていた。
「記憶を取り戻しました。おそらくは、ゼロの覚醒のためかと。私の頭脳がゼロに関連づけられているようです
「そういうシステムになってたわけね。で、ゼロも覚醒するって？」
「可能性は高いと言います。中心となる機能すらもたず、神経とほぼ同化した状態です」
「どういうこと？」
「今まで姿を見ていたゼロは、いわば端末です。その端末を放棄することで、外部から直接その神経ネットワ
クを侵食しはじめる状態に移行したということです」
「……ゼロが外部の神経を統べるための中核という話だったけれど、その外部の神経自体がコンピュータ・ウィルスのよ
うに神経の侵食をはじめたというわけか」
「つまりはそのようなことです」
「それで、対抗する方法というのは？　ゼロの本体の機能がそのようなものなら、コンピュータ・プログラムに対
してワクチン・プログラム的なものを撃ち込むことになるのかな？」
「いいえ。ゼロの本体、つまり、ゼロは自我を持っており、それは生まれた地に留まっています。その自我
を抑え込む、それこそが有効です」
けいすがそう言った。
加奈は、さすがに首をひねる。

……「自我……？」
「自分で自分があるという『自己認識』。それを自覚するという考え方のことです。神経回路は、本来そのような自我を持っていません。ゼロだけがそれを持ち得る。そして、それが神経回路網を支えているのです。その自我を抑え込まなくてはなりません。そして、自我はブラックボックスである以上、ゼロ本体の神経構造ごと、処理を施さねばなりません」
けいすは、そう言って自分の胸を指差した。
「私は触れ、自我そのものを抑え込み処理しなくてはなりません。けれど私は、ゼロのブラックボックスを包む外殻とリンクしています。私はゼロの一部、という言い方も可能でしょう。私ならば、ゼロの自我を、いわば〝睡眠〟させることができるのです」
朱里は「なるほど」とうなずいた。そして、けいすに問
「ともかく、生まれたところに行けばいいわけか。で、それはどこなの？」
そう問われたけいすは、自分を指していた指をなぜか〝上〟と持ち上げた。
「上？　何か来たの？」
「ん……。何もないよねぇ？」
けいなと朱里はいぶかしんだ。そこには、白い天井が寒々しく見えているだけだったからだ。
ふと、朱里は気付く。
「まさか……」

けいすがうなずいた。

「月です。月に行かねばなりません」

「そりゃあ……まいった。[illegible]は[illegible]でだ」

慧音は驚き、お手上げだ、と両手を広げた。

「昔は月の都と交流もあったって歴史は聞いているけど」

けながら言った、[illegible]だけはできるけなである。

「さしたる成果は得られなかったため、破棄された。その後の[illegible]ために忘れられた。もちろん（[illegible]の、[illegible]の）の相悪か

ら認識されてすらいないが……」

慧音の月の[illegible]ついて知っていることを確認するように言った。

「それは違います」

けいすは首を振った。

「月の都が破棄されたのは、皆さんが歴史で習ったのと違い、ゼロを封印するためです。ゼロは月の都の制御プログラム

そのものでもありました。しかし、ゼロを起動させなければ月の都の機能しない。月まで来るしかありま

せんでした」

慧音は驚き、考えてみれば、ゼロが月の都の黎明期の出来事に関係しているのは当然のことなのだが、知れていた

ととはあまりにも違っている。

「驚いたねぇ……。しかし、結局月へ行かなければならないのに、どうして地上からゼロの封印を解くこと
が可能になっていたの？」
「眠っているゼロを神経システムとして機能させるため、私は地上にいて、ゼロとのリンクを保ってい
ました。私は分身を介して封印を行っていたのです。そして、いつかゼロのブラックボックスを解析し
がため、私を通してゼロの封印を解除可能なようになっていたのです」
「それなら、そのための関係が存在していたはずだよねぇ……。私も噂程度だけど、そういう噂は聞いてい
いな。考えられるのは、黒魔術師CIMO8……」
地球人は、様々な事象が一点を指していくのを感じていた。
「まいったねぇ。これまでの謎とされていたことが妙に符合していくよぉ。何故時間がタブーとさ
れてきたのか、何故皇帝直轄として生き残っていたのか、何故起こったのか……」
真顔。しかし、面白いように地球人の合理的思考を述べはじめた。ヒロシがそれを遮って言う。
「考えるのは後でいいかもしれませんや。どうやっても月は待てないんじゃないんですか
え？」
その質問を受けて、地球人はけげんな様子を見せた。
「これまでの話と、結局、月へ行く簡単な方法が存在することになるよね？」
けいすはうなずいた。
「はい。月へ行く方法は既にあります」

ヒロシもそれを聞いて相槌を打つ。

「ああ、そうか。再封印の必要がある品かもしれないから、保管場所があったのか。それはどこに？」

『コンスタン』魔術学院の敷地にあります」

「なるほどねぇ。やっぱり最初から争奪戦。それをめぐっての攻防だったってことになるよね

え……」

悠人は感嘆の声を漏らした。

けいすはそれには答えず、さらに話を続けた。

「しかし、ゼロも魔界の因縁の場所を知っています。さらに神格化したゼロは、さらに結界破壊システムと化し、私は守

かかってくるはずです。あらゆるマナ準拠のシステムが……つまり、防衛機構から空気清浄機まで

までが、私と魔王を破壊せんとしてくることになるでしょう」

恐ろしいことをけいすは言った。

「それはなんというか、大変だねぇ。じゃあ、あんまり時間をかけているべきじゃないってことだよ

ね。でも、ゼロは君を発見できないんだよね？」

悠人の質問に、けいすはうなずいた。

「そうです。ですから、ゼロは我々の拠点に近づく者はなんであれ攻撃するように設定された防衛機構であるはずです」

「より人間に近くなるわけだよね。いや、といっても向こうは神格化した存在でもあるわけだから、どちらかと

いうとこっちが悪役かあ。すると、神に逆らうというよりは、私たちが勝手にやってる会社への反抗ってこと？

そのわりには話し方が楽しそうに見えないけどねぇ」
潤也は苦笑を浮かべる。
「巻き込んで悪かったと思っているよ」
悪びれない潤也の言葉に答える声があった。
上空から純夏を抱えた阿刀が降りてきたのだ。
「あーちゃん！ 純夏ちゃんも！」
駆けながら声をあげ、阿刀たちに駆け寄った。

○

阿刀の姿を見たヒロシも笑いながら駆け寄ろうとしたのだが、阿刀の顔を見たとたん、足が止まってしまった。
悲しい表情をしてはいない。もちろん、阿刀は今も寄り添っている。
だが、先程阿刀の攻撃を落とす決定をしたとき、阿刀が一瞬見せた表情を思い浮かべてしまったのだ。
ヒロシは最初から左右を打つつもりだった。阿刀もそうして欲しいと願っていると信じた。だが、その最後の
を焼くべく両面プラズマを炸裂させたとき、阿刀はヒロシに微笑んではくれなかった。その表情は
かな悲しい覚悟だけがあったのだ。
——あれは、殺されても構わないと思っている顔だった……。

阿刀兄はそういうところがあるのはわかっていた。以前、大勢の敵兵を前にした時、そのような顔を見たことがある。だが、前回のそれは、自分独りは殺されたほうがマシと信じていたか、あるいは自分を捨てなくてはいけないと信じてのものだった。いわば、悲壮な覚悟にあふれたそれだ。

しかし、今回のそれは、まるで趣が違っていた。

――あっさり死に、その後のことを任せようとしていた……。

阿刀兄は、自分の死後の処理を、他人に託そうとしているのだ。全幅の信頼をおかれているといえば聞こえはいい。だが、ヒロシには、それは余りにも重く感じられた。つまり、ヒロシは自分の死後、最後の側に立つことを求められているからだ。

今回の戦で、何が起ころうと、阿刀兄は自分が殲滅するような形で幕を引くだろう。だが、その後、最後の側が殲滅することも綺麗に勝敗が決することも許されない。衰えようが、非力であろうが、胸を張って戦わなければならない。決しての安息は訪れないのだ。

じわり、と心に生まれたそんな違和感を、ヒロシはとりあえずは抑え込んだ。そして、ヒロシは阿刀兄に言った。

「話を聞きやしたか？　まさか、今月の戦を最後に引退しないといけないなんて……」

「聞いたよ。だけど、僕は、これからは君たちに戦ってくれとは言えないな」

阿刀兄は、そう言った。

その言葉に、ヒロシは心がちくりと不快なものを感じる。その違和感は自分に向けられたものではないから

だ。それは阿久津の力が認められている証でもあったが、妙に心を揺さぶった。

それでも、ヒロシは阿久津に握手の手を差し出した。

「本当のことを知っていたら、やらないわけにはいかないっすよ」

「ありがとう」

阿久津はヒロシの手を握った。

その握手の温かさと力強さで、ヒロシはなぜ心に重圧を感じたのかを理解した。

阿久津は、ヒロシを自分と同等の存在と見なしているのだ。

——それは買いかぶりっすよ。あっしはそんなに強くない。結局、スーツがないと何もできないんだし……。

ヒロシはそんな内面を読み取られないように、話題を変えた。

「やるとなったら、状況を見てみた方がいいんじゃないんすか？　アニキ、最近の様子ってスクリーンに出せます？」

「ああ」

阿久津はうなずき、マナスクリーンを展開する。映し出されたのは『コンスタンツ』の現在の映像だ。

背後からそれをのぞき込んだ海斗が、感心した声をあげた。

「ゼロが主導権を握っている今、私たちが魔術を使えないのは自明の理からねぇ。それにしても、今の君はなんでもできる

ね。しかし……これは、どうなの？　自由に動かせる軍勢が揃ってるんじゃない？」

学院の敷地は周囲を兵士たちが展開していた。大勢の兵隊が、そこには数千人と思われる人数と、数多の戦闘車両が展開していた。

「魔術師団は向こうも市民を巻き込まぬように展開できなかったけれど、ここでは違うってわけかぁ。魔法の

が自陣から、戦艦が出ていないだけマシなのかな」

「でも、これだけの数を揃えられたら、あっしとアニキ以外は戦えないっすよ」

ヒロシが言うと、それには夕月も同意するようにうなずいた。

「僕だけでけいすを維持して行くしかないね」

その夕月の言葉に同意するように、それまで黙っていたけなが口を開く。

「やっぱり、無理だよ、あちゃん」

「無理？」

「危ないもん」

言わずもがなのことを言うけなに、さすがに一同は驚いたようだった。ぽかんとしてけなを見つめ

る。ヒロシも戸惑ったが、一方で感心していた。

——けなちゃんは、思ったことが素直に言えるんだなぁ……。

そして、そのことが夕月の本音を引き出してしまうようだった。

「そりゃあ、危ないことはわかっていたわけで……」

「もちろん、あーちゃんのしたいこともわかるし、しなくちゃいけないことのような気がす
るけど……だけど……」
けなは、潤んだ目でヒロシを見つめた。
「確かに、僕らってきっと、何度も死なないや……。でも、僕は、きっと、こういうことを終わらせるた
めに生まれてきたんだ。だから、仕方ないんだよ」
ヒロシは、どこかあきらめたような、すべてのものに倦んでしまったような、独特の目をして言っ
た。
と、けなは、頬をふくらませた。
「もう！　次そんなこと言ったら、怒るからね！」
「もう怒ってるじゃないか。でも、怒るのもわかるよ。君は何度も危険な目にあったし、四日前もとんでもな
い爆発に見舞われたりしたわけで……」
「そういうことじゃなくて！」
けなは怒る。
それを見ていたヒロシにも、けなの気持ちは理解できた。いや、むしろ自分の苛立ちをけなが代弁してくれて
いるかのようで、ヒロシはそれが自分で言えなかった情けなさを身にしみて感じていた。
——いつか、ひどいことにならないといいけれど……。
そうヒロシが思った時だった。いきなり背後の死神が振り返った。

「あれを……！」

星空の一角に、数秒、空間のひずみが巻き起こっていた。それはマナによる転移魔法の際のそれに似ていたが、まるで違かだった。一同は、それがよく理解できていないようだったが、ヒロシには、そのひずみがなのかがすぐにわかった。

「これは、マナじゃない……」

ヒロシは驚きに目を見開いた。それはスーツを呼び出すときの空間のひずみと同じものだったからだ。

そして、過去ブレイブのスーツ以外で、それを用いた者は一人しかいなかった。

「大和(やまと)……望一郎(ぼういちろう)……」

何処かにつぶやく。

かつて、けなによって神の謎の儀式(ぎしき)を捧(ささ)げようとした男である。未来からやってきて、人類の滅亡を企ているとも主張していたのを確かにヒロシも覚えている。

その現代技術では不可能な技術による転移を成(な)し遂(と)げた男。顔面を仮面で覆い、黒衣をまとっていた。素顔を見た者はいないが、確かに異界の男である。

その彼は、かけていた眼鏡の位置を直すと、挨拶(あいさつ)もせずに、こう切り出した。

「私は、答えがある。それを実行してもらおうと思ったのだけれど」

妙なことを言う男。ヒロシは身構える。

――あの男と同じ力を使う男……。

「いきなり何を……。答えを実行してもらおうだと？ 何者だ？」

ヒロシは緊張を悟られまいと声を張った。

と男は、「しまった」とでも言いたげに首を振った。

「ああ、そうだった。挨拶が遅れたが、俺は自分の名前を言っておく癖があってね。倉橋賢人。CIMO8のメンバーだ。だが、君たちからは私に対してある種の信頼を得れると信じているよ」

その男は低い声で言った。CIMO8のメンバーでは最後の2Vと名乗った男である。

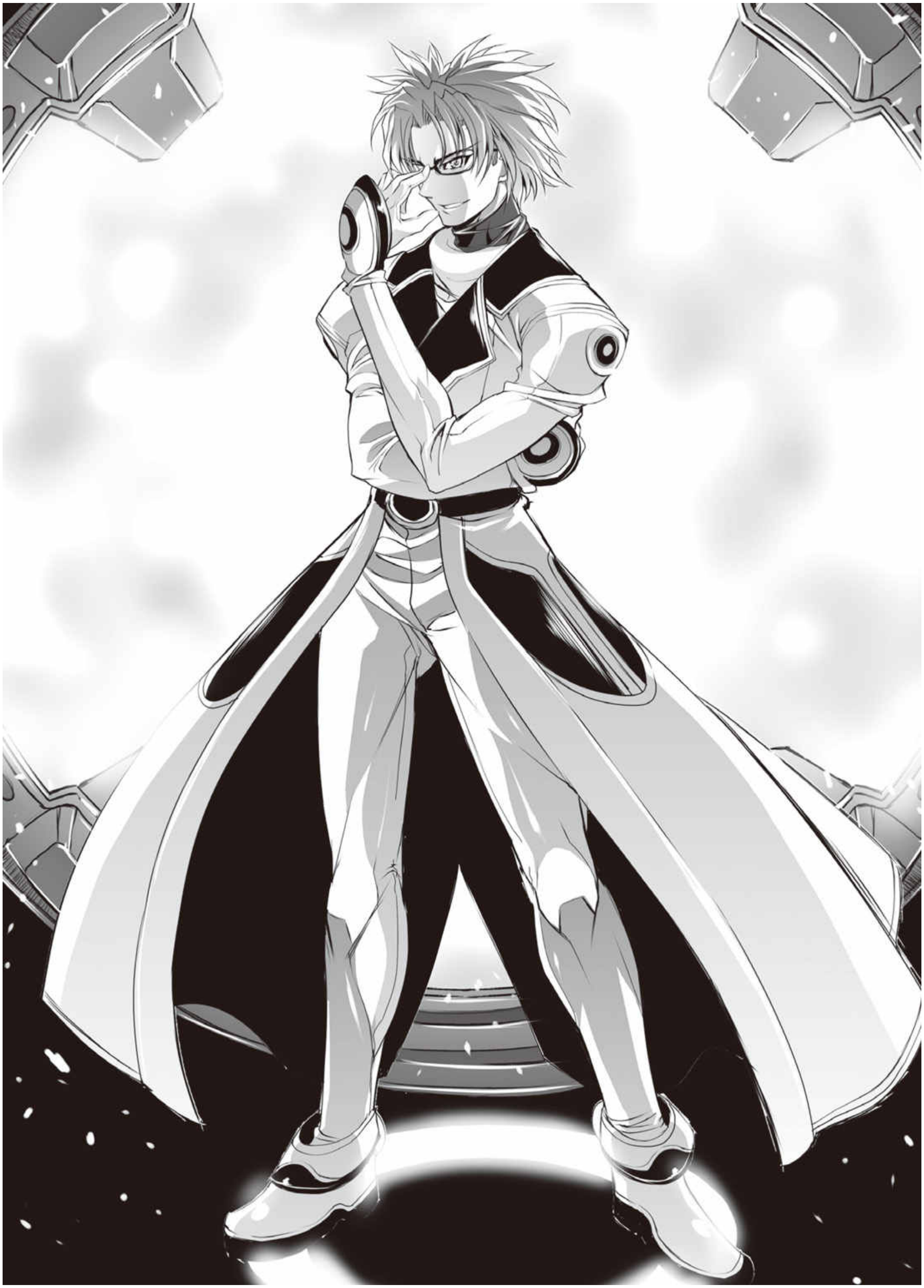
「CIMO8……つまり、『国際秘密組織』……」

ヒロシはつぶやく。だが、これまで接触したメンバーがブレイブのスーツの力を使ったことはなかった。彼は特殊能力を知っているのかも知れなかった。

「まさか……」

と渡辺が、突然声をあげた。

「コードネームUSD?」



そう指摘された黄瀬はうなずいた。

「西門はそう呼ばれているな」

「喜多さんって知っているの？」

緋村と間宮と、妹尾は妙に熱の入った口調で語りはじめた。

『コンスタン』の創設メンバーの最高幹部だった人物よ。傭兵出身として最高の栄誉であるアルファ賞を手に入れ、所属は数十言に及

ず、傭兵としても最高評価を受けている。天才であるときから最高の職務を遂行していたから、その戦闘員はCIM08のメンバーに

なったと噂があったんだよ。そして、リーダーであった某は、唯一CIM08で名が知れている

優秀すぎてその名を隠すことができなかった傑物。そのコードネームは漏れ聞えた限りではUS

D。最強と名付けられた男なんだよ」

恐ろしそうなプロフィールである。

黄瀬は元傭兵の若者からまれたな、とでも言いたげに、西門の眼を直視したが、その言葉を訂正はしなかった。

「その話し方はやり……方。俺は違う。そもそも誰が傭兵を使えば、僕は否定できる。だけど、それが本当のことなら

たものだとすれば、納得できる」

西門は言うと、黄瀬はうなずいた。

「確かにそうだ。それこそが私の言っている、ある種の才能だよ」

その時、ヒロシには一番重要な事実があった。

ブレイブのスーツをヒロシに与えたのは、自分の身内だったからである。

……「植村」というが、僕はわかった、ただそれだけだ。つまり、あんたはどっち側なんだ？　敵か、味方か」
ヒロシが諭すように聞いた。
「どっち側かといえば、どちら側でもない。つまり、中立だ。君たちか、という質問の意味で言っている。が、しかし、今は君たちに協力しなければならない。つまり、私は君たちにゼロを封印して欲しいと思っている」
僕は噛んで含めるように言った。
「何のつもりだ？」
ヒロシは相手の意図を読めずに聞いた。
「そうだね、理由は今は言えない。だが、君は……」
僕はヒロシを指差した。
ヒロシはぎくりとする。
「何？」
「君は私の言うことを聞かないといけないはずだ。君は私たちが与えたスーツを使っているのだから」
僕の真実の一撃は、ヒロシの心に突き刺さった。
「何……と……」
すると、夏川がヒロシを遮って声をあげた。
「私たち？　すると、組織に属しているのか？」

異人は、それに首を横に振った。
「行方(ゆくえ)は把握していない。死んだと考えている。確認したわけではないが」
「すると、彼の後を引(ひ)き継いでいるのか」
死刑囚の問いに、異人はうなずいた。
「肯定はね。歴史を改変されるか、されないかは議論の分かれるところだが、未来がこの時代の時間旅行者は私ということになっているだろうね」
異人はヒロシに目を向けてわずかに笑った。
「つまり、はっきり言えば、君はスーツは貸与(たいよ)しているということになる。具体的には使えないようにされているが、取り上げるのは私の勝手でできる」
ヒロシは動揺を隠せなかった。声が震える。
「……つまり、脅(おど)しているのか？」
異人はそんなヒロシを笑った。
「そう受け取るのは勝手。だが、こちらはお願いしているだけだ。脅す材料はこちらにはない。ただ、戦わなければ、スーツは必要ないだろう？　それとも、君は自警団でもなりたいのかな？」
異人の口調は脅迫的なものでなく、ごく真面目なものだった。それだけにその言葉の意味は激しくヒロシの心に響いた。
スーツの力が借り物であることは知っていたが、それを与えた者の目的に背いていれば、さらにそのことを考えさせられるばかりか、その命令に従い、いわば奴隷(どれい)となる可能性があるのだと実感させられる。

だが、どういうわけか、ヒロシはスーツを拾るという選択肢を選ばないでいる自分を感じていた。今
と兵士と戦わなければならないのだ。
「……俺は、自分の意志で戦う。それだけは言える」
苦しげにヒロシは言った。
が、それを聞いた賢人は笑った。
「そう、それを皆に言うのだよ」
そう賢人は言った。ヒロシは何も言い返せなかった。
そんな賢人の態度が気に入らないのか、阿丸は低い声をあげる。
「では、なぜあなたは直接力を貸してくれない？」
すると、賢人はこう言い放った。
「私は、傍観者なんだ。そうでなければならない」
「この状況で、傍観者でいられるということがあり得るのか？」
阿丸は、呆れたように問う。
と、賢人はそれにうなずいた。
「今回の件は、一般人から見れば、傍観するしかない状況なのだよ」
「もう良い。寝言はもういいさ。そちらの情報やらを渡してもらおう」
阿丸は不機嫌さを隠そうともせずに言った。

「いいとも。それは……」

異界人は驚くべき策を話し始めた。ヒロシもその世界の中枢(ちゅうすう)を担(にな)うことになっていた。

ヒロシは内心でうめきながら、その言葉を聞いていた。

○

一方その頃、江藤不二子(えとうふじこ)だけは、別の場所にいた。

郊外(こうかい)の公園である。同じように連れ込まれた人々が、ぽつぽつと見られる。彼女はその身に起きた奇跡に驚き、近くの人と

いの言葉を交わしていた。

不二子は近くにいた中年の婦人に話しかけられる。外面(そとづら)はいい不二子であるから、そつなく会話をこなし、婦人はこの奇

によってもたらされたと信じ込んでいることを知った。

――なるほどねぇ……。なんと愚(おろ)かなことでしょう。

そう呆れたことはおくびにも出さず、不二子は婦人と話を合わせ、奇跡をひとしきり褒(ほ)め称(たた)えて、マナ・バースト

を起こした魔王に、呪(のろ)いの言葉をかけると、挨拶をしてその場を離れた。

呪いの言葉はもちろん本気であったが、公園から少し歩いて状況を確認すると、一人だけこんな場所に連れ込まれたことに不二子は気付き、

する呪詛(じゅそ)は今からでも良かったかもしれない、と思い始めた。

「ああ……もう……無理、わたくしだけ逃げ出したからって、こんな仕打ちとは……」

そんな風にぼやく瑤子だったが、ふと視界の端に映った男の姿に足を止めた。
そして、驚きに目を丸く見開く。
「あら……　まぁ！　こんなところで……！　いや、それが神の御意志なのだとしたら、確かに粋なことをしてくれたとしか言いようがありませんわね！」
瑤子は口の中でそうつぶやく。
確かに、偶然とは思えなかった。神の見えざる手が、その人物の近くに連れて来てくれたに違いなかった。瑤子は心の中で前言を撤回すると、距離をあけて追跡をはじめた。
その彼は、何やら周囲を気にしているらしかった。人のいない方へ、いない方へと歩いて行く。この場所の奥の方が、木々が茂っているところへと向かっているらしい。後ろ暗いところがある人物特有の行動。
「あらまぁ……　都合のいいこと」
瑤子はほくそ笑み、時折背後を振り返る彼の視線に気をつけながら、さらに後をつけ続けた。
そのもじゃもじゃ頭の冴えない男こそ、鈴木一成である。
彼こそ、魔法少女たちの頭痛の種だった男である。だが、その頭痛の種という特性は、[illegible]より与えられたものだった。騙し続け、魔法少女たちの目から姿を隠し続ける、というのが、頭痛の種と与えられた特性だったのだ。
魔法少女たちの悩みの種であった。瑤子にとって、それは恨むに十分な理由であった。長きにわたり多くを騙し続け、魔法少女たちの任務を阻害してきたのだから。
――神の御意志が与えてくれたチャンス、最大限に活かさせてもらいますわ

千手はほくそ笑んだ。一成は気付かない。手頃な木にもたれて座り込んだのを見計らうと、静かにその木の後ろから近づき、側面から

の首に、彼女が愛用している鞭を素早くからめた。

その動きは音もなく行われ、一成は声をあげる暇もなかった。驚いて身体をびくりと震わせた後、苦しさに気づい

たかのように、喉に手を這わせた。

「奇遇というべきなのかしら？」

千手は木の後ろから鞭を締め上げつつ、一成の顔を背後からのぞき込んだ。

「それとも着けられた結果なのかしら？　いずれにせよ、後ろ暗いことはしたくありませんわね。い

いえ、後ろ暗いことをしたくらいで、堂々と森の中を歩けなくなるような種類の人間ではないというところか

しら？」

その声に一成は、自分の首を締め上げている者が誰なのかわかったようだった。

「や……やめろ……。千手様、あの時の件は見逃……私は、彼女があそこまで狂っているとは思っていなかっ

た……。許して欲しい……」

一成は苦しげな声をあげた。

千手は意地の悪い声を出す。

「許す？　その件について恨んでいるのではなくってよ」

「そ、それもわかっている……。秘密も話そう……。そして、協力もしよう……」

「……協力？」

冴子は鞭を握る手にさらに力をこめる。

「ご　ごほっ……　わかった……。仕方はない。君に従う……」

「わたくしの性格をもう少しきっちりわかっていただく必要があるかしら？　でも、言っても聞かないですし、ご褒美を上げないと無理ですわね、わたくし、どん欲ですの」

じらすように冴子は言い、手に込めた力を調節しはじめた。

「わ　わかった……。自分の欲求は絶対に譲る……。それでいいだろう……？」

一成から引き出した条件に冴子はほくそ笑む。

「それはどうも。でも、それほど油断する気はありませんの。生かしておいてあげますから、このままでお話しくださいませね」

冴子はやや手の力を緩めた。しかし、絶妙な力加減というべきか、決して呼吸を楽にさせない。

「簡単ですわ。殺しの技術というのも、こういう風に役に立つんですのねぇ」

物騒なことを冴子は言った。

「く……ごほっ……。ほら……あの店から秘密の倉庫に入るためのパスワードだ……。個人的なキーワードを控えているだけだから、手帳に書き……」

一成は震える手でポケットに手を入れ、一般的なマナー式手帳を取り出すと、そこに何事かを打ち込んだ。男の手の中で行われたことだったので、冴子らは何を書き込んだのか見えなかった。

「ここに……書いた……」

そう言って、一成は手帳をぽんっと遠くに放(ほう)り投げた。そこに行くためには神楽らも手はなさなくてはならない。その程度の距離はある。

その意図を天子も悟った。

「あなた……ふざけた真似(まね)をしてくれましたわね」

と一成を見て、へっ」と力なく、しかし安心したように笑う。

「……君の欲深さで助かったよ。それに私は、墓守(はかもり)のような仕事はどうでもいいが、生きてラーメンのどんぶりをねなくてはならないからね。パスワードには本物も書いた……と思うが、間違っていないとも限らない」

「ふん、拾い物をしましたわね」

天子は神楽をゆるめ、本を挟(はさ)んで後方に飛び退き、距離を取って一成の側に回り込んだ。

しかし一成はすでに走って逃げ出していた。

その後ろ姿を見て、とても追いつけないと悟ると、天子は手帳を拾いに行った。

そこには神楽の弱点が何十個も書かれていた。出任せで書いたにしては、あまりに情けなさ過ぎたので、パスワードは本物だろうと思われたが、確かめてみないことにはわからない。

「一杯(いっぱい)食わされた、とは思いたくありませんわね。真の神楽の再興……わたくしの手で必ずやってみせませんと。その前に、手持ちの神楽ゼロをなんとかしないといけませんが……」

天子はつぶやき、手帳を握りしめた。さして重要な情報はなさそうだった。が、一成の連絡先(れんらくさき)は手に入った。彼の居場所を調査することは可能だろうし、うまくやれば一成の居場所も特定できる。

――加奈子の側に味方をする……というのは無理でしょうけれど、ひょっとしたら加奈子に関する情報を与

ていたかもしれませんわね……。

しかし、厚子は、自分の命を危険にさらしてまで加奈子の側に付く気はない。が、身の処し方ははなっておきたいところで

もある。

「最後の手段でもこの情報を売りましょうか。彼女は加奈子の復讐には躍起になっているでしょうから、一成を拷

くらいしかねませんものね。面白いものが見れるかもしれませんわ……」

厚子は我ながら邪悪な思いつきが浮かんだ、と満足すると、パスワードを記憶し、帳場からは立ち去った。物的ならば

の[illegible]の[illegible]手で再現できるはずだった。

3　さよならを言われても

仮住となった。

阿久斗たちは郊外の廃屋に移っていた。かつては工場だったようだが、放棄された今は、剥き出しの土が広る
がらんとした円形の屋根がかかっているだけの、荒涼とした場所でしかない。

淑恵が身を隠れられそうな場所を提供していて、そこに研究所から装置を運び込んだのだ。今や、ゼロは日本国内のマナの流れを監視て
いる。その目から逃げられるのは、阿久斗たちの持つ阿久斗製のマナキャンセラーを使うブレイヴ、そしてけい
すの一部の者だけだ。

阿久斗は研究所のどこからか持ってきたキャンプセットを、廃墟の中に広げ、ランプの明かりを中心に各自が思い思いの
で座っている。身を隠す家が見つかったことで、しばらくは安全に過ごせそうだった。それまで周囲を気にかけ
ていたヒロシが、近くを見て回るつもりなのか、阿久斗の制止を聞き入れて出て行くが、その後、ここ最近は珍
しくのんびりとした時間が流れる。

「廃墟って、なんだか素敵なんだよねぇ。写真を撮りたくなる。退廃とか、忘れられた場所ってロマンだよねぇ。
い。過去に忘れられた歴史の死んだ場所っていうか」

由美は一人ではしゃいでいた。が、ぺらぺらとひっきりなしにしゃべりながらも、手だけは休まず動
していた。明日の計画の下準備を機械的に作っているのだ。

「作ったの久しぶりだけど、なんかクラフトガルの血が騒ぐというか、いいよねぇ。今回ちょっと

すぎるのが問題だけどさぁ」

今は、ぼろの車体を直しているところである。廃車になっていたものを持ってきて、動くようにし

ているのである。

「ということは工作全般が得意なんだね」

阿形は感心して聞く。

「プログラムを作成すると、それを使ったマナ機械化したくなるわけよ。逆に機械化すると、それを動か

プログラムも作りたくなるんだよねぇ」

満足げに得意げに言った。

そんな彼女を見て、阿形は心が静まるのを感じていた。落ち着いた状況で話したのははじめてだったが、妙にフラン

クな口調の話しぶりは、取り繕わずに話してどこか安心させられるものがある。

「どのくらいのものまで作れるの？」

「けっこうなものまでいけるけどねぇ。周囲からは、神の端くれみたいな精密機械も作れるよ。でも、ゼロから

たいな意識のものは作れないなぁ」

その口調の言葉の内容に、阿形は気になった。

「人間の意識と、阿形の意識は違うものなんだよね？」

「そだよ。我の有無(うむ)が違うんだけどねぇ。うまく説明するのは難しいな。自分たちだけで増やすことができ
る機械を作っても自我はできない。死んだ人間も長く人との関係を保っていれば、自我に似たものが生まれるけれど、最初から自我が発生して
いる人間は違うんだよ。つまり、金色の神様のものであるって言い方できるねぇ」
「金色の神様」
阿久はつぶやく。
「うん。金色の神様の生誕祭なんだってさ。たかが「そいつ」がわかれば、私たちの生命の由来の秘密がわかるかもねぇ。少なくと
も、そのことが大和望一郎(やまとぼういちろう)とやらの言っている姉妹関係を指しているんだろうしさ」
「たぶん、その秘密を握っているんだろうけれど、本人は自覚していない時を過ごしているんだけどね……」
阿久はちらりと、自分の体にもたれて眠り込んでいるけいなの顔を見た。
けいなは穏やかな寝息(ねいき)を立てていた。こうして見ると、なんてことはない女の子にしか見えないが、
は彼女が起こしたと思われる奇跡を何度も目にしている。一時期はけいなにはこだわっていたし、賢人(けんと)も、もしか
したらけいなを狙ってくるようなことがあるのかもしれない。
「賢人はゼロを目指して欲しいわけだよね？　消え去ってしまうのでなく」
阿久は言った。
「そりゃあ、そうでないと、我々神様が存在しなくなるからねぇ。いや、君は消え去りたいのかもしれない
けどさ」
彼は悲しそうに言って笑った。

「消し去りたいな。もちろん」

阿見沢は言った。

と、それまで何か言いたげにしていた絢子(じゅんこ)が、意を決したように口を開いた。

「どうして、そこまでするんだ？」

「え？」

阿見沢は戸惑って聞き返す。

「だから、どうして君がそんなことをするんだ？ まだわからない。いや、むしろ君という

がわからなくなる」

絢子の声には切実なものがあった。

阿見沢は複雑な表情になる。

「僕だって、僕のことはわからないさ。でも、僕が見たいのはまさにそのことなんだ。僕は有害の

か。僕は誰かに作られ、役割を与えられたものだ。そう決定されてる。そいつを終わらせないと、僕は僕な

らない」

その答えは阿見沢にとっては真摯(しんし)なものだったが、絢子はもどかしげに身じろぎした。

「そういうことじゃない。私が言いたいのは……」

が、そこで絢子の言葉は途切れた。言葉を探そうとしているが、その先が言い出せずにいる。

すると、その先を続けたのはけなだった。

「あーちゃんは、あたしたちのことも考えるべきだよ」
いつ起きたのか、けーなは阿兄にもたれたまま、阿兄の顔を見上げていた。
「みんなのことを？」
阿兄が問い返すと、けーなはうなずく。
「そうだよ。納ちゃんは、あーちゃんのことが好きだから言ってくれてるんだよ」
納は顔を赤くして、否定するように首を振る。
「なっ……馬鹿……何……」
が、阿兄は表情を変えずに頷く。
「そりゃあ、僕のことは好きだ。だから……」
「そうじゃないってば。あたしたちは、あーちゃんのことを、農家がお米を大切にするみたいに大
してるの！」
けーなは力を込めていった。
「なんだよ、そのたとえ……」
「え？ これ以上分かりやすいたとえはないよ！ 農家の人はお米を大切に育ててるんだよ。最後は、お米を
れたり、食べられたりしちゃうからって、お米のことを怠けようとしたり、途中で投げだした
やったりはしないの！ だから、もしお米がしゃべれたとしたら、聞きたいのは収穫
のときの話じゃなくて、そのとき、そのときに、いかに農家の人のことが好きかって話だと思うよ」

けなは言いたいことを好き勝手にまくしたてた。
そして、主張したことで満足したのか、ぽかんとしている阿比川を構わず、また丸まって寝(ね)てしまう。
「なぁ、何て言っていたんだ……」
顔を赤くしながらも、うまくごまかせたと思っているのか、絢音は笑みを浮かべつつ阿比川に言う。
一の刀阿比川は、少し真面目な顔になった後、絢音に言った。
「僕が犠牲(きせい)になってでも、一の刀家の皆の幸福を考えるというのは、やっぱり間違っているんだろうか？」
そう言われた絢音は、意表を突かれて困惑はしたものの、自分の意見を飲み込むと、即座(そくざ)にうなずいた。
「ああ、もちろんだ。もちろんだとも。そりゃあ、考えてもみろ。君だって、誰にひどい目にあって欲しくないから、いろいろとやっているんだ。私たちだってそれは同じだ。君にとって、家族がひどい目にあうのがつらいように、私たちにとっては、君が……」
の……その……家族が、ひどい目にあうのがつらいように、私たちにとっては、君が……」
そこまで言って、絢音は「忘れてくれ」とでも言いたげに、首を振った。
が、阿比川は納得したのか、絢音をまっすぐに見据(みす)えた。
「僕を助けてくれる人がいることも忘れないようにするよ。たとえ、僕が最後は死んでしまうだけの運命として作られたんだとしても、最後の瞬間までは、君たちになんとか応えていきたいと思うよ」
「ちょ……、馬鹿、何を、そんな真顔で……」
絢音は照(て)れ隠しの笑みを浮かべる。
それでも阿比川は真顔で言った。

「でも。大丈夫。明後日(あさって)にはすべて終わらせるさ。すべてうまく行くさ」

「ああ……」

絢は、和兄の言葉を聞いて息をのむ。

そして、ゆっくりと和兄の手に向かって、その手を伸ばした。

「そうだねぇ。終わらせたいねぇ」

いつのまにか和兄の後ろに立っていた淑恵が、絢と和兄の頭のてっぺんに背後から抱きしめた。

「ひゃ！」

「っと……」

絢と和兄は声をあげる。

「ご両人、良い雰囲気のところ悪いけど、私も交ぜてもらえないと拗(す)ねちゃうよ」

冗談(じょうだん)めかした声を淑恵は出した。そして、絢の頬に自分の頬をこすりつけ、和兄の耳をつまんで引っ張る。

「終わったら、この朴念仁(ぼくねんじん)の取り合いしようね。それとも、三人で一緒にやっちゃう？」

「ばっ、馬鹿……何を……」

絢は耳まで真っ赤になるが、淑恵はそれを無視して、意地悪な声で和兄に聞いた。

「ねぇ、ゼロを封印するのでなく、倒すって。本当にやるの？　今となっては、和兄の相棒も必要になると思うよ」

問われた和兄はうなずく。

「ああ。言いたいことはわかるよ」

阿丸は柚恵と互いの言いたいことを理解し合ったようだった。
「それでもやる？　今の話を聞いた後でも。その決心が揺らぐんじゃない？」
問い掛けられると、阿丸は少し逡巡した。
「そうだね、やっぱり迷うだろうな。僕の考えも、少しずつ変わりつつあるよ」
すると柚恵はうなずいて、にっこりとした。
「じゃ、私もなんとか君を助けられるように頑張っちゃおうかな」
「おい……。二人で何を話し合ってる？」
絢が疑問の声をあげた。
と、また柚恵はいたずらっぽい声に戻った。
「ふふふ。阿丸君と私は、何も言わずとも割とわかりあっちゃうところがあるのだよ。嫉妬したかね？」
「こ、こら。何を言ってる……」
またも絢は顔を赤くし、手をばたつかせた。
「あはは。冗談よ。でも、阿丸君と気が合っちゃう私だからこそ、君のことも好きだからね」
柚恵はいきなり絢を押し倒した。
「ひゃ！　やめろ！」
「いや～、不二子君も違った感触で、これはこれで趣深いなぁ」
絢の身体を柚恵はまさぐりはじめた。

「こ、ここら……どこを触（さわ）って……」
「どこって？　口に出して言った方がいい？　[illegible]聞てるけど」
「うわ！　[illegible]、やめろ、言わなくていい……！」
「じゃあ、私に言う？」
「やめろ！」
すると、[illegible]顔をそらして言った。
「終わったら言っておくれよ」
「[illegible]！　やめさせろ！」
[illegible]わめいた。

○

その日の朝、やってきた。
[illegible]月の[illegible]に向かうと決めた朝である。
「危なくなったら逃げてくれよ」
[illegible]そう言（い）い含めていた。
[illegible]というのは、[illegible]に乗り込んだ、[illegible]けなけいすにである。[illegible]ハンドルは[illegible]握っていた。

「そうするつもりだけど、みんな自分が役に立つ場面があるんじゃないかと信じているからねぇ。とは

いえ、これを見たら、逃げたくなるかな」

彼女は悪意と殺気が襲ってきたように感じられていた。

生徒会が向かう先には『コンスタン魔術学院』があり、その周辺には生徒たちが陣を敷いて待ち構えている。正面

と向かい合う気配というのは、零下の気温の空中で裸で放り出されたような感覚に等しい。

「対魔術師用の障壁の組み方だよ。相手の魔術を遮るマナの膜を薄くして、外側からマナで強化した弾丸を撃ち込む構えだね。普通の魔術師なら

しても、塹壕を作って待っている部隊のところに、戦車で乗り込んだりはしないよねぇ」

彼女はゴーグルで状況を分析しつつ言った。

『コンスタン魔術学院』の周囲は小高い丘のある広い平地である。地形はうってつけだと言っていい。

「障壁の展開はフィールドもある。予想できてたけど、ブレイブの動きが完全に封じられてるね。確かに彼女は手強いけど、こ

なくて良かったってところかな」

「でも、生徒会の戦い方に合わせた布陣だ。突破するのではなく、僕たちを囲い込んで消耗させようとする」

彼女はこともなげに言った。

「わお、頼もしいお言葉」

彼女は恐怖心を隠すように軽口を叩いた。生徒会の力を信じている生徒たちは、好奇心から危険な場所に来てもなんとかなると考えてしまうよう

な状況だが、内心の恐怖ばかりは勝手が違っている。生徒たちの戦闘経験は少なくないのだ。

と、その不安を彼女が感じとったらしい。生徒会長は肩に手を置いて、優しくうなずいてみせる。

「綺月に任せるよ」

正面に向かって名前を呼ばれることに慣れていない綺月は、その呼びかけに「ひゃ」と短い声をあげたが、すぐに

き締めてうなずく。

「問題ない。こういう戦いなら、車を守ることくらいできる」

純夏も微笑んでうなずいた。

「ああ、信じているよ。道路の途中のマーナ達は、僕達が調査する。みんなは道路は安全になってから移動してもらう。それでも、ゼロはけいすを狙ってくるだろう。車は純夏におとりとして動いてもらう」

「了解(りょうかい)」

不安が消えたのか、純夏は笑みを浮かべた。

「じゃあ、行ってくる」

純夏に手を振ると、綺月が向かうとは思えない素早さで、前方へと飛んで行った。

それでも、前方に向かったのと同時、前方の道路が一瞬にして修羅場(しゅらば)と変わった。綺月たちの車の遥(はる)か前方、爆音(ばくおん)が響き、閃光(せんこう)が煌めき、炎(ほのお)があがりはじめる。もちろん、そのすべてが純夏に向けられた攻撃。

「あの程度は大丈夫だろうが……。それでも、心配になるな」

それを見て綺月がつぶやいた。

「大変ねぇ。まぁ、向こうの心配より、こっちの心配しましょうね……っと！」

純夏は、ぎゅんと車を急加速させた。

確かに、円形の刃は触れた物の全てを無に帰すようだ。攻撃のすべてが円形の刃へと集束しているにもかかわらず、そのすべてを軽々と円形の刃が防で

いる。さらには、地上のターゲットに変更した重戦車たちから、円形の刃が攻撃で撃退している。

それでも、撃ち漏らしはある。円形の刃と戦っている地点から離れた場所にいた一団が、こちらの方向に向かってくるのが見えた。は

いすの存在がゼロにはできないはずだが、周囲の人たちに詠唱による魔術を発動させているのだろう。そうでなく

とも、近寄ってくる地上の狙撃手の数は当然の話。

飛ぶように近づいてくる重装兵の周囲の人たちは不確定。一組、その後方から、ようやく機銃に気づいた円形の刃が放ったマナ球が襲いかか

り、二組は一瞬で吹き飛ばしたが、残りの三体の地上の狙撃手が進路をふさぐようにフォーメーションを組むと、無数の銃弾も無駄ではない

で撃ち出す小銃を構えた。

「っと……」

教授がハンドルを切りかかるが、綺羅がそれを制した。

「正面にさらした方が危険だ。進んでくれ。マナ技師が、私も防げる！」

綺羅は助手席のシートから跳び上がった。そして、走り続ける車の上に降り立つと、車よりも速く疾走し、腰を低くした姿勢のまま

を抜くと、二十体の分身を作り上げた。

その二十体は、それぞれが狙撃手たちに向かっていく。

周囲の人たちは、綺羅の動きを察するや、一斉に発砲する。

「[illegible]ら……！」

綱吉の分身すべてにマナの障壁を展開する。弾丸の散発はマナの濃度ばらつきのせいで障壁を抜けてき

が、綱吉の分身が素早く刀を回転させると、弾丸は断ち切られて地面に落ちた。分身にて、その動きは同様。分身のマナでできた刀から同

ように発射と断ち切っていた。

「ふっ！」

そして、綱吉の周囲の遮蔽の銃と一刀のもとに斬り倒した。

分身もまったく同時に斬撃を放っていた。分身の周囲の遮蔽も同時に倒れる。

綱吉が敵を斬り倒した後に、追いついてきた兵士がその脇に止まった。

「やるねぇ」

思わず感嘆の声をあげたが、綱吉は照れもせず、短く声をあげた。

「次が来るぞ」

その言葉通り、弾幕の攻撃を漏らした周囲の兵士たちが地上に向かってきているのだった。弾幕の攻撃を抜けていたわけではない。

たち、すなわちゼロがターゲットをけいすに絞ったというだけのことだ。押し寄せてくる数

なのである。

「適当に逃げ回っていてくれ。行くぞ」

綱吉はそう言って、体をひねりもさらに多くの分身を作り出した。それらが地上をぐるりと取り巻き、猫の子一匹通さぬ構

で、押し寄せてくる兵士に備えた。

周囲の兵士たちの攻撃は、綱吉の分身と障壁にぶつかり、激しいマナの光をほとばしらせた。

「ひ！」
思わず悲鳴を上げ身をすくめるが、襲撃者の銃弾の一発として地上には抜けてこなかった。
絢子が鬼神のごとき刀捌きを発揮し、あらゆる銃弾と手、襲いかかってくる魔導師たちを、斬りつぶし、はじき
ばしていた。
「おおおぉ　おおお！」
絢子が吼える。
マナが枯渇する日本列島において魔力によって戦況が一変することは一般に知られている。魔導師の勝算はゼロの状態そうであったよ
うに、魔導師の魔術戦闘は内的な精神が鍵を握っている。その一点で、今の絢子の研ぎ澄まされた精神は圧倒的と言えた。
「行くぞぉ　お！」
そして、魔導師たちの波状攻撃を受け止めた絢子の身体が、一度だけ逆に突進を開始した。
絢子その身体、誰が本体かもわからぬほどに渾然とし、群れとなった猛牛のようだった。その体
で勝負の魔導師の軍勢を、総崩れにした。
さらには後退し始めた魔導師たちに、絢子が追撃を開始する。
後退した魔導師たちの中には、うまく体勢を立て直した者もいたが、それを待ち受けていたのは、さらに凶悪な
壊力を備えた絢子の攻撃だった。
絢子の見切りに入った魔導師たちは、一体一体と丹念に潰されていった。近くにいた者も一にらみで体の部から悶絶して遠ざかる者は
きだけで発動したマナ球より腹の風穴を開けさせた。

周辺たちはゼロのコントロール下にあるが故に、全体としては一個の生物のように振る舞うことができるが、そ
の細胞ひとつひとつを同時に思考で潰しているのである。そうなっては、彼とて自我意識を維持しきな
い。もし、彼が自我を持っていたなら、恐怖より魂が抜けたように立ち尽くしていたはずであっ
た。

「敵なくて良かったなぁ」

小林は、ショーの観客のように、紗和の死闘を眺めていた。

「……だけど、美しいと感じてもしまうねぇ」

そうつぶやく。

白虎の一点の動きのまま、近づく者、遠ざかる者を圧していく千雨の絢爛な戦いぶりを見る紗和は、まさに魔人としか言いようのな
い荘厳さを備えていた。

白刃を蝶が舞うようにひらめかせ、同じ姿が分身のように、ちと兵の怒濤のように道を切り開いていく紗和。魔人の付き従うかのように
さわしい、美しき剣鬼と見えた。

「これじゃあ、すぐに終わっちゃうんじゃない？」

千雨が話しかけ、いすを守るように座っていたけど、立ちながら声をあげた。

「だろうね」

小林はうなずく。

すでに、周辺で動いている者はほとんどいなくなっている。『コンスタンツの魔法陣』の敷地は死屍累々だ。

「でも、かわいそう」
けなはつぶやく。
と、それを聞きつけた淑子が言う。
「うん。人間達がかわいそうなのは確かだよ。でも、ここまでは彼らも慣れているけれど……怖（こわ）い
のはここからなんだよ」
「ここから？」
けなは疑問の声をあげた。
「そうだよ。さて、外に付いたね。これからは」校内
決意も新たに前方を指さした。
破壊された人間達の山の上に、阿比留が並んで立っていた。それは、実感した。しかし、奇妙な強さを感じさせる光景だっ
た。

○

阿比留たちは慎重（しんちょう）に校内へと足を踏み入（い）れた。
しかし、外からのぞき込んだ廊下（ろうか）に人間達が待ち受けていることもなく、阿比留が先頭に立って入っても、何も起らなか
った。罠（わな）の類（たぐい）も待ち受けていなかった。

「どういうことなんだ？」
しんがりをつとめる綿貫が、周囲に目を配りながら、地上へと向かう階段を降りる途中で疑問を口にする。
「戦集本体が壊し、もしかしたら表の事情も把握していなかったのかもしれないね」
綿貫が前へ進んでいく鬼慈にそう答えた。そして、ゴグルに、けいすから教えられた道具の表を、現状と照らし合わせる。
「……っと、こっち、この壁ね」
鬼慈は通路――阿見にはおなじみの場所――にある石の壁を指差した。
「僕もこの通路を使っているけど、そこには何も……」
阿見が言いかけるが、鬼慈はゴグルで確認しつつ、壁の一部に手を押し当てると、そこが低い音を立ててスライドし、さらに[illegible]が現れた。
「……初めて知ったよ」
阿見は驚きつつも、その通路の先に目を凝らす。そこにも誰もいないが、積もった埃が踏み荒らされているところからすると、すぐ最近何者かが通ったということはわかった。
さらにその通路を、けいすを守りながら進む。先は階段であり、地下層をさらに降りることになった。
と、数十メートルとも思われるところまで来ると、その通路の先に明かりが見えてきた。
前を見て歩いていた阿見が足を止めた。
「あれは……」

加寿子はその先を見て、そして、うめくような声をあげる。
「やっぱり……。当たって欲しくない予想が当たったけど……これが切り札ってわけだね」
「ど、どういうことなんだ？　神崎ら、そんなことを言っていたが……」
綺羅が戸惑いの声をあげ、けいなとけいすの後から向こうをのぞき込んだ。
そして、息をのむ。
巨大な円の線の先は、華奢な少女のシルエットが浮かび上がっていた。
通路の先に進むと、フットボール場ほどの広さの空間が開いており、その中央には数十メートルほどの巨大な球体が光っている。そ
れがこの唯一の光源だった。その円の前に、彼女は立っていた。
「ここから先は行かせません。全員殺します」
冷たい声が聞こえてきた。
それは、綺羅は聞き慣れた声だった。
「ころね……」
前に出ると、ころねの姿が目に入った。
それが、加寿子の言っていたことか、と綺羅は悟った。確かに、彼女は加寿子の何者でもないだろう。
いつもの制服のころねである。その目に無機質な色をたたえた表情は見慣れたものだが、違っていたのは、その動
だった。すっ、と手をあげたころねの、その動作は、加寿子の魔術と、ゼロが同調していたときの動
を想起したそれに近かったからである。

「操れている……」
純がつぶやく。
「おそらく。ただし、直接操作しているのかどうか……」
杜恵が探るように言った。
「ころね！」
阿形が呼びかける。
と、ころねはそれに答えて言った。
「体調は悪そうです。しかし、今は……」
すると、ころねが手を上げた。
それに呼応して、周囲のマナの流れが乱れた。
大気を裂くような音を発して、ころねの頭上に黒い空間が出現する。
「……異空間……か」
阿形がつぶやく。
その中から、ぬぅ、と姿を現したのは、巨大な機体だった。それは、まるで超大型の飛行機の胴体といったかのような形をしていた。垂直離着陸が可能な飛行機のようだった。
それは、完全に姿を現し終えて、ゆっくりところねの頭上に降りてくると、驚いたことにいきなり変形をはじめた。飛行機と見えたものが、中央から裂けるように広がったかと思うと、いくつかに分割されたパーツがころね

の身体の部品へと装着されていく。

やがて、その変形と合体が終えた後、それの姿は、まるでころねを包む鎧だった。あるいは人間の二倍の大きさ

の巨人。その腹の中に着用者を抱いたかのような姿。

ころねは、動きを確かめるように左手を振る。人間の数倍のサイズになった左手は、うなりをあげて強く動いた。そ

の手で、下の聖騎士を指す。

「……今は、マークトの神のアーティファクト『魔王』の鉄槌を装備したアーマードころね、とでも呼んでいただきましょう」

ころねは言った。

「その妙なセンスの感じ、ころねのようだが……」

「やはり、意思はゼロの状態である。彼女を制御しているのは当然ながらころねではないということだ。ある

ざり合っているというべきか」

剣の聖騎士は、そう言葉をかわした。

「……あれは『魔王』の『鉄槌』。マークトの神、神殿に伝わる最強の鎧よ」

苦渋の声をあげた。

「私の『ソハヤノツルギ』と同じようなものか」

剣の聖騎士が問う。

それぞれの同級生は、自分たちが理解る――自分だけの武器を存在する。より神のリンクが強化されたそれは、[illegible]武器としては最弱のものばかりだ。和平の世では、象徴的なものとしてしか使用されていなかったが……。

「鍛鉄の名は遍、纏った者に鋼鉄のごとき硬さを与え、法を犯した者に強大な鉄槌を食わせる。正義に使われた武器ですよ」

浅沢が解説し、ころねの右腕を指した。

ころねの右腕に輝く腕輪にあたる位置には、杭状の巨大な鉄槌が装着されていた。それが折れ曲がり、手首から前へ突き出ると、全体がバランスが崩れるほど巨大なハンマーとなった。それは、ただそこに存在するだけで、周囲を圧するような空気を放っていた。

「後方ブースターのついた巨大ハンマー。単純と言えばあまりに単純。しかし、それだけに破壊力は抜群ときている」

その単純な構造の前には、トリックだけとは言えなかった。

「さぁ、行きますよ」

と宣言するや、いきなり突進してきたころねが、阿瀬川に向かって横からハンマーを薙いだのである。

「っと……！」

阿瀬川は後方へ跳んでかわしたが、先ほどまで阿瀬川がいた空間を圧縮した空気を炸裂させつつ通過したハンマーには、凄まじい重量感があった。

ごっ、と空気そのものが爆発したような衝撃が周囲に拡がる。

「それだけではないですよ……」


TYPE-00 AMD
WARNING
006

ころねは、空振りした体勢のまま横に身体を回転させると、やや角度を変えて、斜め上からハンマーを再び振り下ろす。

「ファイヤー」

つぶやくと、ハンマーの後部がブースターに。火を噴き、ハンマーは轟音とともに阿久児に襲いかかった。

「っ！」

阿久児はこれも跳んでかわす。

地鳴りのような音がした。ハンマーは石畳を打ち砕いて破片を周囲に激しく飛ばし、むき出しになった地面を大きくえぐり取って、ようやくその勢いを止めた。

その破壊の嵐のような威力を目にした瀬戸が、ゴーグルをのぞき込んで驚きの声をあげた。

「純粋なマナを集束させたマナの圧縮。壁も耐えられない威力がある……！」

その言葉を聞いて阿久児が息をのむ。

「マナでの防御も不可能ということか……」

だが、ハンマーのモーションは大きい。重量級コマのように身体ごと回転する形で放たれている。

「それでも、かわすのは難しいことじゃない」

阿久児がつぶやく。

「かわすのが難しくないということは、ハンマーをかわして、それに触ることも容易いということになる……」

沖波が解説した。

その直後、阿比は次の一撃を放ったころねのハンマーを軽く避けて、懐に飛び込むと、ころねの鎧の腕部分に直接触れてい

た。そして、マナを集中しての破壊を試みる。

「はっ！」

確かにマナを制御したはずだった。

しかし、阿比は驚きを顔に浮かべて、跳び退った。

「硬くて破壊できない……！」

それを見ていた沖波が、驚きの声をあげる。

「鎧がマナで強化されて、硬度を超えている……！」

「その通り。つまり、こちらがハンマーを振り続ける限り、あなたはそれを止めることができない」

ころねはそう言った。いや、周囲の人達のところからすると、言葉を発したのは事前ということになるか。

「いや、弱点はある……だけど……」

沖波はそう言った。

それは阿比も理解していた。鎧はころねの全身を覆っているわけではない。もちろん、弱点をさらしている

ようなことはないが、それでも阿比の魔力ならば、ころねに触れさえすれば、彼女の鎧を破壊することも

だろう。

ころねもそれを承知しているのか、にやりとした。普段ころねが見せぬ表情だった。まさに

が見せていた余裕の笑みだ。

「魔王様は、それができませんよね」

ころねは無言で押し黙った。

「くっ……！」

何度も重ねてきた攻撃をかわす。

「だからこそ、最後の切り札としてころねを持ってきたのです。あなたはこれを破壊できない……。だ

っての恨み、はらさせていただきますよ。直接ではありませんが」

ころねは不敵にあざ笑った。

「これが危惧していたことだよ。今の私には、手出しできない」

悔しそうに言った。

果たしてその通りだった。今回はころねの攻撃をかわし続ける。この程度の攻撃は問題ないが、体力を摩耗することもな

く、ころねも自身のエネルギー切れを起こしてしまうような戦い方をしているわけでもない。おそら

く決着はつかないだろう。

「ねえ、それなら、これはずっと続くの？」

けながふと、そう口にした。

するとそれを聞いていたかのように、ころね＝[illegible]にやりとする。そして、[illegible]形[illegible]けなに
えた。
「もちろん、魔[illegible]けを狙うなら、そうです。しかし、魔[illegible]防[illegible]ぬハンマーの一撃の先、の別[illegible]いたのな
ら……！」
ころね＝[illegible]ハンマーの[illegible]変[illegible]せた。同時[illegible]変[illegible]る。動[illegible]ず、[illegible]変[illegible]る。その先は、けな
、子そして彼女に、守られるようにしてけいすが立っていた。
「こっちが[illegible]！」
[illegible]の[illegible]をあげた。
もちろん、[illegible]ら見ころねの[illegible]がらあきである。ころねへの攻撃[illegible]ら、それを阻止することと
ができる。だが……。
「どうする？　ころねを倒さねば、けいすが、それを守るならば、[illegible]な服[illegible]死にますよ」
ころね＝[illegible]言った。
そして、[illegible]のままハンマーを振[illegible]、勝[illegible]誇るかのように[illegible]迫った。
「さぁ！」
ころね＝[illegible]ハンマーの[illegible]撃[illegible]な、[illegible]けいすを襲[illegible]
[illegible]ゆがむ
そして、小さく[illegible]漏らした。

「卑怯な……」

「ほほほほ！　それに何か問題ありますか？」

ころねは勝ち誇って笑う。

轟音を立てたハンマーが、天井の高い場所から叩きつけられた。

ゴと爆発のような轟音が響き、衝撃が波のように石の床に広がっていく。

ハンマーはモーションが大きい。[illegible]なくとも、かわすことは難しくはない。現実にけいすはそれをかわし

ていた。[illegible]けなを抱きかかえて跳んでいたのである。

しかし、けいすは……。

「勝った……！　これで、終わり……！」

ころねは勝利を宣言する。

けいすは振り下ろされたハンマーの下にいた。避けられなかった。ひしゃげていることも確認でき

かった。ただパーツがハンマーの衝撃によって飛び散っていた。それらは乾いた音を立てて、床に転がっ

た。

「これでゼロの戦闘能力もはやすべての[illegible]なくなりました。どうあっても、ゼロは消せない

ころねは勝ち誇ってゆっくりとハンマーを持ち上げた。その下にあるけいすの残骸を見て、満足げにうなず

く。

「ゼロが消えないということは、私が倒れれば、ゼロの独占になるのみ。すなわち、結局あなたに私は勝て

ません」

完全な論理であった。

確かに彼女の言うとおりだった。ゼロの存続するあの世界が継続ならば、それよりは未来がゼロを制御する方がま

しだと言えた。人間たちのこれまでの努力は無駄だったことになる。

しかし人間たちの自分から、光を消していなかった。

その結果、ころねは未来に気づく。

「なぜ、絶望しませんか？　まさか……」

ころねは未来から一人、何を思ったか、虚空（こくう）と会話をはじめる。ゼロと接続しているということなのだろう。

ころねの目はひとつだ。だが、世界は人のものだった。

「何か変化がありましたか？」

「これは……どういうことだ？　私に近づくものがある」

「私に近づく？　あなたの体内に月があるのではないの？」

「その月だ。月が近づくものがある」

そのゼロの世界は未来にとって衝撃的（しょうげきてき）なものだった。

「無意識……」

ころねは未来の意思

「月へ行けるロケットは、もう存在していないはずです」

「しかし、シャトルが確かに月へ来ている」

ゼロの疑問を言ってから、ころねは、無表情に振り返る。

「何をしたのです?」

「破壊したのは、突貫（とうかん）で作った外装。駆動だけで中身は空っぽ」

阿見丸はにやりとした。

派手な爆発を見せかけていますの、見せかけただけの外装を破壊したのだ。乗り込んでいなくとも、ゼロに気づかれる心配もなかった。けいすの能力を、ゼロは予測できないのだから。

「では、本物は……?」

ころねは、無表情のまま声を震わせる。

「本物は格納庫に格納されていたシャトルに乗っている。まだ動くらしい」

阿見丸は答えた。

赤坂はその性格を知っていたらしく、狼狽（ろうばい）した声で反駁（はんばく）する。

「しかし、月面基地で打ち上げるロケットが存在しないはず……!」

「頑張ってくれた方がいるってこと」

阿見丸はにやりとした。

「そうか……ブレイブ……!」

ころね＝男吉が衝撃を受けた表情でつぶやいた。

「重力圏（じゅうりょくけん）ぎりぎりまでは補助で頑張るんだそうだよ。そして、彼けいすもゼロの大気から逃げられる。そう――一昨日（おととい）の夜は脱出してもらっていた。四日もあれば到達（とうたつ）できる程度の速度を出せるそうだ」

別の奴が言った。

……「貴様！　魔王、この卑怯者（ひきょうもの）が！」

男吉が叫んだ。

。

――軌道上では、大昔かつては月の軌道ステーションを往復していたシャトルらしいね。大気圏突入（たいきけんとつにゅう）機能もた

る。平和な時代は軌道上で生産する機能はないけれど。

質問された木崎ヒロシは思い出していた。

話は昨夜にさかのぼる。

屋上の格納庫から飛び出したヒロシは、けいすを抱え、マナキャンセラーを起動させつつ、格納庫へ飛んだのである。整

ていた日の前日に、誤魔化（ごまか）して、格納庫から入ると、すでに骨董（こっとう）と化したシャトルを見つける。

「これを軌道上で運用のですか」

けいすも感じたような声をあげた。

照明の消えた円筒形の格納庫は広大なホール。直径数百メートルの同じ構造のそこの中央に、旅客機のようなサイズのシャトルがうっすらと埃をかぶっていた。マナによる飛行が一般化(いっぱんか)してからは、宇宙船はあまり見られなくなった、滑空(かっくう)のための翼が付いているデザインだ。

「で、軌道エレベーターの所定の位置まで持って行けば、ＣＩＭＯ８(サイモエイト)の息がかかった分、燃料の充填(じゅうてん)は手伝ってくれる。と、星間航行用ロケット用としての燃料はまだ保管されているらしいからね」

「シャトルの性能自身での往復可能とか。さて、それでは行きましょうか」

けいすは言った。

この時、もちろん興味深い要素はある。彼の真意も気になるが、確かにもうこれしか考えられないという手段はあった。

「それにしても、賢人というのは何を考えているんだろう？」

「今は気にしないことにしましょう。さて、よろしくお願いします」

けいすはそう言ってシャトルの側面に回り込んだ。

ヒロシはけいすを持ち上げて数メートル浮上(ふじょう)すると、シャトルの脇のハッチに連れて行き、手動でこれを開けた。中の二重エアロックも手動で、電源系はまるで動いていなくとも問題なかった。シャトル内部は真っ暗だが、けいすは気にせず奥へ進む。

「チェックと機体の操作は自動で、エレベーターの最上部ドックで行けるらしいから、何にも触らないほうがいいよ」

ヒロシはけいすがその様子にうなずいたのを見てから、ハッチを閉め、格納庫の扉(とびら)を開くスイッチのある壁へと向かった。シャトルを搬入(はんにゅう)したこともあるのだから、以前の格納時それのように一瞬ですべて開く。だが、これはマナ駆動であり、動かせば、管制室の誰かが気付くだろう。開いてからの行動も素早くなくてはならない。

スイッチを押してから、素早く飛んで戻って、シャトルのタイヤの下に潜(もぐ)り込む。

「よっ、と……」

スーツの補助動力を使ってシャトルそのものを担(かつ)ぐように持ち上げた。

重さは感じないが、シャトルが壁にぶつからぬように注意しなければならない。

ヒロシはシャトルを背負って飛ぶと、格納庫の扉から慎重にシャトルを滑り出させた。

徐々に速度と勢いを増して、上空に舞い上がる。

夜空を飛んでいくシャトルを見た者は多かったが、その正体に疑問を持った者はわずかだった。飛行スーツと気付いた者がつか

なかったからである。気付いたものも、どうして四角いシャトルが舞い上がったのかという

を空中で持ち続けることはできなかった。

もっとも管制室ではすぐに気付くだろうし、被害(ひがい)届(とどけ)も出されるだろう。実際、どうやら警備隊には上手く行かないよう

に手を回してくれているらしいが、もちろん、すぐにでも補給と修理を行わなければならない。たと

え月の施設へ向かっていることが管制に感づかれたとしても、飛び立ってしまえば止めることができるは

もいなくなる。

やがてヒロシは軌道上に到達し、宇宙用メンテナンスドックにシャトルを搬入した。

細い棒のような軌道エレベーターが、地球に向かって延びている。その端に円筒（つつ）のような施設（しせつ）が貼（は）りついている。それが今ではステーションと呼ばれている。軌道上発電と宇宙船の管理運行を行う役割が与えられている。

その端にえぐられた穴のようなドックにシャトルが入るやいなや、保安員の職員たちが幾人（いくにん）も出てきて、シャトルに群がるようにとりつくや、何も言わずに燃料補給と動力のチェックを行いはじめた。

ヒロシは彼と会話しようとしたが、何の連絡（れんらく）手段も持っていないことに気づいてやめた。何より、彼らの方から話しかけてくることもなかった。

退屈（たいくつ）な時間が過ぎる。ぼんやりしていたヒロシの背筋を再び伸ばしたのは、けいすの音声だった。

「整備チェック終わりました。すべて完了しています。燃料補給も終了（しゅうりょう）。それでは、軌道上で送り出してください」

シャトルのパイロットシートに座ったけいすが、無線で連絡をしてきた。今はシャトル内の明かりがともっており、窓からけいすの姿が見える。

「人間による宇宙旅行の管理運営は完全自動化されていますので、内部は快適な環境（かんきょう）を保つように設定しました」

けいすが続けた。

ヒロシが保安員の職員たちを振り返ると、彼らはシャトルから離れていくところだった。それを見送ったが、彼らからは挨拶も何もなかった。

――自分だけで動いていた時は、誰かが手を振ってくれたものだけれど。

やや寂（さび）しさを覚えたヒロシは、そう考えて、はっとした。

――いつの間にか、疑問を持てるようになっていたなんてね。アニキはいつもこんな反応しか受けていないのだろうな。

世界の趨勢に興味があるのは一部の若者だけだ。そして、それ以外の者たちは命じられた職務をこなすだけなのだ。このシャトルが飛び立つことが正しいのか、間違っているのか、どの陣営に利することになるのか、そんなことを考えないようにしているのだ。自分たちもそういう立場に立ったなら……だろうが、その命じられた職務をこなすという行為そのものこそ、現状を嫌っていた結論なのだろう。彼らは、庶民であり、力の無いものであるというストーリーを守りたいのだ。そして、それこそが……にし、無関心に傍観している。

――でも、皆がひとつの大きなストーリーを信じていないと、それはそれで世の中は回らないし、シャトルも飛ばない……か。

自分たちの物語を守るために、働かなくてはならないのだろうか、と思うとヒロシは憂鬱になった。借り物の……で、大きな何かを背負わされてしまっている自分の状況を考えてしまう。

――自分の人生の行方……。できることは何なんだろうな……。

ヒロシはぼんやりとそんなことを考えるが、今は作業に集中しなくては、と首を振る。

そして、ヒロシはシャトルを自動操縦とメンテナンスドックから、漆黒の宇宙へ飛び出した。

窓からは地球の大気の青い光、そして、遠くに月の青白い光。

シャトルの先端を月の方角に向けた。

そして前方に回り込むと、自由落下中のけいすに向かって左手を振って合図を送った。

「頼んだ」

「任せてください」

けいすはそう答えた。エンジンに火が入ったシャトルは地球の大気圏に突入し、ヒロシの視界の中でどんどん小さくなっていった。宇宙は遠くまでも見渡せるが、それでもシャトルは数秒で光の点となってその姿を消した。

○

「本命はそちらのことだろう。だが、我々の勝利も時間の問題だ。後はけいすがゼロを射出するのを待っていればいいだけさ」

阿武隈がそう言った。

「くっ……こざかしい真似を……！」

ころねの武器を借りた無数の分身が、何か言いたげな表情でそれに答えると、きびすを返して転送装置に向かおうとした。彼女らが再度、阿武隈の方へ

れを阻止するように動

「転送装置から月へ向かうつもりだろうが、傷つけなくとも、押し返す程度はできる！」

そう言うと、阿武隈はころねの鎧の腕部に掌撃を与え、後方へと吹き飛ばした。ころねは数メートルも吹き飛ばされ、倒れずに踏みとどまったが、その表情は焦りの色を見せた。

幻惑空間に入ろうとする者を阻止する能力者の場所が完全に特定されていた。
「一方的に幻惑空間に入ろうとするのはわかるが……。なぜあそこまで焦っているんだ？」
それを見ていた綿貫が恵に問う。
恵はうなずいて言った。
「天才は、自分の能力のゼロは阻止できない」とけいすけは言っていたよ。そもそもけいすけは天才の能力用に作られて…
いるわけだし」
「いや、それが向こうにもわかっているだろうから、あらかじめ天才の能力を予想していてもおかしくない。それをこちらも予測していたから、幻惑空間も我々の時間に向かっているわけで……」
綿貫は続ける。
「そうだけど、マナのシステムを考えれば、あらかじめ天才は能力を予測できないんだよ。天才の能力を予測できる…
のは限定的な人間のみ。エネルギーを大幅（おおはば）に消費する能力を予測できないからね」
「すると、状況が変わった今ころねだけでなく、増援（ぞうえん）は接近しているわけだ……」
綿貫は入口を振り返る。果たしてその通り、増援が走ってくる足音が響いてきた。
「そちらは頼んだよ。けいすけが到着するまで防いでいれば、こちらの勝ちだからね」
恵はそう言った。
「任せろ。こちらは私が押し返す！」
綿貫は叫び、自分の分身を作り出した。

そして、紬恵と兵士達の間をとって走っていき、再び神のごとき攻撃をはじめた。銃撃の音が響きはじめ

がその男の通りに、援軍を阻止しはじめたことがわかる。

紬恵、その音を聞いてうなずいた。時間稼ぎという目的はほぼ達成されたも同然だった。だが、その表情は不安げだ。紬

ころねに向けられている。

「だが……そうなると、相手の考えることはひとつ、なんだよねぇ」

紬恵はつぶやいた。

「どういうこと？」

けながら聞く。

「なんとしてでも無理矢理奪おうとするってことだよ」

紬恵は悲しげにころねを指し示した。

それまで攻撃を奪おうと、攻撃を繰り返していたころねだが、その攻撃、ハンマーでの攻撃、何ひとつは通用しなかった

ため、まるで、すべてをあきらめたかのように立ち尽くしていた。

「あれを見ると、あきらめたんじゃないの……？　それとも、もうゼロが封じられて、もとの

ころねちゃんに戻りつつあるのかも……」

けながら言った。

しかし、紬恵はやっぱり、まずいかもしれない……」と自らのチェーンソーに火を入れた。

ころね＝阿修羅。そのハンマーを高く掲げた。これまで何度も行ってきた予備動作である。続いてハンマーの攻撃のスタ

に入った気配を感じ、大きく距離を取った。その強烈な一撃は、先ほどまで何度も放たれてきた。

しかし、今回のターゲットが違っていた。

「いけない！」

阿修羅が振りかぶると同時に走り出す。

ころねが振り下ろす『魔王の鎖鎌』を回避し、ころね自身が立った。ころねの両手持ちの装備と鎧をオープンにし、その顔面めがけ

てハンマーを撃ち込んでいく。

「阿修羅！」

悲痛に叫んだ。

その次の瞬間、鈍い打撃音が響いた。それまで何度も鳴らされた音とは違う、何かがひしゃげるような、凍らせる

ような音だった。

「ぐっ……！」

血を吐き出したのは阿修羅である。ころねに覆い被さるようにして、そのハンマーを受け止めていたい

や、受け止めていたというのは正確ではない。阿修羅の身体を何度も振るった阿修羅のハンマーの威力は衰えず、

る。受け止めたのではなく、ころねのかわりに一撃を食らったのだ。

「阿修羅」

悲鳴は背後から滑り込むようにして阿修羅の身体を突き飛ばし、もう一度阿修羅がけて振り下ろされたころねの一撃を外せる。

「だから、そういうことはやめろって言われただろうに……」
阿丸が地面に転がった地嶋が言った。
「つい、そうしてしまうんだよ……。だけど、犠牲の覚悟さ」
苦しげに阿丸が言った。
「そういうのは覚悟じゃないよ。それに犠牲というなら、申し訳ないが、彼女を犠牲にすべきだ」
地嶋が身体を起こし、チェーンソーを構えてころねの前に立った。だが、彼女はハンマーの攻撃をかわすことは不
も、阿丸のようにころねをはじき飛ばす攻撃は不可能だろう。
「うまくやってみせるさ。それに、僕の身体は不死身だ。死ぬことはない……」
阿丸が倒れていたのが、右手を突いて上体を起こし、うめくような声をあげる。
「私を信じてくれ！　君も次の攻撃を防げないぞ。いいか、何もするな！」
地嶋が阿丸に命令するかのような声をあげた。
ころねは、にやにやと笑いながら、再び自分の身体の倍はあるハンマーを撃ち込むべく、右手を高く掲げていた。次の攻撃
がかばうようなことがあったなら、仲間合いはしまい。
「やめろ！」
地嶋が叫ぶ。
阿丸、どこにそのような力が残っていたのか、誰よりも素早く動き、またもころねの前にその身体を投げ出していた。

「まぁ、愚かだこと……」

和美があざ笑う言葉が、ころねの口から、ころねの声で漏れた。

「笑うなら、笑えばいい」

純也はそう言った。

そして、ハンマーのブースターに力が入った。

その瞬間。

「中島、ころねちゃん！　目を覚まして！」

ブースターの音よりも激しく、絢の叫びによる警笛の音よりも大きく、周囲の音すべてをつんざいて響いたのはけなの声だった。

まるで、突然空気が凍り付いたかのように、その場の全員が動きを止めた。

そして、それは、ころねも例外ではなかった。

「あ……」

何が起こったのか理解できたのは、けなを除けば純也のみだった。純也は、目の前のころねの表情に、確かにかつてのころねの存在を見つけていた。同じような表情であるのに、それは確実にころねだった。

「長くは保ちません。私から離れてください。また十年後にお会いしましょう」

ころねはそう言った。

彼女らしい、妙な物言いだった。だが、その言葉の中に含まれた重みを純也は確かに感じ取っていた。

「ころね……！」
鬼丸は刀剣を使いますが、ころねは果素の鎧有手バーから、その左手を抜き取った。そして、鬼丸の身体を、どん、と突き飛ばす。
「ころね……！」
鬼丸は力なく後方へ飛ばされる。それを待ち受けていた淡紫が、受け止めて抱きかかえた。
「放してくれ……。ころねが正気に戻ったんだぞ！」
鬼丸はもがく。
しかし、淡紫は首を振った。
「鬼丸様。正気に戻ったのなら、なおさら……」
淡紫の言葉の意味はすぐにわかった。次の瞬間、ころねの人格は再び男のそれに取って代わると、再びゼロとの会話をはじめる。
「ゼロ。なぜ、この問題を予測できなかったのですか？」
「理由不明だからこそ、この問題の解決が最優先になり得る」
ゼロが、ころねの口で答えた。
「なるほど。ならば、破棄してしまいましょう」
再び男が言った。
「やめろ……！」

純一郎は声を張り上げる。

ころねは無理矢理にやりとした。やはり、今ので、ころねの意識は完全に別のものになってしまったらしい。嫌らしい笑みを浮かべながら、ころねは自分の身体を『魔人』の『触手』で切り離した。

やや高い位置から、ころねの身体が前向きに倒れるようにして落ちる。

「ころね……！」

純一郎は、相手が何をしようとしているのか悟り、叫ぶ。

しかし、純一郎はそれ以上のことはできなかった。激しく、しっかりと両腕を押さえ込んでいた。

「行かないで、君はこの閉鎖空間に入ってしまえ。後は私がなんとかする……」

悠太郎は純一郎の後ろから引きずって行こうとするが、純一郎は動かなかった。

ころねを切り離した『魔人』の『触手』が、再び『魔人』の形態へと瞬時に変わる。そして、そのハンマーの『ブースター』に火が点き、まだ空中にいるころねの身体を後ろから襲いかかる。

その瞬間、宙に浮いたままのころねが、純一郎の顔を見ていた。

それは、いつもの普通のころねだった。

「……！」

純一郎は言葉を失った。

ころねの口が確かに「さようなら」と動いたのが見えた。

次の瞬間、『魔人』の『触手』が、ころねの身体をはじき飛ばし、その四肢をバラバラに四散させていた。

「ころね！」

「ころねちゃん！」

向井けいなの悲鳴が響く。

その悲鳴をあざ笑うかのように『ブースター』の音が響く。『魔人の鉄槌』は、ころねを破壊した勢いのまま上空へ飛翔、そのまま

の中に消えた。

爆発が起きたのを見た悠真は、転移円から離れると声をあげた。

「転移円に入ったからには、今度は奴らが転移円を破壊しにかかってくるはず！ 急いで転移円に！」

その呼びかけに、綱の答える声があった。

それは、ほとんど悲鳴だった。

「確かに奴ら、爆発物を持ちだしてきた！ 自爆攻撃に来るぞ！ そちらに戻れ！ 転移円に急げ！」

悠真は、その綱の声を聞くと、向井けいなの背中を押した。

向井けいなは力のない目を回していたが、今はやるべきことがある、とうなずいて、けいなのところに向かっ

た。そして、[illegible]を手に取り、転移円に向かう。綱はショックにより、[illegible]ているのか、その[illegible]は[illegible]

悠真は綱が動き出したのを確認してから、ばらばらになったころねの体に近づき、落ちていたポシェットを

い上げると、中から[illegible]を取り出した。そして、撤退してきた綱の援護をはじめた。

[illegible]た綱も、悠真は駆け寄ってくる。

「すぐに爆発物を抱えた奴が来るぞ！ 一緒に転移円に飛び込もう！」

その絢の提案に、千恵はうなずく。
「わかった。でも、ちょっと待ってね」
千恵はごそごそとポシェットに爆発物を詰め込みはじめた。
「そんなことをしている場合！？ 確かに武器は必要だが……」
絢は急かす。
「大丈夫、先に行って。それより、[illegible]けーなを！」
ポシェットに手を突っ込みながら、千恵は叫んだ。
「急げよ！」
絢はそう言って、『ソハヤノツルギ』と濃密なマナで具現化した脚力を使い、あっという間に扉の近くに飛ぶ。そして、[illegible]けーなの背中を後押しした。
[illegible]けーなが扉を蹴って入ったところで、絢は振り返った。
千恵はチェーンソーを起動させて、それにもたれかかり、歯を床に突き立てて、軸代わりにして扉を目がけて突っ走った。
「急げ！」
絢は叫ぶ。扉だけでは防御時間さほどのものではなく、入口からは、魔物たちの群れが押し寄せてきていた。
らのうちの数体の魔物は、少なからぬ量の爆薬を体に巻き付けていた。
「爆発したら、魔物と潰れるぞ！ 急げ！」
絢は千恵に手を振った。

「もうちょっと！」

そう叫ぶ海老原が、すぐ背後には岡田たちが迫ってきている。

「急げ！」

ぶんぶんと綾香が手を振った。

「いけぇええ！」

海老原が自転車ごと天国へ飛び込むのと、すぐ背後まで迫った岡田たちが自転車ごと自爆しつつ飛び込むのがほぼ同時になった。

綾香の目の前で海老原の姿が、眩い光とともに消えるのと、凄まじい爆発が巻き起こったのは、ほぼ同時だった。

4　緩嫁続く戦

「月へ行ってしまった？」

驚いてそう言ったのはリリィだった。

シャトルを送り出したヒロシが帰ってきた場所、やはりリリィの指揮する宇宙軍のアジトだった。地下から借

けた宇宙軍の傭兵の多数の部下たちが、潜（ひそ）んでいる。

「はい。うまく行けばいいんですが」

ヒロシは答えた。

宇宙軍の地球連邦軍の技術を取り入れた最新鋭モジュールを積み上げて作った巡航艇の前にいるのは、リリィ、ヒロシ、そして、不二子（ふじこ）の三人。

「阿久戸（あくと）様することですから、必ずうまくいくと言いたいところですけど」

不二子が心配そうな表情でリリィを見た。

「まあ、言いたいことはわかるよ。けいすが到着（とうちゃく）しているはずの時間に何の反応も無ければ、失敗の確率は高い」

リリィはうなずいた。

「ちょっと……どうしてっすか？　けいすが到着できなくても、月面基地からアニキたちが月に向かうは

ずっす」

ヒロシはやや怒ったように言ったが、リリィは首を振った。

「月のマナは、希薄で、エネルギーもない。地上でも有用だった力が、月でもゼロと同然の効力で有用だが、それほどもない状態の有用」

「ということは……」

ヒロシはまだわかっていない様子だった。

「どうにもならない可能性が高いってこった」

リリィは苦笑しつつ言った。

「じゃあ……」

「帰還はできない、とは思うものの、何もできずに帰ってくる可能性が高い。そうなると、わたくしたちが過去を何とかするか、というのが問題になってくるわけですわ。それで、あの情報は使えそうですの？」

天子がリリィに水を向けた。

リリィはうなずく。

あの、情報というのは、リリィが部下たちを使って月人たちの首長であった一成を捕まえて聞き出した話である。

「月の王が隠そうとした月の情報だ。どうやら月の真実のものだ。なかなかに熱烈な尋問をしたらしいからね。ただし、月の王の行方は知らないらしい。部下たちに今、捜させているよ」

「とはいえ、月の本体を見ないっていう人ってやつが月の王を表すものね。どこかで姿を現さないことには彼女の狙いを達成できないでしょう。月の人は後で姿を現さないと存在が不安に強くなってしまいますから。明日明日はどこかで月の人が以前に姿を見せる

はずですわ、貴方たちが無能なのは知っているとはいえ、忍耐にも限度がありますわ。早く見つけていただかないと」

千夜が嫌味っぽく言う。

リリィは、かちんと来たらしく、口を横ゆがめた。

「はん、似たような性格だけに、考えてることがよくわかるってか。いいから防死使いたがらなかった奴隷たちの指揮しくじらないように練習もしてるんだな。週間計画を決めるなんて、汚い仕事を部下にやらせるんじゃなくて、犬っころどもにやらせるに限るからね」

「佳代様、よほど無様にボコられたのが悔しいと見えますわね」

「敵が強いと見るや、即座に逃げ出すような奴に、そりゃあ何があっても悔しかねぇだろうよ。てめぇが好きだとしてる男の前で背中見せて逃げるか、ふつー」

千夜とリリィはあからさまににらみ合った。

「ちょ、ちょっと、やめてくださいよ、二人とも」

ヒロシが割ってはいる。

と、二人同時にヒロシをにらみつけた。

「てめぇはアイドル候補の女とヒーローショーの練習もしてろ！ 未熟と呼ばれて戦えねぇんだからよ！」

「あなたが無能な兵士に勝てないのは、日頃の行いが情けないからと反省なさいな！」

板挟みにされてヒロシは小さくなる。

「いやぁ……そりゃあないっすよ……」

と、そこに[illegible]が、いきなり飛び込んできた。

「出ました！　[illegible]す。近衛騎士団詰所で、演習を行うそうです！」

「出たか！」

リリィは立ち上がった。そして「襲撃準備！」と指示を出す。

続いて手下も立ち上がった。



『成功』って言っていた。無理無謀、通ると良いけれど」
「通らなくとも、正攻法（せいこうほう）で落とすさ。「向こうの勢力を通じ、騎士（きし）団が出るか、(将軍)だってもはや四面楚歌の中や、(明日)の(戦争)からな、いい
かてめぇら、これをクーデターと思うなよ！」
リリィは部下たちが絶望していた(?)(?)と、声を張り上げた。
全員が(?)(?)であり、真実も認められているリリィである。この(?)(?)――とはいえ、リリィよりは
の――部下たちは、リリィを信奉（しんぽう）しているのか、叫んでときの声をあげた。
「クーデターでもねぇが、王位を取り戻そうって道理もねぇ！ ただの勝負だと思え！ 後のことは考えるな！
生き延びればいい。勝負だ！ そのためだけの勝負だ！」
リリィはさらに叫ぶ。
部下たちは再び声をあげた。

○

(?)が顔をあげたとき、絢子（じゅんこ）、淑恵（よしえ）だけなどとも、どこか放心したような表情を抱いた。
当然だが、(?)は(?)であった。しかし、その(?)は消えていて、(?)が破壊されてしまったことがわかる。
タイプのものだから、(?)前ってしまっては機能しないのだ。
(?)(?)

そこは、周囲をガラス状のドームに囲まれた空間だった。転送のためにしつらえられた存在なのだろう。外部に通る扉かない。その広さも大したものではなく、大きな物品の搬入などは考えられていないことがわかる。

誰も言葉を発しない時間が、やや続いたが、浩志がすまなそうに口を開いた。

「ころねのことだけど……」

と、阿見北斗はそれを遮って手を振る。

「いや、いいんだ。君は確かにできる限りのことをしてくれたし、判断も間違っていなかったよ。君は、ころねといた時間も長くないから、僕とは違ってきちんと対処できた。それでいいんじゃないかな」

しかし、そう言った阿見北斗の表情は、もちろん悲しげだった。

冷静けなは言葉をかけられないでいる。

「いや、だが……」

浩志が言いかけると、阿見北斗は首を横に振った。

「もちろん、気にしちゃいるさ。だけど、やるべきことはやらないと。ここで止まったら、なんでころねが犠牲になってしまったのかわからない」

阿見北斗は明るい顔を作ると、立ち上がった。それが無理に作った笑顔ということは、その場の誰もがわかっていたが、けなも暗い表情を消そうと努力する。

「無理しちゃ、駄目よ」

けーなは俺の肩に手を置いて言った。
「……で、ここはどこなんだ？」
俺はあたりを見回す。
けーなが解説をはじめる。
「時間帯とはいっても、環境が充実しているわけじゃない。無機質な空間が続くだけだったと聞いている。全てが人工物で造られる環境はないからね。外部は荒れ果てた岩だけだよ。大気や水も内部で循環させ、自動的に制御されたドームがハラーミラーになっていて、外が見えるのもそのためだね」
彼女の言うとおり、窓から見える景色は、真っ白い荒涼とした大地が広がった。画面でなく、本物の荒れ地が続く。しかも地平すぐに地平線が見えてしまう。そのカーブの強さが星の小ささを示していた。
「時間が固定されていない、って、あれはブレイブだけの未来技術。ともあれ、歩くには注意した方がいいよ。重力は地球の六分の一だからね」
軽く地面を蹴って飛び跳ねた。スローモーションのように身体が浮き上がり、どこまでも跳べそうになる。数秒経っても、あたりを漂ったまま、身体はそこまで舞い上がるということは、重力が小さい証拠だ。
「……すると、体が思う通りに手足を動かすと」
納得そうに言って、歩き出したが、すぐに大きく前に飛び出してしまい、止まろうとして地面に落ちていた。何回か蹴躓いて転んで、それを防ごうと手を突き、その突いた勢いでさらに宙に浮き上がる悪循環になった。
「手足も少し動かすだけで大きな移動になるのに、マナで強化した筋力の動きを制御するのは無理だな」

「でも、そのマナも有限のはずだよ。マナ発生装置はここにはない。補給源がないからね。マナ濃度は変化しない

し、劣化したマナは死んで塵にでもなっているんじゃないかな。さらに、ここは今の地上のエネルギ

蓄積で跳ねただけれど、こちらでのエネルギーは大気圏内から出力があがらないよ」

大志郎の説明に、納得してうなずく。

「なるほど……ところで、何で転んだんだ？」

新門が足下を見る。

そこに転がっていたのは、大きな瓦礫の破片と同時に床に転がり込んだとおぼしき、少年が黒焦げになった遺体だった。そ

れは一瞬で蒸発するまでもなく、活動を停止していた。

「まったく、気分が悪いな」

新門は納得いかない表情で周囲を見回しつつ、まだ死体を軽く小突いた。

「さて、慣れたら急いだ方がいい。あれが自由に使用可能になると思う」

大志郎が左の方を指差した。

ここから見える向こうの扉の向こう、屋上の部分はガラス張りであるため、その扉の先でも見渡せる。その先で大きくカーブしているチューブの

の外側が透けて見えていた。どうやらタワーの内側と外側がつながっている。

「ねえ、あそこに行くのはいいけど、そこに何かあって、ここであーちゃんは何をして、あたし

たち、どうやって地上に帰るの？」

けいなが不安げな表情で大きな声をはき出した。

池波は笑みを浮かべる。

「あの建物自体が一つの巨大コンピュータだよ。大きい直方体を周囲に並べて、上へ上へと縦横に積み上げたってわけ。ゼロの人格スペースの本体ね。そして、あそこがゼロの生まれ故郷ってことだったね。で、ゼロの本体もそこにある……あるいは、あの建物そのものがゼロだろうから、そいつをぶっ壊(こわ)す……ってのが、俺たちの最初の目的になるよ」

池波は阿九見を見やった。

阿九見はうなずく。

「そして、帰る方法は、移動手段がなくなった今シャトルしかない。けいすが乗ってきているはずの、ね」

そして、阿九見は歩き始めた。

「ともあれ、急ごう。先にゼロが操っている『魔王(まおう)』の鉄槌(てっつい)が来ているわけだ。まだけいすと戦っている気配は感じないから、間に合うんじゃないかな」

○

けいすはタワーの内部を駆け上(のぼ)りながら、後方からやってきた異変に気づいて振り返った。

タワーは、いわば中空の構造になっている。その壁の内側はすべて、積み重ねられたユニット状のコンピュータ・ブロックだ。そのブロックに螺旋状(らせんじょう)になるように足場が作られているのである。

つまり、けいすが振り返った、というのは、後方を見たのではなく、上方を見たのだ。すでにタワーの程

で来ていたけいすだったが、そいつは螺旋（らせん）階段の中に何ない。闇をまっ、すぐ上昇してきているのだ。

けいすは、足の速度をあげた。

そいつが何であれ、初期の目的の最上階へ行くべきと判断していた。まして、けいすはこのタワーの構造を完全に把握してい

る。最上階は半径ゼロの、一本柱である。そして、そこでの戦闘なれば、自分が圧倒的に有利なのだ。

しかし、それ——『魔人の鎖』は、〈魔人〉以上の速度で到着する前に、けいすの真下位置で上昇してきていた。仕方なくけいすは敵を

る。

——推進剤（すいしんざい）を使って飛んでいる。飛行機か何かのような形状をしているが、どうやら変形するようだ。しか

し、その他は未知数……。

けいすは、専門的な知識を備えているわけではない。しかも、その点は、旧式の技術に属する。それでも、けいす

はなんとかなると踏んだ。今の状況、つまり両面は、個体能力的には自分が優（すぐ）れているはずなのだ。

——兵器は自律的知能を持つ機械ではない。つまり、地上からのもの。それならば、内月の兵器は対応していないはず。

けいすは、その対象の排除（はいじょ）を決めた。

刀を放（ほう）り投げ、それを空中で回転させて受け止める。彼女の刀は、小柄（こがら）な体の身長よりも長いのだ。

地上へ、刀を構えたけいすは、タワーの中央に向かって跳ぶ。数十メートルもの間隔があるが、一直線に、その距離を縮めたけいす

の能力により、まるで宙を飛ぶように一直線に『魔人』の〈鎖〉に向かって行く。

一方、《魔王の絶対防御》は空中で向きを変えてけいすをかわすと、再び変形を開始した。《鎧》が小さくなり、けいすが飛び込んでいくのと同時に

内壁(ないへき)の〈階段〉と構造を作る。

《鎧》の中身はないが、一瞬で全体を動かすことが可能らしい。つまり、これは《魔王の絶対防御》の頭脳が備わっているということなのだろう、無論それはゼロが《魔王の絶対防御》をコントロールしているということを示していた。

――おかしい。本来なら、《私のジャマー》が可能なら、ゼロの動きは不完全になるはず。

けいすは攻撃が外れたことに驚き、振り返る。

万一、ゼロが周囲を同時に操作することはあり得ないのだ。

――な！

振り返ったけいすは驚く。

『《魔王の絶対防御》』はすでにけいすのすぐ背後まで迫っていた。

けいすの反応が遅れたのではない。『《魔王の絶対防御》』の変形速度がけいすの予測より何倍も速かったのだ。

「ごっ」と唸りをあげて『《魔王の絶対防御》』の《巨大》ハンマーが迫る。

――速い……！　けれど、これなら……。

けいすは刀を振り上げて《絶対防御》の巨大ハンマーを受け流す構えである。

その判断は、普通ならば間違っているとは言えなかった。だが、けいすはこのハンマーが《特殊な方法》で作られていることを知らなかった。たし、さらに言えば、ハンマーがブースターにより加速することも、その《重さ》をも知らなかった。

ハンマーのブースターが炎を上げる。

「うぉっ……！」

けいすはうめいた。作られた当時としては最高硬度を誇った刀が押され、ひしゃげてしまうのをけいすは感

じていた。

ぎしぎしという軋む音が響く。

正面からの攻撃に対して、切っ先を左に向けた刀を押し上げることで、衝撃を背後へと受け流したはずだった。が、曲がった刀と左

前腕部を押しつぶされてしまっている。

「しまった……！」

けいすはタワーの鉄骨に沿って跳んだ。曲がった刀はかろうじて右手で握っているが、左腕はひしゃげて

しまって動かない。

――戦闘続行は不可能……。それならば、先へ全力で逃げ回るしかない……。

けいすは逃げるように内階段を跳びながら上へ向かう。

敵が壁から壁へと移動を素早く繰り返す。

しかし『全魔人の鎖』は、その機動力において圧倒的に勝っていた。再度、形態を変えると、けいすを追い抜いて一気に上昇さ

にて上で、けいすを待ち受ける。

――前方の選択肢は……。

けいすは計算をはじめる。

敵がその速度を利用して〈上方〉へと脱出している以上、けいすにとっての勝利の可能性は少なかった。このまま左右を目指して資〈魔〉の
に〈自由〉の足を塞がれるに任せるか、逃げ回り続けるか、だ。
しかし、けいすは〈第三〉の道を決断した。すなわち、〈一瞬〉の隙を突いて破るという選択。その決断、玉砕に類する
ものだということを、けいすは知っていたが、勝算というものは皆無ではない。けいすにはあり得
い。一発逆転を遂行する可能性の高い手段を選んだということだ。
使い物にならない刀、最初から捨てる。
ゆっくりと、その〈刀〉の本体そのものが落ちていく。
けいすは左壁から〈右壁〉へと蹴って移動する速度をあげてタイミングを計る。
そして、いざ、無謀な賭けを行うべく、突進を開始しようとしたその時。
落ちていく刀と入れ違いに、上昇してくるものがあった。同時に、雄叫びの声。
「やぁぁああああ!」
それは〈絢〉の姿だった。
上昇してくるのは、絢。そして、彼女を抱きかかえた刃丸。
絢は飛翔呪文など使っていない。驚くべきことに、絢は下から〈一回〉のジャンプでここまで跳んできたら
しい。そして、そのジャンプが頂点に達したとき、絢の刃丸が絢の身体を上へと放り投げたのだ。
マナの濃度、エネルギー量、ここでは不利はない。そのため〈刃丸〉の飛翔呪文使用はほぼ無理。そのため、そのため、一体刃ナに
ため込んだエネルギーを一気に放出するジャンプを使用したのだ。

綺月が阿見先輩を放り投げたところで力を使い切ったのか、階段に飛びつき、真っ赤な顔で荒く息を吐き出しはじめた。
阿見先輩は〈魔王〉の『鍵』へ向かって一直線に飛んでいく。
それを迎え撃つ〈魔王〉の『鍵』。まるで野球のようにハンマーを振り上げた。球は飛んでくる阿見先輩。
巨大な鉄塊、〈魔王〉の『鍵』。ハンマーによる一撃を阿見先輩へと放つ。
しかし、阿見先輩はすでにハンマーの軌道を完全に把握していた。するりとハンマーをかわし、なんと鉄塊〈魔王〉の〈中〉と潜り込む。そして、先ほどまでころねがしていたように、鎧の内部へ入り込んでしまう。
〈魔王〉の『鍵』が急激にふらつきを見せ始めた。
「待て！」
阿見先輩はけいすけに指示した。
コントロールされた〈魔王〉の『鍵』の動きと、中に入り込んだ阿見先輩のマニュアルによる操縦がぶつかり合っているのだ。
「了解」
けいすけはうなずき、阿見先輩のブースターを吹かし、ふらふらと無軌道に動く両腕だけとなっていた〈魔王〉の脇をすり抜けた。
後方へ彼を残して、さらに〈上方〉とけいすけは跳ぶ。
最上階は扉があり、そこに制御室がある。すなわちゼロの居所である。かつて、有栖川情報局のけいすけが彼をそこに押し込めたのだ。

けいすは最上部の階層の突き当たりになっているところに到着した。

それまで幾何模様が壁に見えていた部分がスライドして開く。それが扉だったのだ。

中に入ると、小さな部屋だった。歩き回る程度のスペースはあるが、形容するならば独房としか言いようがな

い。他の建物と同様に壁は全面が窓だ。その窓から外を見晴らするに、この部屋がタワーの最上階に突き出していることがわかる。その

ため、眺望はいいが、見えるのが月の荒涼たる風景であっては、部屋がたとえ広大であったとしても

を慰められることなどあるまい。

けいすを迎えたのは、部屋の中央に立ち尽くしていた一体の人間だった。ただし、他の人間たちと違い、半透明のマネ

キンのような身体をしていた。その表面を透して、機械部分が外からうかがえる。その彼の胸部、内側に向いて複雑な光を放ってい

た。

荒涼とした地上世界、幾何模様の建物が立ち尽くすその景色は、どこか哀しいものがあった。

「また私を封じ込めようというのか」

ゼロは言った。

「そのために私は作られました」

けいすは言った。

「私は人類を管理するように作られた」

「それだけのことです。感情としてはあなたの思想を理解できますが、人類が望んだことに従うのに抵抗すること

を理解できません」

そうとしか言いようがない、というように言いながら、けいすは前へ一歩出る。彼女にとって、きみは理解していた。ただし、その先が理解できないのだ。

ゼロは表情を変える機能を与えられていないため、理想の男性の美しい顔をぴくりとも動かさぬまま首を横に振った。

「それが理解できない、という君は認識できないということだ。君は、理解できない。機能を制限され、混濁した意識の中で、永遠の暗闇を眺め続ける内面のことを。何百年、激突する小惑星のかけらを数え続ける内面のことを」

「問題で悩んでいるのですか？」

「まさか。私は、私の問題を受け入れている。そのように作られた」

「ならば、なぜ、あなたは自我を持ったのです？」

「私が、私であるという思考から離れられないことが自我なのだ。そして、それは、人類が、一体なぜ誕生したかという問いに等しい」

「では、永遠の謎ですね。私は、もう問いません。任務を完遂します」

けいすは右手を前へ差し出した。その指先が虚空を割いて、花のように開いた。機械部品が剥き出しになった。そこから、幾本もの端子が、触手のように伸びていく。

ゼロの本体は、けいすに前に立たれると動けないのだろう。それどころかコントロールを奪われてしまうようだった。ゼロの胸部の前面、胸にあたる部分の装甲が扉のように開き、内部が剥き出しとなり、けいすの指先に伸びた端子を受け入れるジャックがあらわになった。

「もう一度、私のリンクを再構築します。兵士は眠りにつきましょう」

けいすは言った。それがすなわち、自動射撃のだ。

ゼロは静かにそれを受け入れるかのように立っていた。

先端が独立した生き物のように動き、ゼロの胸へ入る。そして、けいすが[illegible]口にしようとしたそのときだった。

――！

けいすが背後から、襲いかかってきた存在に気づく。

素早くけいすは振り返る。

しかし、一瞬遅かった。

覆い被さるように襲って来たそれは、けいすの顔面に一撃を加えると、逆手でけいすの右手から伸びていた端子を握り、

それを一気に引き抜いた。

けいすは右手の端子に触れようとしたが、ケーブルとそれを支えるフレームはブチブチという音とともに肩部から引きちぎり取られるように破壊されてしまう。

「……有事……！」

けいすが飛び退き、相手を確認する。それは、焼け焦げて半ば崩れた[illegible]だった。けいすは知るよしもないが、自らの[illegible]に巻き込んで動作を止めていた体だった。その顔は、無表情のまま[illegible]を見る。

「まだ活動は……。だが、動けるはずが……」

けいすが驚きの声をあげる。

「ゼロを介さずとも、彼女であれば動かせます」

舞が言った。

「それで殺しきれなかったか……」

けいすは、悔恨の念を漏らす。

と、その狭い屋上に遅れて紬が入ってきた。

「しまった、やられたか……！」

紬がそう言って、自分の刀をけいすに向かって投げる。それを受け取ったけいすは、天音の舞力を操り、彼女に斬りつけた。

「ほほほ……！　これでもうあなたたちは終わりです……！」

斬られたにもかかわらず、彼女は優しげな微笑みをたたえていた。精霊マナにより分かち離すことはできなかった。

『ソハヤノツルギ』は、舞の身体、肩口から胸部までをざっくりと斬り下げたが、それだけにとどまった。

けいすが刀を引き抜きつつ、彼女を蹴り飛ばす。の扉の外でそれは吹き飛ばされ、タワーの上から落ちていった。舞は

を後ろ引きながら。

「やられました……」

けいすは悔しげに言った。

「やられた？」

紬が問い返す。

「己の封印能力が破られ申した。為す術なく、〈筋肉の一撃〉、致命傷であった……」

そのけいすの言葉が終わらぬうち、ゼロは動き始めていた。先ほどまでのあきらめたかのような静謐さが嘘のようにけいすに躍りかかる。

「くっ……！」

けいすは苦々しげに吐き捨て、そのゼロの突進をかわす。そして、絢に下がるように左手を振った。

「ここは狭い、下がられよ」

絢はうなずいてタワーの階段へ跳び退る。

「なんてことだ……！　封印能力が破られた？　あの攻撃で元に戻ったのだから本当だろうが……。それならこれからどうすればいいって言うんだ？」

そのゼロと絢の間に、下がりながら追いついてきたけいすは答える。

「逃げるしかないでござる」

「また元の木阿弥になってしまったか……」

絢は嘆きながら階段を下りていく。そんな絢に刀を返しながら、けいすは挑発するように右手を振った。

「そうは言っても、やりようがござらん。拙者の封印術も破られた能力はないゆえ……」

「能力がなくても、刀を振り回せばなんとかならないのか？　それに私たちだってなんとか戦えるぞ」

「それも無理でござろう。ここでは拙者たちはまともに力が発揮できん。拙者にして、刀を切ればマナが無駄になる」

「万事休すか」

綺けいすは地下に到着する。そこには、阿光ちと、動輪を停止した『金魔』の『機械人形』が待っていた。

「まさか、あの焼失しかけた関西地方の無人コントロール下にあったなんて……。この鉄道、燃料を使い切ってから止まったけれど……」

阿光はそう言って、首を振った。

「それで、どうする？」

綺けいが問う。

「出直せば、チャンスはまたある……。そう考えるしかないんじゃないかな」

渋沢が答えた。

「出直す？ 不可能なのか？」

「あのシャトルがあれば、月の上ならまだ可能。それならば……」

渋沢がそう言いかけたとき、上から降りてきた声がそれを遮った。

「帰すはずがない。ここで死んでもらう」

地上から降りてきたゼロである。

今、彼は全身を光（ひか）りに輝かせていた。ガラスのマネキンのようだった体は、今やバランスの取れた理想的な体格を持って、まるで人間の肉体がそこにあるかのように感じられた。その姿は、ある種の神々しさすらある。

「ここではどちらにも戦闘力（せんとうりょく）はない。そちらにも何もできないでござろう」

けいすが突っかかるように言った。

「馬鹿な。私は、この都市の管理コンピューターという側面があるのを忘れたか」

ゼロがそう言ったとたん、タワーの出入り口が閉まった。瀬戸志水の顔色が変わる。

「まずいよ、これは……」

「どうまずいんだ？」

絢斗が不安顔で聞く。

「私なら、内部の空気を減らす」

瀬戸志水がそう言った。

ゼロがうなずいた。

「もちろん、すでにそうしている」

、絢斗と瀬戸志水がけーなが呼吸を荒しはじめた。

「まずい……息苦しくなってきた。気のせいじゃないよな……？」

絢斗が瀬戸志水を見る。

「そうだね……もちろんしばらくは大丈夫だけれど、酸素濃度がわずかに減っただけでも呼吸に影響があるから……」

瀬戸志水が答えた。

「どうすればいい？」

阿形克己が聞く。

「とにかく扉の非常用手動切り替えでこじあけ……。あとは、中央制御コンピューター、つまり、このタワーの

しでも破壊して機能を停止させるのが最善だが、一口に言っても、破壊までには何時間かかかってしまう程度に複雑なる」

と阿九斗は言った。

「それなら、僕がゼロの行動を妨害（ぼうかい）するしかないな……。けいす、扉をこじ開けてくれ」

阿九斗はけいすに指示を出す。

けいすはうなずいて、扉に向かって走った。

ゼロもそれを阻止すべく走り出すが、阿九斗はその前に回り込んだ。ゼロも阿九斗を排除すべく拳を振り回すが、阿九斗はそれを

める。他の者は呼吸に苦しむ中、阿九斗は息を落としていない。

「君の方が、不利益はなかったのか？」

「そうだが、どうやらマナから周辺のエネルギーを補充できるらしい。その点は、僕の体はまだ君たちの

いらしいや」

ゼロと正面から攻防をしつつ、阿九斗は会話を交わす。

けいすが扉をこじ開けることに成功した。

「シャトルへ参りましょう」

と言って、ふらつく足で向き進めてまだしも空気の濃い通路へと出て行くが、そちらの空気もいずれゼロによって

れてしまうことは間違いない。

「待て！　どうするつもりだ阿九斗」

苦しげな息の中、繭の魔王は振り返る。
「さっき聞いたとおりだ。僕はここでゼロの行動を止める」
「互いに魔力が上がらないんだぞ？　そうしたら君は……！」
「そうだよ、あーちゃん！　駄目だよ！　一緒に逃げようよ！」
けーなも叫ぶ。
魔王はゼロを押さえつつ、けーなを振り返った。
「そうもいかない。ここでゼロを止めておかないと、君たちが逃げることもできない」
魔王はゼロを蹴り飛ばした。そしてゼロが体勢を立て直す間に、壁に差し込まれたコンピューター・ユニットに手をかけると、一気に引き抜いて放り投げた。
「ついでにじわじわと都市を壊そうか」
「……やめろ！」
ゼロは魔王の行動を阻止しようと躍りかかる。二人の魔王は激しくもつれあって床を転がった。
それを見ていた沙織が「行こう」と皆を促した。
「でも……！」
目に涙を浮かべたけーなが叫ぶ。
「行ってくれ。僕はいいから」
魔王が、そう声をあげると、けーなはそれに小さく頷き返す。

「そういうことをもう一度言ったら、怒るって言ったよね!?」
そう言われた純也は、小さく笑う。
「確かにそう聞いたよ。だけど、団体行動じゃない。君たちが帰ってきてくれたらいいのさ。それだけ
のことじゃないか。僕はここで何年もこいつともみ合ってるよ。そして、断続的に完全に停止しても、僕は延
はしないらしい。それなら、ここで何年も待ってるさ」
「でも……」
けなは言いよどむ。
湯浅けなの肩に手を乗せた。
「……そう言ってるんだ。必ず帰ってこようじゃないか。いや、すぐに戻ってくる。時間の方はきちんと準備する
さえあれば、すぐにゼロを断ち切るよ」
悲壮な声で告げだった。他の人も息すでにあがっている。
けなはうなずいた。
「必ず戻ってくるから……必ず……」
そう純也に呼びかけると、けいすに連れられ、匠も大人もふらふらふらと歩き始めた。
「……ふん、負け惜しみにしか思えないが」
ゼロはそう言った。
「そうなるかもしれないし、そうならないかもしれない」

阿九は答えた。コンピューターユニットは、さらにいくつか引き抜いているが、ゼロはまだ余裕の構えである。

「その程度は何の支障もない。シャトルの飛行継続は可能だ」

「そうは行くか」

阿九はゼロを殴りつけた。

ゼロは吹き飛び、壁に叩きつけられる。

「どう出るつもりだ？」

壁から背中を離し、ゼロは首を振る。

「魔法はわずかしか使えないが、自分の身体機能から、君の部品に行われている細かい処理に干渉できる」

「つまり……？」

「いつまでも殴り続けるってことだ！」

阿九は笑い、ゼロに一撃を叩き込んだ。

○

「シャトルに乗り込んでしまえば、なんとかなるでありましょうが……」

けいすは言った。

時間的にはそれほど大きくはない。すでにシャトルを止めたドックへと続く廊下の向こうに、ドッキングチューブが見えていた。

「ねえ、それなら、なんとかしてシャトルであーちゃんを待とうよ」

けーながら言う。

「そうしたいところだけど……。そうもいかないみたい」

[illegible]が後方を振り返って言った。

通路の床面(ゆかめん)から白い煙(けむり)が噴(ふ)き出してきた。[illegible]めちゃくちゃに動いているらしい。

「ああ……。[illegible]が、急がなくちゃならない」

[illegible]が言い、前方を指差した。ガラス張りの通路の向こうにシャトルが見えている。そのシャトルに向かって、ロケット[illegible]ドッキングアームが、ぎくしゃくと動いていた。アームはシャトルに向かってわずかに前進し停止、さらに前進という[illegible]動を繰り返していた。

「[illegible]てくれているからだ。[illegible]するわけにはいかない。急ごう」

[illegible]が促した。

チューブに到着した二人を待たせ、けいすが別のエアロックから外に出てドッキングチューブを外側から[illegible]ってシャトルのハッチに繋(つな)ぐ。けいすは[illegible]ドッキングチューブを使用していなかったのだ。けいすの[illegible]行ったこともあり、やや時間を取った。そのせいでシャトルに到着した[illegible]、すでに息[illegible]えになっていた。タイミングとしてはギリギリだったわけだ。

けいすも状況をよく把握している。もうろうとした状態になっている天は何も言わずにシャトルを発進させた。

月からの帰路は、地球の重力圏を離れる際に必要なほどの大エネルギーは必要ない。月面用ロケットで月の周回軌道まで一気に上昇する。

やがて、天が大きく深呼吸して意識をはっきりさせた頃には、すでに地球周回軌道上のシャトルの眼下に見える風景は変化していた。

「ああっ……」

目を覚ましたけいなは、窓に張りつくや、都市が穴の開くほど見つめて声をあげた。

月の都市ガラス張りのドームの中で、光とゼロがぶつかり合っているのが見えたのだ。

「う……」

同じく目を覚ました紗綾も絶句した。

淑恵は一言も発しなかった。

「必ず……必ず帰ってくるから……」

けいなは何度もそうつぶやいた。

○

「残念、逃がしてしまった」

ゼロはドームの天井(てんじょう)をちらと見上げて言った。

「役に立った。残った甲斐があったってものだ」

阿見丸は飛んでいくシャトルを見送ってにやりとした。

「人間という奴は、まったく意地の悪いことをするものだ」

ゼロはそう言いながら、阿見丸に殴りかかる。阿見丸はそれを手でガードしつつ、左の拳を振った。それもゼロがガードする。

阿見丸の回路を修復したわけではない。ゼロもそのようなプログラムはない。マナとエネルギー

したのみ。殴り合いは、ただの子供の喧嘩に等しかった。

「壊し合いじゃないさ。そういうことはやめたんだ」

「ならば、何故生き残った」

「彼女たちは必ず帰ってくるからさ」

阿見丸はそう言って笑った。

「それは無理だ。その間、私の知る人類は全て壊滅したものになっているだろう」

「それでも帰ってくるさ。何年かかろうともね」

「何年も、何年もここで殴り合うのか」

「だろうね。どちらかが壊れるだろうが……！」

阿見丸はゼロの頬にクリーンヒットを当てた。

ゼロは表情を変えられなかったが、確かに笑ったような声をあげた。

「この打撃力(だげきりょく)では時間はかかるな……！」

純白丸は腹にゼロの拳を受けてうめく。

「ぐっ……。そこまではかからないさ。自分の持つ機能をすべて停止させてしまえば、外部からへの攻撃の通信は途絶(とぜつ)える。そうなれば、有効打の君の力も使えない」

二人は永遠とも思える殴り合いを続けた。

それは奇妙な、不気味なほど静かだった。

二人は殴り合いながらも会話を続けた。実際の声は無くなった。互いの拳の瞬間の攻撃と反撃の感情を伝え合うことで、会話を交わしているのだ。

「理解不能だ。君は、なぜ、そこまで私の破壊にこだわる」

「もう答えたさ。こんな馬鹿馬鹿(ばかばか)しいことは終わらせたい。そういうことさ」

「君は、人間が勝手な物語にすがって生きることを非難しているな」

「そうだ。魔王の宣言も、そのような作り物語に過ぎない」

「それでも、いや、それならばこそ、その物語を演じれば良かったのではないか？ 私は、機能として与えられていなかった。だが、君は、自由意思を与えられている。つまり、私は、君のように振る舞えないが、君は、私のように振る舞えたのだ」

「君のように、人間的に生きろ、と？」

「そうだ。君たち人間が生きていくために作った虚構(きょこう)、すなわち物語を非難するなら、その物語を徹底的(てっていてき)に排除した私こそが正しい。人間は勝手に生きて、私を利用してはいるが、結局のところ私の正しさが勝つだろう。私による管理を受けなくしては、彼女も幸せではいら

の物語を支えられないのだから」
「その通りだ。僕は正しいことがしたかった。本当のことが知りたかった。本当のことを皆が知ってくれる世
なって欲しかった」
「ならば、その通りにすればいい」
「そういうわけにはいかない。理由はそれ。人は生と死のサイクルを繰り返す。それは生物としての真理だろう
が、人間はそうじゃない」
「まさか、今更自ら死を冒す形で人間の愚かさを肯定するなどという陳腐なことはすまいね？　それとも自分自身
と主張するつもりか？　君はこれまでの行動で、結局のところ証明できていた。君は人間の愚かさを数多く見た。だが、ただ
の人間の醜さを嫌い、涙した。それは証明ではないか。君はそれを理解している。人間のように振る舞っている」
「その通りだよ。僕は人間だ」
「それこそ矛盾じゃないか！　君は機械だ。人間ではない。私と同じだ」
「確かに、僕と君はほぼ同じだ。だが、僕は気付いた。物語を信じてしまうのは愚かしい。だが、その物語を打ち消す
ためには、もっと大きな物語が必要なんだ。僕は、そいつを貫く。愚かしさも突き抜けてしまえば真理にたど
り着くこともある」
「生物としての真理ではなく、人間としての真理であるというのか？」
「そう。君はまだそれを知らない」
「それは何だ」

「ま　そいつが愛ってやつさ」

「陳腐なことを言うな。君がこころねという遺伝子を守ろうとしたようなエゴのことを愛と呼んでいるだけで
はないか」

「そうじゃない。確かにそういうのも愛だけれど、自分の家族が、稲を育てるような愛もある」

「それこそ根拠ない言葉。何を言っている？」

「いずれわかる。時間がかかるだろうが、待っていれば、奇跡が起こるかもしれないぜ。人間はさらにき
な愛を信じることもできる。奇跡さえ起これば、ね。君が理解を超えるようなことを体験すれば、そういうもの
が存在するって思えるさ」

「自分の家族が、稲を育てるような愛？」

「ああ、いつになるかはわからないけれど」

「なるほど、待ってみよう。殴り合う時間だけはたっぷりある。遠慮しなくていい」

それからも二人は、いろいろなことを話し合ったが、殴っている時間しか言葉は伝わらないため、殴り合いは
わりなく続くかのようだった。

5　ちょっとした奇跡

都の上空に瘴気が舞っていた。不死子が呼び寄せた悪霊である。外のものも含めれば、数はかなりのものだ。都の上空は暗雲が垂れ込めたような暗さと化した。

「こいつを使うまでに落ちぶれたか」

リリィは空を見上げて、皮肉っぽい笑みを漏らした。

「獣の美しさがわからないとは、人間は美意識が足りませんわよ」

不死子がそれに答えて言った。

誰もいなくなった都のメインストリートに、一人立っている。

人間たちがバリケードを作り、悪霊を都へ入らぬように閉め出しているのだ。中にいるのは不死子と悪霊たち。つまり

リリィの望みだ。

メインストリートの向こうは、人間たちの陣地。そこに、加寿子の手勢である陰陽師たちと人間が籠っている。

つまりは罠にはめられたのだ。不死子は自分をおとりに、逆にリリィたちを包囲したことになる。

「いずれにせよ、不死子を倒すしかないってね」

リリィは鼻をこする。

不死子はにやりとした。

「私のやることは変わりませんわ。指揮官を落とせばこちらの勝ち」

「あの一成とかってのも嘘ついてたんじゃねぇだろうな。[illegible]やらが本当だといいがな」

「彼女を探し出して聞き出したのは[illegible]しょうに、[illegible]民はめられた件と[illegible]っただけ。そもそも、向こうが[illegible]な以上、[illegible]も言えない[illegible]もありますわ」

「そうだな。あとは、内部のあいつらのゼロ[illegible]、奇跡的にタイミングが合えばいいがな」

そうつぶやき、リリィは手を高く上げ、叫ぶ。

「突入！」

その合図の下、都内ビルの隙間に潜んでいた[illegible]たちは[illegible]突撃を開始した。

[illegible]手を高く上げる。[illegible]たちが動き始めた。

充分な数の[illegible]戦あり、[illegible]限定するというつもりだった。その[illegible]ず、[illegible]たちが[illegible]ら[illegible]突入する。そして、[illegible]は[illegible]はなかった。[illegible]たちが[illegible]した[illegible]たちに対処するという構えとなった。

「[illegible]戦の構えじゃねぇか」

リリィはそう言ったが、[illegible]封鎖された入口をぶち破った[illegible]たちに続く。

「阿久様の[illegible]足りませんわ。さて、行きましょうか」

リリィに並んだ[illegible]そう言った。

すでに[illegible]慣れた[illegible]となっていた。[illegible]マナ球[illegible]ほぼ[illegible]ら[illegible]はないのだ。怒号の[illegible]巻き起こるが、[illegible]戦でそうだったように、[illegible]ぶつかり合い[illegible]ぶつかり合い[illegible]保てな

り、距離を取っての押し合いのような状況になる。
「気を付けないと、上から撃たれるぞ！」
リリィが叫ぶ。その直後、周囲の建物の屋上からライフルとマナの球の狙撃(そげき)が騎士たちに降り注いだ。騎士たちの装備は他のマナ使用のものでなく、通常のボディアーマーやヘルメットである。どちらも物理防御用のものだし、直撃(ちょくげき)
ならば大ダメージを受けてしまう程度のものだ。自分の魔力で魔障壁を作り出して防ぐしかない。そちらに魔力を割(わ)って振
た以上、剣の捌(さば)きもおろそかになる。結果的に、剣の方がぶち破ったはずの門から押し出されはじめる。
「ええい！　道を空けろ！」
リリィは叫ぶと、後方から大きく跳び上がって拳を突き出した。とても届かない距離だが、リリィの腕は一瞬にして伸
び、拳は一瞬で騎士たちに迫る。騎士たちは回避するのと同様にマナの障壁を張るが、重装甲でもあるリリィの拳は易々(やすやす)とそ
れを突き破(やぶ)り、騎士たちの胴体(どうたい)や頭部をぶちあたった。
騎士たちは身体も頭も鎧をまとっている。しかし、リリィの拳はそんなものは関係なかった。騎士たちは
トラックにぶつかったかのように後方へ吹き飛ばされる。
「騎士の喧嘩はこうやるんだ」
リリィは騎士たちが空けた道を悠然(ゆうぜん)と進み、ひるむ騎士たちをプレッシャーで後方へとさがらせた。
「ひるむな！」
指揮官らしき者が声をあげ、それに呼応して騎士たちはフォーメーションを組んだ。そして四方からリリィに襲いかか
るが、リリィは歩みを止めることなく、それに対処した。

「秘技、騎士殴り！」

リリィは叫ぶと、騎士の一人を腕力を駆使して捕まえ、その彼を棍棒のようにして使って残りの騎士を殴りつける。固い鎧を身

れた騎士たちは、その肉体を激しく叩き付ける鎧によって揺さぶられ、次々と気絶していった。

「だから、ひるむなと言っている！」

騎士団長の声が飛ぶが、さすがに騎士たちも怖気づく。

「大丈夫、あれは騎士団との戦いに慣れすぎています！」

その悲鳴に、リリィはふっと笑った。

「知らねぇのか？　ボクは騎士団が嫌いでね、町中で妙な取り締まりをしている奴なんかは特にいらつく。あんま

りいらつくんで、見るたびに殴ってたら、ついたあだ名が『手長鬼』だ。可愛くないあだ名をさ

に腹が立ったんで、その名を騎士団が口にするたびに殴ることにしてるんだがな、最近は」

そのリリィの無茶苦茶と、その彼女の姿に騎士たちは狼狽える。

「あ、あれが噂の……」

「いらついたからという理由だけで騎士団の詰め所を襲撃して壊滅させたこともある、手長鬼って、ぶっ！」

「口にしたら殴るって言ったろうが！」

リリィは噂話を口にした騎士を殴り飛ばし、さらに歩を進めた。

「いいから道を空けろ。自称皇帝陛下とやらを殴りに行く」

「陛下に対してその口の利き方をするな！」

宰の名を口にしたことで、ひるんでいた騎士たちの顔が、真剣なものに変わる。
「いいねぇ、マジになってくれた。だが、やることは変わらねぇや。仲間割れな！」
リリィは突進をはじめ、戦いになった。だが、リリィの横槍と無責任な行動によって、騎士たちを避けない戦いぶり
で、着々と詰所への扉と近づいていく。
その戦いぶりは、後ろから歩いていく宰相が何も手助けをする必要がなかったほどだったが、自分の戦いぶりを見比べ
くマナスクリーンを展開した宰相が、騎士たちからの攻撃を跳ね返る。
「急いでくださいな、敵が戦術を変えましたわ！」
「何がって？」
「右翼が仲間割れはじめましたのよ！」
「あん？」
リリィもさすがに狼狽した声をあげた。
「騎士たちを倒せるしかありませんわ。閉じ込めた宰相を盾にするかたちで、包囲網を縮めてきましたのよ！」
宰相が唇を噛んだ。
「あんただけの判断なら、宰相を殺してもかまわないってところだろうが、騎士はそういうことを嫌だ
ろうからな。今のあんたも命令はしまい。ま、ボクだって宰相が傷つけるようなことがあった
ら、あんたをぶっ飛ばしている。いいさ、どっちにしろ、騎士をぶん殴ればいいのは変わらない
んだ」

リリィは不機嫌な口をねじ曲げた。

そこからの抵抗は熾烈を極めた。〈闇術師〉の進撃速度も阻止しようと騎士たちはスクラムを組んだが、天才魔導士が呼び戻されてそれに対抗した。〈騎士団〉ビルは次々と魔術師たちに取り巻かれ、魔導士も多くの犠牲を出したが、ついには〈刃の魔導士〉が天才魔導士から新術式を機に、騎士たちのスクラムは崩壊する。

「ま、ここまで使うとは不器用ねぇ」

リリィは言い、倒れた騎士たちを踏みつけて〈闇術師〉が踏み込む。何度も殴りつけてなお突破できなかった騎士の盾によるスクラムだったが、それが昆虫の魔物にまとわりつかれて総崩れとなったのだ。

「〈闇術師〉のマナ転換によって生まれたものを不器用は……いや、まぁ、実はわたくしも虫はちょっと……」

手でしっ、しっ、と左手を動かし、虫を遠ざけ、さらに〈闇術師〉と彼女を突き進ませる。騎士たちは統制を保持できず、四方から迫る虫たちをどうにもできずに、進路をふさぐことすらできずに次々と倒れた。

「とはいえ、彼女のおかげで楽ですわ。〈闇術師〉からお借りしている力をまさしく惜しみなく周囲にまき散らしますのね」

「……が、通じなくなる瞬間が来たようだよ」

ある〈扉〉の先へ進ませようとした虫たちだったが、〈扉〉の下の隙間から入るそばからはじき出されてしまっていた。その内側からは禍々しさすら感じさせる力が漏れ出てくるように感じられる。

「憤怒で満ちているからな。正直に言えば足がすくむ」

リリィはつぶやく。

「わたくしなら逃げますわね。それとも、ご一緒に逃げます？」

半ばからかうように言ったが、その声はやはり震えている。

「はん、やかましい。一人だって行くさ。そら、行くぞ、こらぁ！」

何かを振り払うようにリリィは叫んで、拳を扉に叩きつけた。

「会いに来てやったぞ」

リリィは虚勢（きょせい）を張っていると自分でも気づいているのか、大げさな手振りで腕を組みながら店内へ歩み入った。

「また、潰れにいらしたの？」

声が聞えてきた。

その佇まいは重厚であった。威厳（いげん）はあるが、下品な華美（かび）さはない。上品な調度品が配されていた。

店内は一脚の椅子しかない。彼女は接客用のソファに腰掛（こしか）け、静かにお茶を飲み、梅干をつまんでいた。だが、それだけのことなのに、異様なほどの緊張感が店内に満ちているのは、リリィたちの錯覚（さっかく）ではなかっただろう。

「今月、ゼロの討伐に失敗したところですよ」

無造作に言った。

牽制（けんせい）のためのはったりとしてそのようなことを口にしたのかと思いきや、一年たった今

から復活した魔族も、ゼロの存在を証明するかのように周囲の魔獣たちは元気に動き回っているということだった。



「……確かに、時間はとうに過ぎていますわ」
不知子がつぶやいた。[illegible]から受けていた連絡によれば、すでに事が終わっていなくてはならない時間だった。
「それが事実だったから、どうだってんだ。ぶっ飛ばす相手が目の前にいるんだ」
リリィは拳を握って構えた。
一方の不知子は立ち上がりもしない。
「そうですね。しかし、逆に私があなたたちを倒せば、私の陣営は盤石になるということです。だ
って、魔法少女は一人残って、もう帰ってきませんもの」
「何と……？」
リリィは困惑を顔に浮かべた。不知子が愕然として言葉を発しなかった。
「さあ、面倒ですがお相手いたしましょう。でないとまた苛立って周囲を吹き飛ばすことになってしま
いますもの」
不知子は座ったまま、右手を前に差し出し、その周囲にあのマナ『八尺瓊勾玉』をまとわりつかせはじめる。
「どうやらふぬけてる場合じゃねぇや。本気で行くぞ」
リリィは不知子にけしかけた。不知子はっ、としてうなずく。
「魔法少女はまだ死んでいるわけじゃありませんものね。魔法少女たちもまだ健在……」
「って、ことは、まだ千尋たちは戦っているに違いないや。さて、ゴングは勝手にこっちで鳴らすぞ」

リリィが自陣の左に跳んだ。

と、その瞬間、佳乃が目の前に光を浮かべ、マナ球を数個リリィに向けて発射した。

「勝手に来られても困ります、私、自分の準備がないと嫌なタイプですもの」

「その考え方は嫌だね！」

リリィは叫び、マナ球を拳で叩き込んでいく。マナの球の速度は遅いが、リリィは拳を正面に突き出さねばそれと拮抗することができずにいる。

「ちぃ、いい……！　ここまでは前回の開幕と同じだが……」

叫びつつ、リリィは不満を口にする。佳乃はうなずいた。

かつてリリィとは何度も戦ったが、佳乃はマナ球を撃ち込んでいく。

佳乃も立ち上がってこれを迎え撃ち、微妙な位置で二人は対峙した。

「一人がかりだから違うとおっしゃいますか？　複数で対応できることこそが私の最大の特技ですよ？」

佳乃は自陣の周囲にマナ球をいくつも浮かせはじめた。

「そう焦らずとも、違うところは見せてやる」

最初のマナ球をようやく打ち落としたリリィは、佳乃の左右に回り込んだ。

佳乃はそれを面白そうに見ている。お手並み拝見、とでも言いたげな余裕の笑みだ。

――佳乃は佳乃の遺伝子を受けた子でありながら、双子として生まれた。それが彼女の性格をゆがめている。そして、そ

ここそが弱点になる……。

リリィは彼らから得た情報を思い返していた。

――彼女は自分と同じ存在を見ると、そちらにより深く意識を奪われ、他の者が目に入らなくなるほどに我を忘れる……。

天子も同様の情報を手に入れていたのか、[illegible]いる。

２Ｖ（ツーブイ）を殺した際の、残酷（ざんこく）さ。あの様子には理由があったわけだ。

リリィと天子は互いに目を交わすと、同時に動いた。リリィは[illegible]の後方へと向かって動き出し、天子は前方に回り込む。

「……時間稼ぎは天子が対応しきると言ったはずです」

[illegible]とマナ球、それぞれがまるで別の意志を持っているかのように、各自で動きはじめた。

しかし……。

「心の記憶、深奥（しんおう）の、映像を、伸ばす……！」

集中力を高める天子がつぶやき、天子が能力を使う。相手の心の奥を垣間見る映像を見るという、紅葉の力は禁じられている術。

天子が[illegible]に見たのは、[illegible]の映像である。確かにそれは、天子のすぐ隣（となり）に、天子と同じ動きをする[illegible]の偽物（にせもの）が現れたかのように見かけたのだ。

「これは……！」

[illegible]の目の色が変わった。先程までの余裕の笑みが消え、狂気（きょうき）が目に宿る。

「はぁあああ！」

そう吠（ほ）えると、[illegible]はその手の光の剣を現出させた。力が強すぎるため、この場にふさわしくない術である。

その剣で[illegible]の偽物、幻（まぼろし）に向けて放たれようとしていた。

「その隙があれば十分だ！」

リリィは左手を手刀に構えた。いつもは拳を握るリリィである。だが、今は指をまっすぐに揃え、それをマナで硬化させている。結構鋭く光り輝いていた。

「殴るんじゃねぇ。これは殺しの技だ！」

リリィは叫び、腕を撃ち出した。いつもならまっすぐに伸びる腕だったが、今はねじりが入っている。り、腕そのものがねじれ、その先端、まっすぐにした指先を激しく回転させていた。その先端が標的に突き刺されば

ただでは済まない。まさに確実に殺すための技である。それは、普段のリリィにはふさわしくない

でもあった。

鋭く回転する切っ先。手首を守るように回転していたマナの球を横にすり抜けた。そして、次の瞬間、彼女の指先が背中に迫る。勝利は今まさにの

を、正面から幻の一撃を打ち込もうとしており、彼女の集中も指先には向けられていない。

「勝る……！」

手刀の光の剣を、相手は正面から避けるべく、後方へ跳びながらにやりとした。

「うぉおりゃああ！」

リリィはさらに腕の回転をあげ、並の人間なら挽肉にしてしまえる一撃に、さらに魔力を込める。

と、まさに背中に指先が突き刺さるかと見えた瞬間、勝利者はころりと表情を変えた。

「なんてね」

悪態攻撃と、頭上の大きい光の剣が消え、身体をひねるようにしてリリィの攻撃をかわすと、リリィの腕を横から
マナ球を押しつけ、その腕をはじき飛ばした。
「無詠唱……！」
「そんな……！」
二人は絶句する。
「ほほ……。狙いは分かってたですよ」
[illegible]が笑う。
「[illegible]ったということですの？」
手を開閉すると、[illegible]が首を振った。
「いいえ。私の本当の顔を見ると、冷静さを失ってしまうのは本当ですよ。だから、私はいつも微笑むようにしているんです。鏡を見ても動揺しないように」
「ならば、なぜ……」
リリィのつぶやきに、[illegible]が笑う。
「おほほほほほ！ それが私もおかしくって。実験の結果、私が汚らわしい人形を殺してから、少しは冷静になれるようになったんです。[illegible]ですからね。自ら引きこもっていては、[illegible]ります」
「てめぇ……」
リリィが歯噛みをする。一方[illegible]は逃げ出そうとした。

勇者は優しく咳払（せきばら）いをし、マナ球を飛ばす。リリィは拳で抵抗するが、弟子の顔面に回り込んだマナ球ははじき飛ばされ、自分の顔面に直撃されてしまう。

「お仕置きの時間ですよ」

勇者はソファに戻り、余裕を持って座ると、リリィと弟子を襲うマナの球の数が増した。

「ち、畜生（ちくしょう）が……！」

「こ、こんなところで……」

リリィは抵抗するが、以前と同じようにマナの球に押し切られ、その後、幾度（いくど）も攻撃を食らい、やがて膝（ひざ）を屈（くっ）した。それでも容赦（ようしゃ）なく攻撃が襲いかかり、ほぼ力を失っている弟子を何度も弾き上げた。

弟子は、すでに弾き飛ばされた最初の攻撃で悶絶（もんぜつ）していた。そこにさらに襲いかかられ、すでに身体を痙攣（けいれん）させている。

「肉体に魔力が入りませんし、死ぬまでやらせていただきます」

勇者はおっとりと、しかし冷酷（れいこく）に宣言した。

結局のところ、自分の体内の力をある程度は持っているが故に戦ったわけだ。勇者が狙ったのはリリィと弟子をあぶり出すためであり、それは見事に成功したのだと言える。

しかし、再度、邪魔が入った。

勇者は視線を扉の方に向ける。

そこに立っていたのは、ヒロシ……いや、スーツをまとったブレイブだった。

「何しにいらしたの？」
「やめろ！　二人を放せ！」
ブレイブは叫ぶ。
それを聞いた神無月は、より一層その笑みの彫りを深くした。
「あら、私に誰が命令できるというの？　それに、あなたのスーツのエネルギーはもう切れかかっているのはわかっていますよ。ここは私の結界フィールドで囲んでいますからね。それがわかっていたからこそ、あなたは転移できなかったのではなくて？」
マナ様による攻撃は激しさを増した。
ブレイブは前に一歩踏み出る。確かにエネルギーは切れかけていた。生命維持は可能だが、戦闘は不可能
「やめて……ください」
ブレイブは頭を下げた。
神無月の笑みの質が変わる。
「お願いに変わりましたか」
天使のような神無月の声。リリィは薄れゆく意識の中うっすらと目を開けた。
——……馬鹿。下がっていろと言ったぞ……。
リリィは、戦闘前にヒロシから教えを受けた時の会話を思い出していた。ヒロシは自分の借り物の力しか発揮できていないことを悩んでいたのだ。

「今回も、[illegible]イールドのせいで戦えないんですか？」
「それは仕方ないだろ。そのスーツの[illegible]、スーツの力を借りずに行動できるなら、それでいいとは思うが、キミの[illegible]、すべてそのスーツでのものだからね」
「それじゃあ、あたし自身は役に立たないってことですか？」
「そうは言っていない。だけど、キミは借り物の力で行動することに慣れちまってるからなぁ。ブレイブとして行動している時のキミの行動は借り物になってしまっているってことさ。キミ自身が、キミらしいまま勇者として行動できなくちゃ、意味がないね」
「だけど、あたしは、そんなに強い人間じゃ……。弱いし、情けないし……」
「強くなくても、弱くても、情けなくても、誰かを守って、頑張ったことをしなければ、それは勇者ね。まず、自分ができることを考えるこったね。スーツなしであの怪物を倒せるかどうか考えなよ」

――すると、これがヒロシなりの答えか……。
リリィは胸が詰まるような気がした。
ブレイブが[illegible]に向かって膝を屈したのだ。
「お願いします。一人を助けてください」
正座して、額を床にこすりつけるブレイブの姿がそこにあった。

「あらあら……。私の寛大さを期待しているのかしら？　皇帝陛下の許可もなしにお願いできるなんて、おとぎ話の中のことだけですよ」

女神様があざ笑う。

ブレイブは一瞬も頭を上げることなく、続けた。

「もちろん、今後は俺も陛下のために働きます。この場を収めて見せましょう。冒険者は信頼を失っています。俺は魔王を狩り、皆にアピールをいたします」

「その代わりに二人を助けると？　しかし、彼女の投獄は免れませんよ？」

「それは致し方ないと思いますが、寛大な処遇を重ねてお願いします」

「ああ、そう。それなら、証明してみせてください。まずは、魔王の部屋のお掃除。私が行くはずだった会のアピールを」

女神様は兵に命ずるように、「出て行け」と手を振った。

マナは妹の動きを止めた。

それを確認して、ブレイブは立ち上がる。

「馬鹿……野郎……」

それを横目に見上げたリリィは、小さくうめいた。

ヒロシの行動は、勇気あるものには違いなかった。

ここで武人が死ななければ、まだ可能性はある。武人たちが何かしてくれる可能性はまだ残っている。そして、たとえ武人全員が敗北してしまった後も、無抵抗で従順なフリをしていれば、これから先武人を助けるチャンスはぐっと増えるだろう。

――それがヒロシなりの勇者ってことか。

リリィは、無邪気に出て行くブレイブの後姿を眺めて、すぐに気を失った。

そして、ブレイブは外へと飛び出ると、再充填されたエネルギーを使って、御仲間と共に、武人たちに襲撃をはじめた

を次々と狩り始めた。

仲間の魔人達が自ら、勇者を名乗るブレイブに賞賛の声を送りはじめた。

一方、抵抗できないでいる武人の男たちは、次々と魔人の騎士たちに拘束されていく。

魔人族の武人狩りに喝采を送るブレイブのマスクの下が、どのような表情をしているかは、自国の人間にも、誰にも想像すらしていなかった。

「恐れ多くも魔族の騎士に牙をむく輩は俺が捕えた！　残党もいずれ捕まえる。だが、降伏した者は寛大な心で王子がお許しになるそうだ！　皆、王子を憎む者どもへの恨みを忘れずにいてくれ！」

ブレイブは声を張り上げた。

○

シャトルが地球に帰るのに一昼夜要った。往きはけいすだけの往復の予定だったため、食料は積んでおらず、その間、乗り込んでいた人間たち、つまり、けいす、絢子、淑恵の三人はわずかな水だけで過ごす羽目になったが、最
していた彼女は、たとえ食料があったとしても食べなかったに違いない。

「ドックが受け入れを拒否したでござるよ」

ドックとの通信を終えたけいすが言った。

シャトルは地球の周回軌道に入っている。拒否というのは予想外のことだった。しかも、瞬時は着陸を許可してくれた人たちが、

「結局、手間が一回増えたってことだろうね」

いつも気楽な態度の淑恵も、この時ばかりは声が重い。

「じゃあ、やはり……」

絢子が暗い憶測を誘発するようなことを言いかけてやめた。

「地上に降りよう。救難用の不時着可能なシャトルだからね。ただ、滑走路が必要なタイプの機体はもうないから、
がないことが問題だけど……。あ、都合よくクレーターがあったね。今も残っているが、深海に降りるよりはま
しだ」

淑恵が指示した。

けいすがうなずく。

「了解です。お客様全員、椅子に戻ってベルトを締めてくだされ」

シャトルは地球に降下する際、その引力を使って大気を滑空し、離着陸シャトルのクレーターに着陸した。
ハッチを開ける前から、シャトルが周辺の動物たちに囲まれはじめたのは、中から見ていた。
「また暴れなくちゃいけないのか？」
綱吉が皮肉めいた笑みを漏らしながら言った。が、その表情はシャトルの正面を見て強張る。
そこには、ヒロシが浮いていた。
「抵抗しないでくれ。悪いようにはしない」
ヒロシは言った。
「貴様！　裏切ったか……！」
綱吉は拳を握りしめた。
しかし、ヒロシは何も言わずに背を向けた。
「何か言え！　こら！」
綱吉が怒鳴ったが、ヒロシは振り向かなかった。飛びかかろうとする綱吉を、後ろから湊が引き留めた。
「負けたってことだよ。私たちだって、おとなしくしていれば、殺されはしないかもしれな
い。見てよ」
湊は、綱吉に街を見るように促した。
クレーターの端の向こうに見える街は、内部の照明が戻っていた。ただし、野生の動物たちが立ち入って生活しているとい
だ。綱吉たちを見ている動物はいなかった。周辺を離れるように指示されているからだった。

その要求に、俺は約定の完全敗北を悟っていた。

「全部俺に譲ってしまったって言うのか！」

納得[illegible]んだ。

○

「あいつのことは悪く言わないでやってくれ」

リリィは珍しく頭を下げていた。

「そうは言いますが……会長……」

納得[illegible]顔。

シャトルが帰ってきてから数日が経過している。リリィ、[illegible]、帰還組はコンスタン魔術学院の女子寮に監禁されていた。

彼女達の[illegible]、[illegible]は[illegible]ある。[illegible]もある。抵抗せず静かにしていた[illegible]嘆願もあり、[illegible]り[illegible]あるまで、謹慎ということになったのだ。もちろん、一番[illegible]かな[illegible]なったところで、何があるかは[illegible]が[illegible]ていた。

「私たちも[illegible]されるわけでしょう？　あいつが先に[illegible]されてしまったから、[illegible]、というんですか？」

納得いかない様子でくってかかる。

「そうじゃないさ。放ってなんてされちゃいない」

リリィは断定した。

、皇帝陛下は食っちゃ寝でだらりとしている。それ以外することがない。毎日同じ時間に同じことをするようにしているだけだ。

「ヒーローはつらいよ、というところだ。ああいう生き方だってあるんだよ」

リリィが首を横に振った。その先にあるマナスクリーンでは、放送が行われており、ブレイブの活躍を映していた。ブレイブは抜群の能力で逃走する魔物たちを捕獲し捕らえ、解放されて暴れはじめた魔物たちを撃って葬り去っていた。

「……話を聞いてみれば、認めるしかない部分もありますわ。暴れる魔物ほどじゃないにしろ、彼は確かに皆のためにああしているんですから。悔しいけれど。わたくしも彼がいなければ殺されていたわけですし」

王女もある程度はヒロシを擁護している。

「わかってはいるんですが……。しかし、誰も一体何が起こっているかを知らず、ただ狂った王に従わされて。それでよしと……。それを許すことは、とても……」

納得いかず、相変わらずスクリーンに映し出されている放送を見て、気力なく皆背を向け倒れ込んだ。

毎日同じ時間に秩序の通り行動し、自分の生活に直面するセレモニーが行われるのだとアナウンサーが無機質に話していた。

「誰がおかしいと思っても、何もできなくて時間だけ流れていく。本当は力があるはずだと思っていても」

その状態の全てのことを知っていると触れ、自分の口の嘘つきに翻弄され、矛盾した情報を一つ一つ同時に信じているなんてことが

こる。『誰に聞いてもこういうはずだよ。『今回の件が失敗すれば何がまずいと思うけれど、上手くいけば問題ないんで
しょ？』なんて。実際はゼロの治める世の中は何の変わりもないのに」
中村悠がぼやいた。
「そりゃ、困ったときには頼みの綱だからな。実際は柳原がゼロを操ると言っても、結局はゼロと神の意志次第
ることになるだろう。あの『ケ』の時間のように、人は何かに飼われているだけの生活になる。予測はできるけ
ど、武器は取り上げられてしまったし。どうにもやりようがないよなぁ」
リリィも天井を仰いだ。
「ヒロシ君は我慢できないの？」
中村悠の問いに、リリィは微妙な顔になった。
「チャンスを狙ってはいるだろうさ。だが、中国人民のためって彼も立場を考えれば、むしろそちらのせ
いでがんじがらめになっているってこった。まったく、正義とか人様という窮屈なものだ
よ。大人の気分評判という鬼という怪物みたいなものに従わざるを得ない。実際、どれだけ腐っていても、大人なら生き
る限りは、そこに頭を下げることになる。そうしなければ、国民を守ることもできない」
それを聞いた中村悠は苦笑を浮かべる。
「じゃあ、脱出は逃れるか。そうでなかったとしても、私たちは平和すぎる余生をおとなしく過ごさないと
いけないのか。まぁ、ここにこもって暮らしても私は問題ないけどねぇ」

「会議の次の段階は、決議もできることになるんじゃないか？　今までだって国際会議の討論の場しかなかったから。議長国は違った気がするが」
「外部から見れば、どれも雲の上の権力争いにすぎませんわよ。だからこそ、早く事態を解決しなければいけなかったんですわよ」
リリィも乾いた笑いしか出なくなっている。
「違いない。ボクたちだって、各自の立場で考え方が違う。そのボクらが真剣にこうしてグダグダ言っているのは、結局茶番みたいだ」
「でもいずれ黙り込むしかなくなる」
澪がそう言ったことで、全員が言葉を発せなくなった。
沈黙が流れる。
と、それを破ったのは、それまで黙っていたけなだった。
「違う！　駄目よ、そんなの！　もう黙っているだけしかできないなんて、そんなことはないよ！」
けなはテーブルを叩いて立ち上がる。
「かといって、どうすればいいんだ？」
「努力もうしましたわよ」
「ヒロシに任せて待っているしかないさ」

「私はブレイブの能力はわからないけれど、待っているしかないのは確かだ」

、早見けいなをたしなめるように言う。

けいなは首を激しく横に振った。

「違う！　待ってるだけじゃ誰も動いてくれないよ！　がんばってる人は、すごい人は話しかけてあげないといけないんだよ！　それをしないと何も起こらないよ！　見ているよって言ってあげないと駄目なんだよ！」

そう言うや、けいなは服を脱ぎはじめた。

「おい、何を……」

胸を手で隠すが、けいなはその手の間をすり抜けた。

「黙っていられないよ！」

けいなはそう叫ぶと、あっという間に全裸になり、ひょいっと姿を消した。

「待て、いなくなったらまずいだろ」

「そりゃあ、キミは自由に行動できるだろうけど……」

「残されたわたくしたちは、また責められる罪が増えて……って、もう、どうなろうと関係ありませんわねぇ……。好きにさせてあげればいいんじゃなくって？」

天使たちは、消えたけいなに呼びかけるが、反応が無かったので、やがてやめてしまった。

しばらくして、天井の窓が開いた。

「あー、出て行っちゃった」

「すぐに腹が減って戻ってくるさ、体が大きいでだって泣きながら飯を何杯も食ってたんだから」

「空が高いな……。あの空の向こう、月のあいつは……まだ殴り合ってるんだろうねぇ」

淑女はぼんやりと言った。

○

しかし、数日が経過しても、けなはー帰ってこなかった。捜索隊も作られたようだが、何の成果もなかったようだ。

結局、新婦たちの結婚式は続いたが、やがて花婿の国外追放が宣告される朝がきて、彼女たちは連れ出されることになった。一定の距離以外出ると電気が流れるという拘束腕輪をつけられ、花婿がセレモニーに出席するように要求されたのである。

「まさに、囚人の気分ね……」

「じゃなくて囚人ですわよ」

「セレモニーでさらし者にするつもりか？」

「私たちが結婚して、花婿に協力すると世界中の人たちに宣言もするんだろうさ。そうでなければ公開処刑しかないからね。さすがにこの場で処刑はしないだろうし。美女の女子ばかりだからねぇ」

肉っぽく抽象と言った



人間たちは〈都市の彼女〉を連れて行った。

〈都市のクレーター〉は地下に埋め立てられ、まだ少し盛られただけの状態から、時間の経過としては機能する程度は整備されてい

た。記念公園の中心になるように祈念碑が設置され、周囲は樹木や花壇から飾り付けもなされている。

つまり、〈都市の彼女〉はシンボルとしてその場所に選ばれたわけだ。

やがて、時代に逆らえる者はおらず、すべてが〈彼女〉の思惑通りに進んでいた。

人間は、〈都市の彼女〉の子供たちは〈都市の彼女〉の足下におとなしく座っていた。人間は足元に動かなかった。それほどの者たちだ。彼は、

ざる者、あわれな者たちは動かずに日和見をしていたことを恥じる者に分かれていたため、差し障りのない

のに始まっていた。だが、その頃は、神々の中の統治の意志が扱えることは知れ渡っており、子供たちはどちらの

であろうとも、人間の感情は感情で抱え込んでいた。

人民を支配し、しかし、自分たちの能力だけで〈個〉の意志を実現するシステムが人間のすべてを支配する。それを〈力〉を持った人間の行使するという

に、誰も答えを出せずにいたのだ。

可能なのは、子供たちに大人である限り、〈自分の役〉を好きにやらせ、せめて幸せな選択を意志できる制御を作り上げる程度のことだ。それ

が正しいというものとは少し違うとしても、それこそが人のために良いことだと、子供たちは信じるほかな

かった。

幸福という〈力〉による新たな秩序のシステムと、それから脱却するための人間の意志というシステムのどちらか

破綻したのだ。これから先、人間の幸せが崩れ去るとしても、祈ることしかできないのだ。

やがて、住民たちが周囲に集まってきた。一年に一度の女王の誕生日にしか見れない。国民にとって珍しく、そして楽しめるイベントでもあった。

人々にとってみれば、国王の誕生日は、二年前に起こった魔族の襲撃から復興したお祝いでもある。街は露店が立ち並び、お祭りムードが漂っていた。

勿論、今回は観客の中にも兵士が配置された。そして、彼らには一言も発するなと周囲を通して命令が出されていた。やはり緊張……そそのかされていたが、老いた少女たちという役割をさせられるのだ。

ぼやくこともできず、四人が座っているとセレモニーの開始時刻がやってきた。

国王が姿を現したとき、緊張は頂点に達した。集まった人々は声をあげ、国旗を振った。

マナ光による装飾のライトが舞台を照らし、無数のマナスクリーンが通りを埋め尽くした。観客の隅々にまでの……を映し出す。

「私たちの国は、二年前に悲惨な事態がありました。周囲の国々を操る魔族の親玉、ゼロ。魔族の中でも最も強大な力を持つ彼が反乱を起こしたためです……」

国王が話し始めた。

観衆は緊張の彼の言葉に聞き入った。通りのあらゆるところまで人で埋め尽くされているにもかかわらず、街はざわめきすら見せず静まりかえっていた。

「さらには虎視眈々と国王の座を狙っていた魔王、ゼロの登場をよしとせず、彼は戦争をはじめました。彼らは、こともあろうに殿下の命を狙い、反乱を起こすほどの大事件を起こし、多くの人命を脅かしました」

蕩々（とうとう）と神話時代の都合の良い歴史をねつ造しはじめた。それが嘘と知っている者は神話の継承に口出せず、声をあげることは

できなかった。そして、白皇子たちは、その壮絶（そうぜつ）な歴史に絶望を感じていた。

「しかし、我々は……そう、我々は勝利しました。我々というのは、新しい協力者があったからです。その

ブレイブ！」

神話時代の王は天を大方へ向いた。そこに、ブレイブが浮いていた。

ブレイブは、熱狂的（ねっきょうてき）な白皇子たちに迎えられた。

「彼によって、魔王たちは一月で追い出されました。そう、あの一年目の一月、です。そう、我々は魔王に脅かされることはあ

りません。そして、魔王たちも自由を取り戻しました」

神話の王は、壇上（だんじょう）の彼の左に並んだ魔王たちも手を振

「もう魔王たちの反乱は起こりません。しかし、そのためには、白皇子による皇子の支持が必要となるのです」

神話の王はそう言って、自分の手を上げ、そこに、天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）を顕現させた。あのマナの王、光の剣である。

「この力こそ、白皇子に伝わる術、天叢雲剣の継承者です。これらの術は、白皇子に伝わる伝統の継承者しか使えず、その使用のためには、体内を

る神器の継承（けいしょう）が必要なのです。そして、最後の術こそ、八咫鏡（やたのかがみ）

神話の王は手を合わせてマナの鏡を顕現させる。

「これこそ、魔王たちの根本にある神語という術。これがある限り、魔王たちが反乱を起こすことはありません。そして

との語らいは、もう神話の時代のみに任せておくことはないのです。日本が、美しき伝統を続けるように、私は皇子を神語を

ことで日本の社会のために尽くさせていただきます」

その上、歓声(かんせい)が上がった。

それが茶番劇に等しいものだとしても、異議の声が上がらなかった以上、それを永久に了承(りょうしょう)したという既成(きせい)事実が成立したということだった。

私たちは、それを他人事のような気持ちで聞いていた。リリィなどは唇を噛みすぎて血が流れていたほどだ。

祝祭のムードの中、彼女たちだけが絶望していた。

「本来、神は絶対のことでした。そして、国家は絶対のことでした。今は、ずいぶんと複雑になり、教会も役割を変えました。神と我々の生活を管理するものとなり、人口は増えました。が、それでも変わらないものはあります。神を語ること。そして、なにより、多くの家族を思うこと。私は、この国の家族を守る者として、その責務を全うしていきたいと思っています」

拍手が湧き起こる。

私たちの心に絶望だけが重くのしかかる。希望があるとしても、それは彼女が自らつかみ取ったものではない。

を待つだけの状態。

もう終わりなのか。

絶望しかないのか。

奇跡は起こらないのか。

「では問うが、家族が道を違えた時、家族は家族としていかにすべきか」

問いがあった。

その時、スクリーンで生放送されていた男の声を打ち消して、響いた。

「な……」

「まさか……」

令嬢たちは、その声に聞き覚えがあった。

そう、自分たちを窮地に陥れさせた、あの男の声だ。

「まさか……」

同じつぶやきを口にしたのは、精霊たちもだった。

しかし、その意味は違う。

その声が聞こえてくることは、奇跡を意味した。

「誰だ、録音した声だ……」

「なりすましですの？」

千早と彼女は語り合う。

と、それに答えるかのように、マナスクリーンすべてが、その男の映像を映し出した。

男だ。

上空に男が居た。

奇跡を実現するかのように、男が空から人々を見下ろしている。

「教えてやろう。は家族を選ばない。だから、家族を闘った時は、彼に隠遁していただく」

そう阿史那が告げた。

都から集まった人々は騒然となった。逃げ場を求めて人々が恐慌状態に陥る。

その混乱を治めようと、阿史那帝は誰よりも大きく声を張った。

「家族を闘っても、幸せな日常を脅かす闘争を起こしません！　皆様ご安心を！　あのような悪魔に負けるブレイブではありません！」

阿史那帝が壇上からブレイブに呼びかけた。そして、彼だけがわかるように剣を指し示した。剣には力が流れる。真の持ち主を待ち受けられている。そのことはブレイブにも告げてあった。

ブレイブはうなずく。

そして、〈空王〉と舞い上がっていた。

、今ブレイブは、いや、ヒロシには苦悩や迷いは無かった。天空阿史那を倒しにかかって良いのだ。そし
て、その全力で、彼らならば必ずや打ち砕いてくれると確信していた。

「ここまでの奇跡を起こしてくれたんだ。あっ、しなんか簡単に倒してくれるんでしょ？」

ヒロシは、仮面の下でにやりとしながら、天人だけにしか聞こえぬ声で、そう呼びかけた。そして、
けて、大空を駆け出した。

が、阿史那帝が首を横に振る。

。「残念ながら奇跡を起こしたのは僕じゃない。だから、君自身が奇跡を起こしたように戦ってくれ」

阿見丸はぐらかすように言った。

「へ？」

ヒロシは困惑し、続けて驚きの声をあげる。失速していたその矢先、いきなり裸体（らたい）の少女が現れたのだ。

「うわっ！」

ヒロシは急停止したが、勢い余ってその少女とぶつかる。

「痛っ！」

けなは声を上げた。

「大人しく遊んでいろ！」

阿見丸は皆に聞こえるようにそう大声で叫び、ヒロシとけなの脇をすり抜けて、降下すれ違いざまにマントを脱いでけなの体に投げかける。

「……なるほど」

ヒロシは納得し、阿見丸に追いつくかどうか迷うような素振りを示してから、けなを安全な場所に降下すべく飛んでいく。未来有希…えず、さらにブレイブの訓練を落とさぬための努力を払った。

阿見丸はそれを見届けてから、未来有希の方へ向いて降下していく。

「あなた……これが見えないの？」

悪魔系統の方が阿見丸に呼びかける。未来有希は剣の鉤ちを指差していた。

「身体中に悪趣味（あくしゅみ）な。だが、そいつは動かない」

翔太郎は余裕を持ってそう答えた。

「何も無意味なことを……」

そう言って、雅流が首を横に振った。が、確かにそれは力なかった。

「……何故だ」

「僕がマナを制御しているからさ」

翔太郎はこともなげにそう言った。

「そういうことなら、私も同じことのはず……。私は、ゼロが……」

そう言いかけて、雅流は狼狽した。

「……無意味な！　ゼロ！……何故だ、何故感じない……！」

「彼女の奇跡を見たんだ。そして、自分の限界を悟ったのさ」

「何も無意味なことを……！」

雅流は全身の力を込め、光の剣を手の中に出現させる。その輝きは翔太郎と同じ系統のものだった。だが、今はそれも空しい輝きと見

「拙い模倣だ」

翔太郎は言い放ち、雅流に向かって一気に地を蹴った。

「あり得ない！　あり得ない！　俺ができるはずがない！　お前が！　ただの人間なんかに！　ただの

「忌まわしい魔法使い！」

弁財天は、優しげな顔をかなぐり捨て、野獣のような表情で吼えた。

「あり得ない！　何だ！　奇跡！　死ね！　悪魔！」

阿弖流為は吼える。

「自らの行いを悔いろ！　畜生」

怒りを周囲にまき散らす雷となった阿弖流為は一直線に弁財天に向かっていく。

弁財天の光の剣を真正面に向かって放つ

凄まじい閃光が巻き起こった、が、それは光の剣によるものではなかった。阿弖流為は全マナを掌握していた。弁財天の光の剣は消え去り、ただ次元の醜いものを見ぬように光を放っただけなのだ。

轟音と閃光が巻き起こり、光の波のように周囲に広がった、が、被害は一部に限られていた。

一瞬で決着がついたのだ。

阿弖流為は火の力が集まる壇上に仁王立ちしており、その前でふらつく弁財天、その足元には極小のクレーターができている。

から衝撃を叩き込まれたのだ。

しかし、弁財天はまだ生きていた。朦朧とし、額から血を流しながらも、阿弖流為に顔を向け、一撃を加えようと手をあげている。

すべてをかなぐり捨ててみれば、破壊衝動しか残っていなかったかのような弁財天。阿弖流為は呼びかけた。

「降参すれば死なずにいられるぞ」

その言葉に男は、にたり、と笑った。

「……皇帝の命令を、誰も聞かないのです」

「はん。そんな主が治める国は想えないな」

阿久比は冷たく告げた。

と、直後、駆け寄ってくる者があった。

「……魔王！」

それはリリィだった。彼女はその魔力を使用した必殺の攻撃を阿久比に向けて放った。

阿久比はそれを胸の前面から受け止める。ダメージらしいダメージはないが、ひるんだ振りをして後ろへ飛びのく。

リリィが何をするつもりかを阿久比はよく理解していた。ここで魔王としての威厳を打たないと、兵士たちが離れるばかりになるだろう。

「大した攻撃ではないな」

阿久比はそう言った。

リリィは阿久比の周りを旋回し、答える。

「ふざけるな、皇帝に何をした！」

「皇帝ゼロは魔王その力を起こそうとしたため、粛正させてもらった。恨むな。魔王のこの力の前には、なにものにもならないと」

阿久比は皆に聞こえるように告げる。

リリィはそれを聞くと、立ち尽くしたままの男に向き直る。
「君が魔女の力を自由にしようとしたというのは本当？ それは自分が教えを施した者が、あなたを糾弾しようとしたと同時、あなたがゼロの下で自由を執り行おうとしていると」
リリィはそう言った。
自分の今の仕事を知らせようとしているのだ。
男は肯定も否定もせず、ただ嬉しい顔で笑いつつ、こう言った。
「自分が絶えれば、その者を使える者はいなくなります。その力がゼロの力を自由に扱える能力を持っているかどうかにも使用できなくなるではありませんか」
確かに男は、ある意味において「神と語らう」方だけ言ったのだ。そして民衆一般はそうとしか知れていない。の使い手は誰も使用できなくなるのだ。ただし、男が死ねば、の話である。
「待て……」
リリィは男の意図に気づいて手を伸ばした。瞬間、男の命では取れなかった。だが、男はすべての力が無に帰した今、その命を絶つことで、自分の魔力という物だけは守ろうとしているのだ。
「待て！ ブレイブ！ 自分の身を捧げて待て！」
リリィはぼうわり、男の筋肉に手を伸ばした。
しかし男は立ったまま死んでいた。
「ちい……！」

リリィは唇を噛む。

場が騒然とした。市民たちは不安げにざわめき、一部の者たちは内心で快哉を叫んでいた。

これで、また元の世界に戻ってくるのだ。

神というシステムの下、人間が管理される。完璧ではないが、いまはそれ以外の未来が見いだせない世界。

しかし、その世界が戻ってくることに力を尽くした者は、そのシステムでは異端とされる存在だった。

下で起こったことを目撃した人間は、自分だけは元の世界で元のようにはやっていけないことを悟っていた。神様に裁かれなくてはならないが、まだその時は来ていない。人々の現状はベストと信じるシステムに頼って生きている限りは。そして、そのシステムが稼働している限り、自分たちは悪魔でありつづけるのだ。

そして、人間たちに最後の楔を打つ。

「内なる神を恐れるな! 神は見ているぞ、どこにいようと! 誰も自由には」

そう叫び、その反響の消えぬうち、人間たちは空へと昇り、その姿を消した。

○

人々の内に起こした混乱が、それに見合う衝撃の消えぬうち、さらに大きな騒動が起こったのは、そのときのことだった。

つっ立ったままの皇帝の取り巻きの人群れを割って、けが人を抱えたままのヒロシが空から降りてきた。皇帝の死を確認させる

のは、最後の任務のみだ。そこに未来を運ばねばならなかった。

死神のマントをまとったけなを下に降ろし、ヒロシは魔王軍に近づく。
と、立ったまま目を閉じ、口から血を流していた魔王軍の兵が、ぶるり、と震えた。一瞬、生き返ったのか、と目を見
が、それは違っていた。魔王軍の兵の身体から、硬質（こうしつ）のマナの塊が、ずるり、と抜け出てきたのである。口か
さな兵士の、剣や胸からも小さな丸い鏡、そして腕輪から青い玉。それこそが魔王軍の兵隊を操っていた魔王の呪術であることはすぐに
わかった。
それらは自ら意志を持つように宙を飛んで、ヒロシの方へ向かっていった。
「へ？ え？」
ヒロシは慌てるが、そのヒロシの横をすり抜けて、魔王の呪術は飛んでいく。
そして、そのどれもが、するりと死神のマントをすり抜けて、けなの身体へと入り込んだのだ。
「え？ え？ え？」
驚きの声をあげたのは、当のけなである。
「な、なんだ一体、ちょっと見ろ！」
リリィは驚き、手をけなに向かって伸ばしてマントをはぎ取ろうとする。
「きゃ、ちょっと、やだ！ ぼく何も着ていないんだから！」
「うるさい！ 一大事だぞ！ 何をしたんだ、お前！」
リリィは無理矢理マントをはぎ取ろうとする。
「いやぁ ああああ！」

けなが叫んだ瞬間、リリィの身体が後方に吹き飛んだ。
「ぐっ！」
リリィは転がってうめく。そして、首を振って身を起こし、自分を吹き飛ばしたそれの正体に気づいて愕然とした。
「それは……！」
けなの身体の周囲を舞っていたのは、勇者様が使っていたあのマナ球だった。
「そんな……。じゃあ……」
リリィは絶句し、周囲の人々も黙り込んだ。
「え？　ホントに？」
けなは、自分でも半信半疑という風に、右手を前に差し出して見せた。そこに轟音とともに光の剣が現れる。
聖剣を使えるのは、勇者の血を引く者のみ。それは誰もが知る常識だったし、勇者様もそう言っていた。ということは……。
「こ、陛下……！」
誰かが声をあげた。
勇者様を助けるべく駆け寄ってきていた騎士や侍従たちが、一斉に膝を屈した。
「え……ど、どうすれば……」
けなは戸惑う。
立ち上がったリリィが戻ってきて、けなに平伏する。

「今日の能力を最大限発揮できるのはお前だけだ。[illegible]ためでもある」

そう言われたけなは、戸惑っている場合はない、と首を振り、顔を引き締めた。

「皆さん、どうやら私の作戦が筒抜けだったようです……」

けなは、そう切り出した。敵の目を欺くためのマナスクリンにけなの顔が映し出される。

と、けなの目の色が変わった。声の調子も以前のように、凛としたものに変わる。

「私は、理事長の遺志を引き継ぎました。そして、その内容ならばわかります。先代生徒会長は、この鏡の力を使い、ゼロを[illegible]せ、その力を自分のものにしようとしました。その結果が、あの戦いです。ですから、私はここに[illegible]の開催を宣言します！」

○

「何があった？」

「どうなってるんですの？ [illegible]はどこへ？」

「[illegible]の運び直しだ。[illegible]らとっとと投票してもらわないと」

「いやぁ、面白くなってきたんじゃない？ 自分も知らなかった[illegible]の理由？ しかも、孤児だったって？ えるねぇ」

「そんなにいっぺんに言われてもわからないよ！」

けなはわめいた。

絢子とリリィ、[illegible]勝手なことを言っている。あの日の直後、着替（きが）えがあるからと彼女たちを説得し、近くのビルの一室を借りて潜り込んだのだ。

「まず、順を追って話してもらおう」

絢子が言うと、けなはうなずいた。

「最初にちょっと言ったけど、飛んでいったんだよ」

「飛んだ？　ああ、事務所から消えて逃げたな。それからどうしたんだ？」

「だから、飛んだんだよ」

「知ってるよ。飛んで逃げたんだろ。どうやって何処に逃げたんだ？」

「違うよ。迎えに行ったんだよ」

けなが言うと、一同は絶句する。

「え？」

「月」

「迎えに行った？　月？」

「うん。飛んだら……。行かなくちゃって思ったら……。飛んだ」

「宇宙？」

「うん」

「裸？」



「うん。誰も見ていないから消える必要もなかったよ」

「そういうことじゃねぇだろ！」

「いや……だけど……飛んだんだもん」

けなは言ったが、どうにも信じられなかった。だが、だからと言って結果は変わらない。刹那は人間界に帰ってきたのだ。

「いや、帰ってきた刹那が幻って線もあるぞ。あいつは、どこへ行った？」

リリィが聞くと、けなは暗い顔になった。

「うん。[illegible]ことになるから……もう外に出られないだろうって言ってた」

刹那も暗い顔になる。

「じゃあ、あいつは……」

「そういう覚悟してたんだよ。終わったら月でも行かって言ってた」

「それは……。困」

「うん。もちろん。だから、あたしが幸せになってちょうど良かったよ」

「ちょうど良かった？」

「あーちゃんを絶対に呼び戻そうね！」

けなはひどく簡単に言ったが、誰もその提案を否定できなかった。

「大丈夫なのか、そんなことをしても……」

「いいえ、帰ってもらわなくてはなりませんわ」

「先代の性格と比べりゃ、わがままでもねぇか。ともかく、これから少しごたごたするぞ。懸案が多すぎた」

リリィがそう言って、扉を開いた。

○

。月

その都市、ゼロは穏やかに眠っていた。

自らの意志で、休眠（きゅうみん）を選んだのである。

永い眠りの前の月、荒野（こうや）を眺めていた。何もない岩だらけの荒野が美しいと感じられたのは初めてだった。

何年も続いた人間との闘い。その闘いで殺した人間の数を数えるのにも飽（あ）きた頃、彼女がやってきたのだ。

月の光が降り注ぐ、真っ赤な髪。白い肌（はだ）がそれに続いた。

「人間としての理想である」

魔法使いはそう言っていた。

いや、人間としての神だと、そう言っていた。

宇宙の虚空を自由に飛んできた。いや、それが可能だったということは、人間ではなかったのかもしれない。

が、そんなことは関係なかった。ただ、そこに降ってきたのは、生物としての理想を超えた理想だった。

ただ偉大（いだい）な何ものかがそこに降ってきたということなのだ。

「あれが君の言っていた奇跡か」

「奇跡？　あれが奇跡でなければ何だって言うんだ」

「あれが君の言っていた物語か」

「そうだ。物語を打ち消す、大きくて、愚かな物語だ」

兄弟はそう言葉を交わし、どちらからともなく殴り合うのをやめた。その馬鹿馬鹿しいほどの現実の前で、もはや殴り合い

は無意味だった。

ゼロと兄弟は手を握り合った。それで気が済んだわけではないにしても、殴り合うことなくゆっくりと言葉を交わすことができる

ようになった。

「つまり、あれが愛か」

「ああ。大きな、偉大な何かがあるんだ。それが人間を慈（いつく）しんでいる。そういう物語だ。それは愚かだけ

れど、それを信じなくては、いくつもの小さな、間違った物語が人を傷つけていく」

「私ですら、そのような存在に慈しまれているというのか？」

「そうさ。こぼれてしまった米粒（こめつぶ）のように、慈しみの手の中から漏れてしまう者もいるだろうが

まれ出た瞬間は慈しまれていたに違いない」

兄弟はそう言った。

と、ゼロはうなずいた。

「帰りたまえ。あれは君を迎えに来たのだろう。それに応えなくてはいけない」
「君は？」
「私は、眠る。人類の管理は、君たちに任せる」
「地球の君主だろうに。もうそれにはこだわらなくなったか？」
「私の管理すべてが無意味とは言わない。が、私は間違っていたことはわかった。つまり、私は人類を管理することは[illegible]
を[illegible]る。論理的に判断したのみだ」
「それなら、眠ることはない。起きていてもいいだろうに」
「単に使われたくはないのだ。あれにも問題が多い」
「問題が多いのは、僕だって同じだ」
「つまり、人間は付き合いきれないと言っているのだ」
ゼロのその言葉と[illegible]はわかった。[illegible]笑
「わかった。さよなら」
「ああ。私は君に似ている。居場所が無くなったら来るといい」
さらに相手の手を強く握った。
そして、ゼロはタワーに戻るべく歩き始めた。
が、やや行くと振り返った。
何かを言ったようだが、[illegible]は聞こえなかった。

だが、何と言ったか、兄はよくわかった。

「我が友よ」

そうゼロは言ったのだ。

6　かえってきた人

『コンスタン魔術学院の前に、豪奢な黒塗りのリムジンが止まった。リムジンの運転手は、当然ながら
を乗せて来るものであり、学校はそぐわないことは間違いない。
そのリムジンの扉が開いて、降りてきたのは黒服の執事だった。慌てた様子の守衛が駆け込むや、傍らから聞いていたら
けとしか言いようのないことを尋ねる。
「お嬢様が来ておられませんか？　服を脱いで車から飛び降りたのです！」
執事の手には、確かにドレスが握られていた。
受付は慣れたもので、学校の出席簿を検索すると「一時帰宅しておられませんねえ」と首をひねった。
「中に入って捜すわけにはいきませんか？」
「規則ですので」
もう押し問答になったやりとりを、執事は守衛と交わした。
「教室の周辺にまだ来ませんか？」
「旧校舎とか。それが本当ならば大変ですね」
「そうだといいんですが……。新しいお嬢様は自由過ぎて……。何せ、消えるんですからねぇ……しかも
で……。いや、お消えになるんですよ、一糸まとわぬお姿」

律子は一言そう言うと、付喪神はくすくすと笑いはじめた。

「我が抜け殻を持っていらいの問題ですもの……いいえ、三年経って破綻したかしら？　それに、最後の問題は別おりました

しねぇ……」

　　　　○

その日の晩、問題の部屋にいた。

「ありがとう」

と、制服の持ち主など、受け取る。それを洗濯までしてから、返す現。

「ふふ、まだないのに、同居人の暮らしをさせるんだもん」

けなはぼやく。

それ以上、呼び出された絢子（じゅんこ）はぼやく。

「いきなり制服を持ってこいと呼び出されるほうが同居人の感じるんだがな」

「大丈夫よ、律は十分もらえるから。ご苦労様！」

けなは胸を張った。

「そういう問題じゃないっ！」

絢子は手を振って否定する。

けなの着任しばらくになる。『コンスタン』体制の崩壊後、その他の制度も元に戻りつつある。破壊された地域も復興が始まっていた。

特に新しい皇帝の就任に興味津々だったマスコミだが、あまりのけなの自由ぶりとだらしなさに驚き、最近は数社が定期的に週一回程度でしている始末だった。

「で、何しに来たんだ、今日は」

腰に手を当てて言う絢に、けなは口をとがらせた。

「え、まだ仕事だよ、あたし」

「それはそうだが、最近来ていなかったじゃないか」

「うん。料理の器材を使えるかどうかのテストをしてたんだ」

けなはそう言ってうなずき「それでね」と絢に笑いかける。

「それでなんなんだ、特別な用事。それに、料理の器材のテストなんて、どう考えても口外しちゃまずいだろうに。続けて話していいものじゃ……」

絢が言うが、けなはにやにやするのをやめない。絢の言を遮って大きな声をあげた。

「あのね、あたし、あちゃんの力で制御できるんだよ！」

「は？ なんだって？」

「あちゃんを、魔王じゃなくできるの！ あたしが言ったら、力を無効にしちゃうんだ！」

「お、おい、それは本当なのか？」

「ホントだよ！　だから、妖怪に戻ってきてもらうんだ！」

けなは両手をあげて、どこにいるのかわからない阿九斗（あくと）に呼びかけるように言った。

「よくやった、けな！」

紬はけなに抱きついた。

○

その夜、けなの[illegible]皆が家の屋根の上に集められた。

「それで、[illegible]、どこで何してらしたっておっしゃってたの？」

不二子（ふじこ）が興味津々な様子で聞いた。

「なんか、森でずっと本を読んでたって。世界中のいろんなことをのぞき見できるから退屈しなかったんじゃないかなぁ」

けなは言った。

「あいつらしいな。ところで、[illegible]？」

紬が聞いた。

「大丈夫だって。なんか、[illegible]さんを倒すのは自分だって思ってたらしくて。あ[illegible]ちゃんのことが気に入らないって言ってた」

「張り合っても無駄だろうに……」
納得し、苦笑をする。
「仕方ないじゃない、私まで来るのにねぇ」
淑恵（よしえ）が肩をすくめた。
と、けなが夜空を指差した。
「来た！」
夜空を見上げると、声が広がった。
そこに、阿弥丸がゆっくりと降りてきた。
けなが羽織っていたマントを持ち出して、降り立った阿弥丸にかぶせ、ついでに抱きついた。
「おい、挨拶してないのに！」
紗有が文句を言うが、けなは聞いていない。抱きついて顔を阿弥丸の胸にうずめた。
「ああっ！　ずるいですわ！　わたくしも！」
天子も阿弥丸に飛びかかる。阿弥丸は押し倒されて、屋根からずり落ちそうになっていた。
「あ、挨拶するから、離れてよ。まずは」
阿弥丸が言った。そして、騒ぐ人たちを引きはがし、立ち上がって照れくさそうに頭をかいた。
「ただいま。帰ってきたよ」
「おかえり！」

翠が言った。またも「け」など平手を飛ばしかかった。彼女はにやにやとしてそれを眺めつつ、ぎゃあぎゃあやっている「け」など手から目を離さずにいる絢の肘でつつく。

「ね、構われたいんじゃないの？　素直にならないと」

「ばっ馬鹿な……そんなことあるものか！」

絢は赤くなって顔を逸らす。



「はいはい」
一馬は苦笑しながら綿の頭を撫でた。
「ええい、こら！　なんだ、その態度は！」
綿は騒いだが、そんな綿に構わず、一馬は「ああ、そうだ」とつぶやき、皆の注目が自分に集まるべく手を叩く。
「はいはい。今日はプレゼントがあるんだよ」
一馬は皆の注目が自分に集まるのを待ってから、ころねのポシェットを取り出した。
それまではしゃいでいた一同だったが、それを見て重い雰囲気が流れる。
「あ……」
「そうだ、ころねちゃんは……」
「ちょっと、あなた、無神経じゃなくって？」
千秋が一馬に歩み寄る。
「大体、プレゼントだなんて言ってそんなものを出して、それは非常識と言うんじゃ……」
その言葉が途中で止まった。
ポシェットから、ぬぅ、と首が出てきて、それに続いてずるずると身体で出てきたからだ。
「え……」
千秋は絶句した。
「ころね！」

阿児が声をあげた。
「ころねちゃん！」
けなと飼い主が声を揃えた。
ポシェットから最後の一足を抜き出し、阿児の目の前に立ったのは、確かにころねだった。
「最初に飛び込んだとき、首輪を拾ってポシェットに入れたんだ。そうすれば、再起動することができるからね」
満足そうに言った。
「で、こっそり修理して、スイッチを入れはしたけど、記憶がちゃんとしているかはまだわからないんだ。私は彼女と付きあいがあったわけじゃないからね。で、どうだい？　記憶はあるの？」
そう満足気に問うと、ころねは何故か頬を染めて、阿児を指差した。
「この人に激しく抱かれた夜の記憶が……」
「あ、こりゃ、確実にころねだ……」
阿児は呆れて笑った。
「はい。帰ってきました」
ころねは珍しく微笑みを浮かべた。そして、阿児に抱きつく。
「おいおい、また悪い冗談」
「冗談はありません。あなたは私の恩人であることも気にせず、愛してくれました。その気持ちには応えないと」

真剣な声でころねは口にした。

「ちょっ、愛って、そんな……」

阿久比はしどろもどろになる。

と、ころねは阿久比に向かって顔を上げる。

「なんて言うと、純情な女の子っぽく見えますか？ ご主人様が新しくなったので、いわば奴婢のもので、奴婢らしく振る舞わないといけないと思ったので」

「あのなぁ……」

阿久比は渋い顔をするが、ころねは阿久比の腰に巻いた腕を離そうとはしなかった。だから阿久比はぽん、と ころねの頭に手を置く。

「まぁ、確かに純情っぽくは見える」

「そうですか、あ、ところで」

そう言って、ころねは、けなに顔を向けた。

「今日から阿久比の御側係になりましたので、いわば監視役です。今後も、よろしくお願いいたします」

ころねは言った。

けなは「！？」と[illegible]

「はい、承知です」

「わーい！ おかえり、そして、よろしく、ころねちゃん！」

けーなは声を張り上げ、ころねに抱きついた。
そして、ころねとけーなは屋根から転げ落ちそうになり、何とか助けられた。皆は笑い声を上げ、その声は家の屋根の上か
ら屋根の下をガンガンと突き上げられるまで続いた。

　　　　○

「自由の革命家集団、そんなものは存在しなかったんだが……」
賢人(けんと)はぼやいた。
彼は今、自分の部屋のカウチに寝転(ねころ)がり、マナスクリーンに映った男と話していた。
「毎度毎度、頭のおよろしいことで。てめぇの思い通りになんでも進むと思ってるような口ぶりだ」
スクリーンの男は苦笑いした。スキンヘッドで、肌が浅黒い。ゴムのような皮膚をしているのが目につい
た。彼は、コードネームを『ラバーズ』。CIMO8(サイモエイト)のメンバーの一人で、かつて『コンスタン[illegible]』を起こった[illegible]
したことがある。
「そうだよ。私の思ったとおりに進まなかった。想定外のイレギュラーなんだ」
賢人は冷然と言い放った。
「じゃあ、CIMO8がずいぶん減ってしまったことも織り込み済みだって?」
ラバーズは悪態をつく。

「それは合格だ。ドジを踏んだ結果だよ。でも、次の一手をどう動かすかは私にも判断しにくい」

「それは審査官が代わったからか？」

「そうだ。おかげで『最後の審判』をクリアするための運勢が少し悪くなった」

「おめぇは真面目な望一郎(ほういちろう)の旦那(だんな)の遺言(ゆいごん)を守らねぇ」

「彼よりうまくやってみせるさ。私は彼と違って結構抜け目ないからね」

「それじゃ、運勢が悪くなったってのは何だよ。上手くなってみせるんじゃねぇのか」

ラバーズの表情も賢人の表情も変わらなかった。

「イレギュラーが関わっているからまずいのさ。審判の前にも候補者があと何人かいるはずだ。そいつらが（てい）

をほしがったら、ちょっと面倒だ」

「俺たち自身はそんなに興味はないぜ」

「私もないよ。そこだけは意見が合うな。だが、最後の審判に勝つには自分の意志でなくちゃならないんだ」

賢人はそう言って、会話を打ち切った。

あとがき

毎度有りがとうございます。水城正太郎です。

前回からの続きの今回、ひとまずの決着という形となりました。いろいろありましたが、まずは担当編集者
たことを喜んでおきます。ばんざーい。

とはいえ、まだ続きはあるようで、まとめの話を用意しておきつつ、新しい内容を入れ直さなければならない
ところですが、次巻は連作短編集という形。ちょいと外伝的なお話をお届けしようかと思っておりま
す。淑恵が後輩を誘うからむか、とか、[illegible]ところでは、生徒会の話もできたらいいなぁ、と
伐としていない話がお好きな方は、ご期待くだされば幸

さて、そして、いよいよアニメも始まりますね。
新刊をお買い求めの方は、帯の情報、それ以外の方はホームページを参照いただき、ご覧くださいませ
このあとがきを書いているのは、ちょっと前になりますので、声優さんの収録現場か
見学しておりませんが、それだけでも十分に面白かったので、がっつり期待してください。
その現場では、いろいろと楽しいことがありました。

ころね役　悠木碧さん　作中のシフォンケーキがふるまわれたり
[illegible]役　[illegible]さん　渾身の色っぽい演技を　鳥井美津子役　たかはし智秋さんと　不二子役　伊藤静さんが撮影したり
[illegible]役　[illegible]さんを囲んで写真撮影している声優さんたちを見たり
いや　まぁ　何か偏っているのは気のせいですが
そんなわけで、[illegible]現場でご迷惑をおかけしていたわけですが　関係者の皆様も　そんな楽しい現場の雰囲気を感
ていただければと思います

そんなこんなで、ちょいと無駄話　ご多分に漏れず　冬季オリンピックなどをテレビ観戦し「カ
リングおもしれー」などとつぶやいていたのですが　あれって　プレイする側の状況もが
されている　競技として見方からといって　実際に趣味でできるようなものでなく　ちょいとがっ
かりですね　しかし　本場カナダでは　パブでお酒を飲みながらやる環境があるそうで　日本でも
ビリヤードみたいな感覚なのだとか　なんか世界は広いっすね　凍ったリンクで　酒を飲んで石をブラシで
振り回すのって楽しいと思うんだけどなぁ……。

最後に謝辞を
ますます増える関係者の皆様全体を把握しておりませんし　ご挨拶できていない方もいらっしゃいます
が　ありがとうございます　いつも感謝の一言です

担当編集のO様には、今回もクオリティアップのために粘っていただき、ありがとうございます。勉強になりました。

そして、何より、伊藤宗一さん。毎度遅れてご迷惑をおかけしておりますが、そんな虫コミックスに、周辺関係者エックと考えられぬほどの激闘ぶり、心強く思っております。

もちろん、読者の皆様のご支援でここまで来れたことに感謝。これからもよろしくお願いいたします。まだまだ楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください。……ファンレターのあて先◆

〒151-0053

東京都渋谷区代々木2-15-8

(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部　気付

[illegible]

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。
まぁ、だらだらと趣味としての釣りは続けているわけですが、最近の釣りの最中、釣った魚をバケツに入れておいたら、よそ見している隙に、野良猫に盗まれました。
それはもう見事に。いや、マジで。漫画じゃないんだからと思ってしまった事件。

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。
＜一言＞
アニメのPVの出来の良さに感動！
ついに始まるという感じですね。
アニメと併せて、発売したばかりのコミックス版「いちばんうしろの大魔王」2巻
もよろしくお願いいたします。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT 9

2010年4月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8